
加音町での転生生活

龍星皇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

加音町での転生生活

【Nコード】

N3183R

【作者名】

龍星皇

【あらすじ】

不慮の事故で死んでしまった高校生が、仮面ライダーオーズ^{オーズ}の力を得てスィートプリキュアの世界に転生する。欲望を切り裂く剣と人々を幸せにする音楽が出会う時、世界に正義の風が吹く!!!

プロローグ（前書き）

駄文ですが、もし良ければ読んで下さい m (_ _) m

プロローグ

気がつくと、辺り一面が真っ暗だった。

周りには誰もいない。ただただ暗い空間に、俺は一人佇んでいた。

「ここは・・・どこだ・・・？」

「ここはあの世とこの世の狭間、『間世』です」

声のする方を振り向くと、神秘的な服装をした少女が立っていた。

「こちら側の不手際で、あなたの余生がすべて消滅してしまいました。よって、貴方には違う世界で新たな人生を過ごして頂きます」

不手際で余生が消滅？何かとてもない事件が起こったのだろうか。

「ちなみに、不手際って何があったの？」

俺の言葉に、少女は少し気まずそうな顔をする。

「・・・か」

「か？」

「神様が・・・ご自分の古い同人誌と一緒に、処分してしまって・・・」

OK、これから殴りに行って良いかな？

「そ、その代わり！転生先で使える能力を、お詫びとして何か一つプレゼントするそうです！」

能力？うーん・・・

「OOOで」

「OOO？」

「そう、仮面ライダーOOO。オーズドライバーと各コアメダル2枚ずつセットで」

すると少女は袖からオーズドライバーとメダルバイNDERを取り出し、俺に渡してくれた。

「どうぞ。どこから出したかは突っ込まない方向で」「あ・・・どうも」

オーズドライバーとバイNDERを受け取った瞬間、俺の体が輝きだ

した。

「どうやら、時間のようですね」

だんだんと少女の姿も遠ざかっていく。

「待った！最後に聞きたい！俺は一体どんな世界に転生するんだ？」
すると少女はにっこりと微笑み、俺にこう告げた。

「スイートプリキュアの世界です」

・・・え？

〇〇〇、颯爽登場！！（前書き）

被災してから、2週間。

やっと投稿出来ました。駄文ではありますが、読んで貰えれば嬉しいです、被災した方を少しでも元気づけられればと思います。

ここで報告を。

この小説の主人公、「黒霧 琥珀」は紅先生に考えていただきました。紅先生、ありがとうございますm（――）m

プロフィール等はその内書くとは思いますが、この小説の感想ページに紅先生に書いて頂いたものがあるのでそちらもご参照下さいm（――）m

それでは第一話、お楽しみ下さい（＾ー＾）

〇〇〇、颯爽登場！！

俺の前世が神様の古い同人誌と一緒に捨てられてから14年が立った。

14年・・・長かった。

まさか赤ん坊の頃から既に意識があるとは思わなかった。

いろいろと・・・人として大切なものを失った気がする（；、）

おっと、名乗り遅れたな。俺の名は「黒霧琥珀」。

自己紹介はさておき、この14年間、まったくオースドライバーは作動していない。コアメダルには異常はないが、ドライバー自体は石板の様な状態で、串田ボイスなどまったく聞けそうにない。さらに悪いことに、俺にはこの世界の原作知識がない。

何故なら、俺の命日はハトプリの最終回の放送日だったからだ。

きつと見事に原作ブレイクを敢行する事だろう。

なんてことを考えていたら、制服のポケットの中で携帯が震えた。どうやらメールのようだ。

『新作のケーキが出来たから、良かったら食べにこない？家庭科室で待ってます　　奏』

今日はついてるかもしれない。

この14年間、奏の作ったケーキ以上のスイーツを食べた事がない。そう断言出来るほど、奏のケーキは美味しいのだ。

俺は急いで家庭科室へと向かった。

で、家庭科室。

俺は家庭科室のドアを叩き、中に入った。

「お邪魔します。奏いますか？」

「こんにちは、黒霧くん。奏ならあそこでオーブンとにらめっこしてるわよ？」

あれ？新作出来たから呼んだんじゃないの？

俺は奥のオーブンからまったく目を離さない少女の近くに歩み寄る。
「・・・で、新作はもう出来てるのか？それとも今オーブンの中に入ってるのがそうなのか？」

オーブンの中をじっと見つめていた少女、「南野奏」は飛び上がって驚いた。

うん、ナイスリアクションだ。「こ、琥珀くん！来たなら来たってちゃんとやってよ！」

お邪魔しますって結構でかい声でいったはずだがな。

「で？そのオーブンの中のは？」

「この中？琥珀くんが来るまでちょっと時間あると思ったから、クッキー焼いてたの」

んな時間かかるもんを短時間でパパッと作れるってのがすげえよ。

「でもちょうど良かったわ。そろそろお茶にしようと思ってたの」
振り向くと既に、ケーキが数ホールと紅茶が用意されていた。

スイーツ部・・・恐ろしい子たちだな。

「美味い！やっぱりうちのスイーツ部はレベル高いねえ。そこのの

ケーキ屋とは核が違うよ」

まさにこの世の天国だ。転生して良かった。

「そんな、いくら何でも誉めすぎよ？ 私たちなんてまだまだよ」

微笑みながら謙遜する奏。かーいいなあ。

「本当だつて。だいたい奏、プロの娘なんだからもつと自信持つて・
・・？」

ふと視界に、手が入ってきた。テーブルに着いている誰のものでもない。下から伸びてきて、ケーキを鷲掴み、戻って行く。

このパターンは・・あいつだな。

俺は手の持ち主がいるであろう場所に、軽く拳骨を落とす。

「おいこら窃盗犯。俺のケーキを盗み食いするんじゃないポカリ。」

「いったゝゝゝ！！ちよつと何すんの・・・って琥珀！？あんた
なんでここにいるのよ！？」

「こつちの台詞だ。早く俺のケーキを返せ」

この少女の名は「北条 響」。奏と同じく、俺の幼なじみだ。

響は「いろんなスポーツを楽しみたい」と言う理由から特定の部活には所属せず、様々な部活の助っ人をやっている。

ケーキを作るのが得意な奏と、運動神経抜群の響。

二人とも、俺とはそれなりに仲が良いのだが・・・

「ひゝびゝき」

奏が肩を怒らせてこつちにやってきた。

「いつも勝手につまみ食いしないでって言ってるじゃない！」

「別に良いじゃん。どうせいつも余るでしょ？」

「だからって、断りもせずに食べて良い訳ないでしょ！それに今日は琥珀くんもいるんだから、余るわけないじゃない！」

「何よそれ！なんで琥珀が良くてあたしが駄目なわけ！？」

また始まった。

この二人、確かに俺「とは」仲が良いが、二人自体はかーなり仲が悪い。

昔はそんなでもなかったんだが、とある事件をきっかけに、今や顔を付き合わせただけで言い合いが始まるような状態だ。

「まあまあ二人とも、その辺にし・・・」

「琥珀「くん」は黙ってて！！！プレイステーション30が出るまで！！！！」

「あと何世紀待てと！？」

やれやれ、仲が良いんだか悪いんだかわかんねえな。

さんざん言い争いをしたあと、響は足早に家庭科室から出ていった。俺は、分かりやすく落ち込んでいる奏に声をかける。

「・・・また失敗したな、仲直り」

「・・・うん。なんでいつもこうなっちゃうんだろうね」

奏は頑固だからな。響にも言える事だけだ。

二人ともお互いの仲を修復したいと思ってるくせに、素直に謝れないから余計に意固地になって言い合う。そんな所が、お互いの事をよく知る人間としてはもどかしく思う。

「なあ奏。久しぶりに、『調べの館』に行ってみないか？あのレコードを持って行ってさ」

「・・・そうだね。最近ぜんぜん行ってなかったし、気分転換にはちょうど良いかも」

「なら決まりだな。10分後に迎えに行くから、準備しといて」
ちよっと急ぎ過ぎかもしれないが、それぐらいじゃなきゃ、あそこで

落ち込んでいるだろう響に合わせられないからな。

この町には、「調べの館」と呼ばれる大講堂がある。大講堂と言っても、荒れ果てていて本来の使い方をされていなかったため、昔、俺たち三人はここを溜まり場として、毎日の様に遊び回っていた。

そのため、この場所は俺たち三人にとって思い入れのある場所だ。

「琥珀くんとここに来るのも久しぶりだね」

「確かにな。中学あがってからはどっかの誰かさん達が喧嘩しちまったから、ここに皆で来ることはなかったしな」

「う・・・」

少し嫌味混じりでちやかす。

とりあえず、奏を連れてくるのには成功した。あとはここで落ち込んでいるであろう響と引き合わせて、さっさと仲直りさせてしまおう。

「あれ・・・響？」

奏の視線の先には、確かに響がいた。

白猫を抱えて、黒猫を連れとおっさん三人組と対峙している。

「おい響、何してるんだ？」

「琥珀に奏？なんでここに？」

その答えを返す前に、驚くべき事が起きた。

「ふっ、まさかこの世界にト音記号を持つ人間が二人も居るなんてね！音符を探し始めたばかりだというのに、メフィスト様に良いご報告が出来そうだわ！」

「ね・・・猫が喋ったあ！」

おっさん三人組が連れている黒猫が日本語を喋りだしたのだ。
まあ英語とかタガログ語とか話されたらもつと驚いていたかもしれないが。

「トリオ・ザ・マイナー！あの小娘どもからト音記号を奪いなさい！」

「おまかせを」

なんだこのおっさん達は。しかし、そんな事を考えている暇はなかった。

三人組は響と奏めがけて飛びかかって来た。

この距離では響と奏の両方を俺一人で守り抜くのは難しい。

「響！こつからじゃ間に合わねえ！俺がそっちに行くまで一人で持ちこたえられるか！」

「なんとか頑張ってみる！ここでやれなきゃ、女がすたる！」

そう言いながら、響はピンク髪のおっさんの拳を払いのける。

さて、今度は俺の番だ。

斜に構えて、左足に体重をかけて上半身を前に傾ける。俗に言うクラウチングスタイルってやつだ。

「その女をわたせえっ！」

青い髪の男が飛びかかりながら、右拳をつき出す。

不用意だねえ、カウンターの使い手に・・・

「んなでかいパンチ放るなんてなあ！」

相手のパンチを避けて、弧を描くように俺の右拳を相手の顔に叩き込む。いわゆる一つの・・・

「ジョルトJOLT・・・カウンター！！！」

青髪の男を叩き伏せ、奏の方を振り返る。

しかし、もう遅かった。

奏の背後には、緑色の髪と髭を持つ一際大きな男が拳を振り上げている。

「奏っ！！！！」

「え・・・？」

拳が降り下ろされ、奏の胸を、貫いた。

「しまった！！」

「きゃあああああ！！！！」

後ろで響の叫び声も聞こえる。どうやら響もやられたようだ。

しかし次の瞬間、二人の胸元が輝いたかと思うと、二人を貫いた男達が弾き飛ばされた。

「は・・・？」

何がなんだか分からねえ。いったい何がどうなってやがる。

「何故だ！？何故奪えない！？」

「当たり前ニヤ！」

ん？

「ト音記号は音楽を愛する者のみが手にできるニヤ！そしてそれは、伝説の戦士プリキュアの証でもあるニヤ！」

また猫喋っちゃったよ。今度は響の連れていた白猫がだ。

いや、そんな事より。

「おい、その白猫！」

「名前はハミイニヤ。よろしくニヤ」

「あ、これはご丁寧にどうも。俺は黒霧琥珀です・・・じゃなくて！！」

危なかった。危うくこいつのペースに乗せられる所だった。

「さつき二人の事を伝説の戦士だとか行ってたな！って事は、なんか変身するためのアイテムとかあるんだろ！」

「もちろんニヤ 二人共、これを使うニヤ！」

ハミイと名乗った白猫は二人に神秘的な雰囲気醸し出すアイテムを渡した。

「その『キュアモジュール』をかざして、息を合わせて『レッツプレイ！プリキュアモジュール！』って叫ぶニヤ！」戸惑う二人。それはそうだろう。いきなり喋る猫に突拍子もない事を指示されているんだから。

「ふん！そんな小娘どもに何ができるって言うの！？たえプリキ
ュアになれるとしても、その前に始末させてもらっわ！その音符
を使ってね！」

黒猫が訳分からん事を言い出した。音符？なんだそりゃ。

「出でよ！ネガトーン！！！」

黒猫がそう叫ぶと同時に、奏の持ってきたレコードが一瞬にして怪
物になった。もう驚くつもりもない。今俺の中には怒りしかない。

「てめえ・・・よくも！」

「あたしたちの・・・」

「思い出のレコードを！」

「「絶対に許さない「ねえ」！！！！」」

響と奏が、キュアモジューレをつき出す。

「「レッツプレイ！プリキュアモジューション！！！」」

まばゆい光と共に、響はマゼンタの髪と、髪と同じようにマゼンタ
を基調としたコスチューム、奏は白を基調としたコスチュームに金
髪という姿になる。

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！！」

「爪弾くは、たおやかなる調べ！キュアリズム！！」

「「届け、二人の組曲！スイートプリキュア！！！」」

よし俺も・・・と思っただが、まだオーズドライバーは石板状態。戦
える状態ではない。

「くそっ・・・！」

悔しいが、ここは二人に任せるしかない。

しかし、現実はあるに甘くはなかった。

もともと普通の女子中学生だった二人が怪物との戦闘に慣れている
訳もなく、相手の攻撃を避けるのが精一杯。

しかも、お互いの息があっっておらず、避けられる攻撃も直撃をくら
う始末。

おまけに。

「ちよっと！足引っ張らないでよ！」

「メロデイが自分勝手なタイミングで避けるからでしょ！」

「何よそれ！自分がどんくさいのを私のせいにするわけ！」

あれやこれや。

いつものノリで喧嘩し始める。

イライラしてきた。

「二人共、喧嘩しちゃダメニャ！」

ハミイの言う通りだ。イライラしてきた。

「ほーほっほっ！！！！伝説の戦士とやらも大したこと無いわねえ！」

！！ネガトーン！プリキュアを叩きのめしておやり！」

ブチン！

「「「「ブチン???」「」「」」」

「・・・さつきから黙って聞いてりやどいつもこいつもグダグダ好き勝手言いやがって！！！」

「「琥珀「くん」！？」「「ニャプ？」

「はあ？」

プリキュア二人と二匹の猫がそれぞれ首を傾げる。

「キュアメロデイ！キュアリズム！もともと一般人で戦闘に慣れないから戦闘の内容が不甲斐ないのはまだ良い！だけどな、それをパートナーのせいにしてグダグダ言い合うのはよせ！大体てめえらが喧嘩してんのだつて下らない勘違いからだろっが！」

次に俺は黒猫の方を向く。

「その猫！人様の宝物勝手に化け物にしといて何偉そうに悪人してやがる！！！！ちよつとは空気を読みやがれ！」

そして足元のハミイを見る。

「ハミイは・・・特になし！」

「ありがとうニャ 嬉しいニャ」

このやりとりに俺とハミイ以外はずつこける。

「ふざけるな！ろくに戦う力も持っていないガキが、このセイレーン様に楯突こうと言うのか!？」

「戦う力なら・・・ここにある！！！！」

俺はオーズドライバーを取り出す。いつのまにか石板状態ではなくなっている。オーズドライバーを腰に装着し、タカ、トラ、バッタのメダルを装填する。

左手でバツクルを傾け、右手でオースキャナーを取り出して、バツクルに装填した三枚のメダルをスキャンする。

「変身！ー！！」

【タカ・トラ・バツタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！ー！！】
お馴染みの歌と共に、俺はオーズの初期フォーム、タトバコンボに変身した。

「何！？」

「ニャプ！？」

「琥珀（くん）！？」

二人と二匹は驚きを隠せないらしい。まあ、どちらの世界も『仮面ライダー』が実在しない世界だからしょうがないかもしれないが。

「貴様・・・いったい何者だー！！」

セイレーンと名乗った黒猫が叫ぶ。振り方がナイスだ。

俺は右手で指鉄砲を作り、こう答えた。

「通りすがりの仮面ライダーだ・・・覚えておけ！ー！！」

〇〇〇、颯爽登場！！（後書き）

琥珀「（第一話を読みながら）なあ作者」
なんだい琥珀君や。

琥珀「確か紅先生が感想ページに書いてくれた俺の性格は『クール』
だったはずだよな？」

うん。確かにそう書いてあった。

琥珀「第一話の俺、クールとは程遠い気が・・・」
う・・・

琥珀「甘党なのはまだ良いとして、ツツコミスキルがなかなかのも
のだったり、いきなりキレたり、ラストの口上なんてノリノリだっ
たじゃないか。まあ楽しかったけど」

なにぶん実力不足なもので・・・クールな主人公をどう描写してい
いのか分らず・・・（泣）

琥珀「じゃあこれから頑張ろうぜ？俺もオーズとして頑張るからよ」
おう！俺たちの戦いはこれからだぜ！

琥珀「打ち切り臭がプンプンするな・・・まあ良いや、次回、『メ
ダルと音符と仲直り』お楽しみに！」

メダルと音符と仲直り（前書き）

昨日投稿してから勢いで書き上げてしまったオーズとプリキュア誕生編の後編。

この話を書いていて思った事が一つ。

・・・一人称でバトル描写って難しいですね（・・・）

遅くなりましたが、皆様感想ありがとうございますm（――）m
これからも頑張っていきますので、よろしく願います（＾ー＾）

メダルと音符と仲直り

これまでの3つのあらすじ！

1つ！

スイートプリキュアの世界に転生した主人公、黒霧 琥珀と、この世界での琥珀の幼馴染み、北条 響と南野 奏の前に、ハミィと名乗る白猫とセイレーンと名乗る黒猫が現れる。

2つ！

セイレーンによって、三人の思い出のレコードがネガトーンと呼ばれる怪物へと変えられる。

3つ！

響と奏は、ハミィに与えられた「キュアモジューレ」により、伝説の戦士「プリキュア」に、琥珀は転生時に与えられたオーズドライバーとコアメダルを使い、「仮面ライダーオーズ」へと変身した！！

「仮面ライダー・・・だと!？」

「おう。仮面ライダーオーズだ。宜しくな？」

わざとらしい仕草を取りつつ、俺は内心焦っていた。

いつでも戦えるようにとトレーニングは欠かさずにはいたが、オー

ズの力でネガトーンを倒せるのか、また倒せたとして、元になった物体を無傷で戻せるのか。

心配事だらけだ。ネガトーンを倒したとしても、レコードを砕いたら今度は俺が悪者だしな。さてどうするか。メガトーンと対峙しながら焦っている・・・

「ふん、その息のまつたく合っていないプリキュアはともかく、あんたみたいなのが出てくるとは計算外だったわ！お前たち！ここは一旦ずらかるわよ！」

こう叫ぶやいなや、セイレーンはネガトーンとトリオ・ザ・マイナーとか呼ばれた三人組のおっさんを引き連れてさっさと逃げていった。

よし、これでいろいろと整理する時間が出た。

さてと・・・

俺は変身を解除して、二人とハミイの方に向き直る。

「さて、なにから整理する？」

場所を移して、「調べの館」内。

「ハミイ。まずはプリキュアについてと、セイレーン達について説明してくれるか？」

「分かったニャ プリキュアは、ハミイが住んでたメイジャーランドに古くから伝わる伝説の戦士ニャ」

「メイジャーランド？」

「ナイスハモリだ。この二人、仲違いしてるって設定忘れてるんじゃないかなろうか。」

「メイジャーランドは、どんな所にも楽しい音楽が溢れている素敵

な所ニヤ 王宮では、アフロディテ様によって世界中に幸せを届ける『伝説の楽譜』が保管されているニヤ けど・・・」
「・・・けど？」

今度は俺もハモる。しょうがないだろ。俺も気になるんだから。

「その楽譜は、マイナーランドの王メフィストによって『不幸の楽譜』に書き換えられそうになったニヤ。けど、その直前でアフロディテ様が音符をこの世界に飛ばして、ハミイが飛ばされた音符の回収をする事になったニヤ」

「じゃあ、その音符がセイレーンの力で怪物になったのがネガトーンって事か？」

「その通りニヤ 琥珀は物分かりが良いニヤ」

いやあそれほどでも・・・と照れていたら、響が語りだした。

「そんなことより、さっきのあれは何なのよ」
さっきのあれ？

「だから、ネガトーンは」

「ネガトーンの事じゃないわよ！！」
声を荒げる響。

「さっき琥珀が変身したあの姿は何なのって聞いているの！」

「私も聞きたいわ。琥珀くん、隠さないで本当の事を話して」
奏も真剣な表情で俺に向き直る。

二人共、かなりマジだ。

しょうがない、少し嘘を交えつつ説明しなくては。

「あれは仮面ライダーオーズ。別の世界で、グリードやヤミーと呼ばれる怪人と戦う戦士だ。」

「別の・・・世界？」

「パレルワールドって事？」

疑問だらけの二人。そりゃそうだろうな。

「俺たちが住むこの世界の他にも、いろんな世界があるんだ。青ダ
ヌキみたいな猫型ロボットが実在する世界だったり、王様の決闘は
常にエンターテイメントでなければならぬ世界だったり、ハミイ

の言つてたメイジャーランドだつてそうだ」

一瞬「僕はタヌキじゃない!!」って叫びが聞こえた気がしたが気のせいだろう。

「俺は、ある人からベルトとコアメダルを渡されたんだ。『この世界の為に使え』って」

間違つてはいないはずだ。

「じゃあ、この世界は英雄の琥珀さまに任せれば安泰な訳ね。後は任せたわよヒーローくん」

そう言いながら響は帰ろうとしていた。

「任せたつてお前、お前と奏はプリキュアだろうが」

「私はやらないわよ。少なくとも奏なんて絶対に嫌」

「私だつて、響と一緒に絶対に嫌よ!」

「何よそれ! さっきの戦闘だつて奏が足引つ張ったくせに!」

「響が自分勝手なタイミングで何でもやろうとするからでしょ!？」
またぎやあぎやあ言い合う二人。

「アワワ・・・琥珀、何とかならないかニヤ?」

何とかするさ。中学に入ってからずっとなんとかしようと思つてきたんだ。

「もう良い。二人の言い分は分かった」

俺の一言に二人はピタリと言い合いを止める。

「明日はちょうど土曜だ、てめえらの仲を修復してやる。明日の午前9時、入学式の時にいた桜の前に立つてろ。今日の所はハミィとキュアモジューレは俺が預かつておくから」

で、次の日。

俺は二つのキュアモジュールを持ち、ハミィを連れて、正門へと繋がる桜並木へと向かった。

桜並木に着くとそこにはすでに響が立っていて、少し憂鬱そうな顔をしていた。

「よう。早かったな」

響は虚ろな目で俺を見た。

「・・・ほら、奏はどこにもいないわよ。まあ、入学式の日になかったくせにここに立つなんて出来ないだろうけど」

響と奏の喧嘩の理由。それは、入学式の日、桜並木で待ち合わせをして、一緒に学校に入ろうという約束をしていた。しかし、響が言うには、いつまでたっても奏は現れず、それどころか他の生徒とすでに敷地内に入っていて、奏が自分との約束を破った、という事からつまらん喧嘩が始まったらしい。

「いやいや、奏ならもう着いてるぜ？」

「何言ってるの？奏なんてどこにもいないじゃない」

「付いてくれば分かるさ」

俺は敷地内に入って、響を案内した。

・・・もう一ヶ所の桜並木の前で佇む、奏の元に。

「奏・・・何で・・・？」

響の問いに、俺は静かに語りかける。

「奏はずっとあそこでお前を待ち続けてたんだってよ。でも、いつまでたつてもお前は来ない。だから」

「奏っ！！！」

人の話は最後まで聞けよ。まあ良いけどな。

「響！？」

「ごめんね奏、あたし、あたし・・・」

奏の胸で泣き崩れる響。こんなタイミングでなければうらやましいと思っただろう。

「良いのよ響。謝るのは私の方。私だって、約束を破ったのには変

わらないんだから」

うんうん、感動的だ。

「ふんっ！下らない馴れ合いしちゃって、バツカじゃないの？」

俺たち三人と一匹が振り向くと、セイレーンとネガトーンがこちらを見ていた。

「ネガトーン！あいつらをギタギタにしておやり！」

「ネガトーン……！」

俺はオーズドライバーを装着しながら、二人にキュアモジューレを投げ渡す。

「二人とも！……やるべき事は、分かるよな？」

二人はお互いの顔を見合せた後、俺と同じようにネガトーンに対峙する。

「あのレコードを取り戻す為じゃなく……」

「私達の、友情の為に……！」

「「レッツプレイ！プリキュアモジューション……！」」

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪弾くは、たおやかなる調べ！キュアリズム！」

「「届け！二人の組曲……！スイートプリキュア……！」」

今度は、俺の番だぜ！

「変身！」

【タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ……！】

「さあ、アゲてこうか……！」響と奏はキュアメロディとキュアリズムに、俺はタトバコンボに変身する。

「ネガトーン……！」

ネガトーンは砲弾のような物を俺たちに向けて撃ち込んでくるが、メロディとリズムは横っ飛びに、俺はバッタレッグを使って真上に飛ぶ。

「しゃらくせえ！」

そのままトラクローを展開し、着地と同時にメガトーン目掛けて踏

み込み、トラクローでネガトーンを切り裂く。

「ネガトーンー！？」

「今度は！」

「私達よ！」

メロディとリズムが抜群のコンビネーションでメガトーンを蹴り飛ばす。

さて、本音はさっさと決めたいんだが、流石にまだ早い。

俺はトラとバッタのメダルをカマキリとチーターのメダルに変えて、改めてオースキャナーでバツクルをスキャンする。

【タカ・カマキリ・チーターー！！】

俺はタトバコンボから、亜種形態の内の一つ、タカキリーターへとコンボチェンジする。

「行くぜー！！」

俺はチーターレッグのスピードを生かしてネガトーンの周りを高速移動し、すれ違い様にカマキリソードで何度も斬りつける。

「ネガ・・・トーンー！！」

ネガトーンは巨大な腕で俺を吹き飛ばそうとしたが、俺はスピードをトップギアに入れて回避する。

「さあて、そろそろ決めるか！」

カマキリとチーターのメダルをトラとバッタに戻してスキャンする。

【タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！】

タカキリーターから再びタトバコンボへ。

「メロディー！リズム！一気に決めるぞ！」

「OK！」

「分かったわ！」

俺はオースキャナーでもう一度メダルをスキャンする。

【スキャニングチャージー！！】

「はっ！ー！！」

俺は空高く跳び上がり、男なら一度は放ってみたい必殺技の体勢に入る。

地上では二人が、必殺技の準備をしている。どうやら、俺の意図を察知して同時に放ってくれる様だ。

「行くぜ！ライダアアア！キイイック！！！」

「プリキュア！パッションートハーモニー！！！」

俺の必殺技、正式名「タトバキック」と二人の放った光線がネガトーンに炸裂する！！！

「ネガ・・・トオオオオン！！！」

眩い光と共にネガトーンは消え去り、その場にはレコードが落ちていただけだった。

「やったニヤ三人共！音符も回収できたし、レコードも戻ってきたし、至れり尽くせりニヤ」

ああ、ネガトーンって音符が怪物化してたんだっけ。

響と奏は変身を解除して、俺の元に駆け寄って来た。

「琥珀、ありがとう。あんたのおかげで、奏と仲直りできたよ」

「でも、なんで今まで何も言ってくれなかったの？」

「どうせそのうち仲直りするだろうと思ってただけだな？どっかの誰かさんたちがつまらねえ意地の張り合いしてるからいつの間にかこじれにこじれてな」

「う・・・」

苦い表情を浮かべる二人に、俺は微笑みかける。

「けど、こうして二人も仲直り出来たんだ。皆で何か食いに行こうぜ？」

「さんせ~~~~い！」

「ただし！」

「ただし？」

「さんざん俺に迷惑かけてきたんだ・・・全額お前らのオゴリな？」

「ふ・・・ふざけるなあぁ！！！」

こうして、俺たちの関係は『絶賛喧嘩中の女子二人と、二人の仲を取り持とうと奔走する男子』という物から、『仲の良い幼馴染みで、

戦友の三人』になったのであった。

メダルと音符と仲直り（後書き）

さて、次回の「かの てん」は？

琥珀「琥珀です。最近女友達が俺に恋愛相談をするのですが、彼女は俺も一応男だということにいつ気づくんでしょうか。そりゃ昔は一緒に風呂とか入ってたけどさぁ……。ってな訳で次回「チームとケーキと紅蓮のコンボ」。んで作者。「かの てん」ってなんだ。思いつきり某四コマのパクリだろうが」

お楽しみにっ

琥珀「人の話を聞けえっ！」

チームとケーキと紅蓮のコンボ（前書き）

2日で一話仕上げるって、俺どれだけ暇人なんだ・・・

琥珀「これも学校が休校だからこそ出来る技だな」

俺にはこれくらいしか人を元氣付けられる方法が思い付かなくてね。

琥珀「それじゃあ、『チームとケーキと紅蓮のコンボ』始まるザマスよ」

行くでガンス。

ハミィ「フニャア」

響&p;奏「・・・怪物くん？」

チームとケーキと紅蓮のコンボ

「はあっ！」

タカジャバに変身した俺に向けて同時に蹴りを繰り出すメロディとリズム。

「狙いは良いが・・・踏み込みが甘い！」

二人の蹴りを片手で掴み、軽く投げ飛ばす。

「まだまだ！リズム、行くよ！」

「分かったわ！」

着地して体勢を立て直し、必殺技のモーションを取る二人。

「プリキュア！パッションートハーモニー！！！」

それを俺は。

「タジャスピナー！プロミネンスシールド！」

タジャスピナーから発した炎の盾で防ぐ。

「ああ、また防がれちゃったよ」

「でも私たち、結構成長したんじゃない？今まではこの技、琥珀くんには避けられてばかりだったじゃない」

「確かに、リズムの言う通りかも！琥珀、もう一回やるわよ！」

「ちよつと待った！はりきんのは良いけど、少し休もうぜ？」

なぜ俺と二人が実戦形式の組手をしているのか。

それを説明するには、少し時間を遡らなきゃならないだろう。

話は、1週間前に遡る。

桜並木でレコードネガトーンを撃破した後、俺たち3人は2体ほどネガトーンを撃破してきた。

その後、奏の提案により、三人で組手をする事になった。

その理由は奏曰く、

「琥珀くんはともかく、私たち二人はまだまだ経験不足だと思うのだから、琥珀ちゃんと組手すれば少しでも経験が積めると思って」
だそうだ。

それからというものの、ほぼ毎日の様に組手をしている。

ちなみに、タジャスピナーでパッションートハーモニーを防ぐようになったのは、毎回の様に放たれる高威力の光線でいちいち環境破壊をしていられないからだ。

はい、回想終了。

で、奏の親が経営するカップケーキショップ。

「はふう〜 やっぱり奏のケーキは美味しいなあ」

響が恍惚とした表情を浮かべながら奏の作ったケーキを食べる響。

「お前、本当旨そうに食うなあ」

「だって〜、奏のケーキを気兼ねしないで食べられるなんて久しぶりなんだもん」

「確か今までも気兼ねしないで食ってた気が・・・」

「う、うるさいな！細かい事を気にするとモテないぞ？」

「別に良いよ。お前らとイチチャイチャ出来れば」

「うあ・・・」

響が赤面しながらフォークを皿の上に落とす。

「奏、いい加減こういう会話に慣れるよ。お前の憧れの王子先輩だつてこんな会話日常茶飯事だつて」

「お、王子先輩はそんな事言わないもん！」

さつきよりさらに真つ赤になる奏。茹で蛸かお前は。

「王子先輩もモテるけど、琥珀も結構モテるわよね」
は？

「あんた、女子の間で結構人気高いよ？運動神経抜群で頭も良くて、しかも顔だつて良いし、実家は超が付くほどの大富豪じゃない」

「それ、ほとんどの女子が俺の家の金目当てって言ってるようなもんだろつが」

つか、俺らはいつまで駄弁っているんだ？

そんな事を考えていると。

「うわああああ！！！」

どこからか、少年の叫び声がした。

「今の声は！？」

「響、琥珀くん！行くわよ！」

俺たちは、叫び声のした方へと走り出した。

少年の叫び声がした方へ向かうと、やっぱりと言つべきか案の定と言つべきか、ネガトーンが暴れまわっていた。

「少年、大丈夫か！？」

俺が少年に駆け寄ると、少年は震える声で話し出した。

「僕のおもちやが・・・怪物に・・・」

なるほど、そのおもちゃに音符が着いていて、それがネガトーンにされたのか。

俺は改めてネガトーンを観察する。そのネガトーンは、どこからどう見ても……

ヴィクトリーガンダムにしか見えない。

「……えーっと。どこから突っ込めば良いんだ？」

ヴィクトリーガンダムネガトーン、長いからVガンネガトーンで良いや、は俺と少年を標的としたらしく、その腕でビームサーベルを……ってちよつと待て！

「そんなの食らったらひとたまりも無さすぎるだろ！少年、逃げるぞ！」

「う、うん！」

逃げながら後ろを振り向くと、Vガンネガトーンはビームサーベルを取り出してこちらを追って来た。

「……グリップだけのビームサーベルを。」「……え？」

どこからどう見ても刀身となるビームは発生していない。

まあ玩具が元だからこそなのかもしれないが。

「ふざけんなこの野郎！」

道端に落ちていた石をぶん投げる。

「少年、君は逃げる！こいつは俺が食い止めておく！」

「う、うん！」

少年が走り去ったのを確認してから、俺はオーズドライバーを装着していつもの三枚を装填し、スキャンする。

「変身！」

【タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ……！】

「さあ、アゲていくぜ！」

俺はバッタレッグを使って高く跳躍し、Vガンネガトーンの頭部に連打を叩き込む。

「オラオラオラア！」

10発、20発と叩き込む内にだんだんと仰け反っていくネガトーン

ン。

「ネガトーン!!!!」

その状態を打破しようと思ったのか、ネガトーンは巨大な腕で俺を振り払った。

「のわっ!」

滞空していて自由が聞かない俺は見事に吹き飛ばされ、近くにあった店に突っ込んだ。

「いてて・・・」

立ち上がるうとした俺だが、刺さるような視線を複数感じる。その視線がどこから来ているのか確認するべく顔を上げると。

下着姿の女性が大勢。

しかも、俺の頭上には、いわゆるぶらじゃあという奴が乗っている。えーっと。

『『『きやあああああ!!! 特殊なへんたああああああい!』』』

!!!

「失礼しました!!! ってかこのご時世にこんなネタがあつて良いのか!!」

俺はタトバコンボなのにチーターレッグ並みのスピードでネガトーンの元に向かう。

「琥珀!どこで遊んでたのよ!」

再びネガトーンと対峙すると、既に变身していたメロディに叱責される。

「悪い!一撃入れて動き止めるから、一気に決めてくれ!」

俺はバックルのトラメダルをゴリラメダルに変えてスキャンする。

【タカ・ゴリラ・バッタ!!!!】

「ソーラープレキサス・・・ブロー!!!!」

タトバコンボからタカゴリバにコンボチェンジし、ネガトーンの鳩尾(どの辺かは皆様のご想像にお任せします)にゴリラアームの豪腕を叩き込む。

「ネガトツ * @ \$ ¥ ?」

ネガトーンが声にならない叫びをあげる。

「今だ二人共！」

「リズムっ！」

「OK！」

「プリキュア！パッションナートハーモニー！！！」

落下する俺の脇腹を掠めながら二人の必殺技がネガトーンに炸裂する……

はずだったのだが。

「ネガトーン！！！」

ネガトーンは、三体に分離して回避した。

「何！？」

「嘘！？」

「そんな！？」

いくらVガンダムの玩具が元とはいえ、分離機能まで備えているとは。

ネガトーン・トップ、ネガトーン・コア、ネガトーン・ボトム〔勝手に命名〕は俺たちの背後に回り込み、再びVガンネガトーンに合体する。

「そんな・・・分離して攻撃を避けるなんて」

「弱気になっちゃ駄目よリズム！あたしたちが諦めたら、誰があいつを止めるの！？」

ネガトーン的能力に衝撃を受けるリズムと、リズムを励ますメロディ。

「琥珀！何か手は無いの！？」

「何かあったって、飛行できるあいつに、地に足着けて戦う俺たちが出来る事なんて・・・ん？飛行できる？」

忘れてた。俺も飛べるじゃないか。

「メロディ！リズム！ここは俺に任せろ！」

ゴリラとバッタのメダルを、クジャクとコンドルのメダルに。バックルに、赤いメダルが三枚揃う。

オースキャナーでバツクルのメダルをスキャンする時、俺はこう叫んだ。かつて仮面ライダークウガがフォームチェンジする際に叫んでいた、あの言葉を。

「超変身!!!」

【タカ・クジャク・コンドル!!!タ〜ジャ〜ド〜ル!!!】

「さあ、燃え上がるぜ!!!」

タカ、クジャク、コンドルのメダルをスキャンした事で、俺の全身は赤く輝き、左腕にタジャスピナーを装備し、タカヘッドもいつもとは違う意匠の、タカヘッド・ブレイブに変わっている。

「いつもと歌が違ううえに・・・」

「全身、赤い・・・」

驚く二人を尻目に、俺はあの有名な語録をもじった口上を言い放つ。

「おじいちゃんが言っていた・・・深紅の輝きを放つ俺の前には、太陽すら霞んで見える、ってな」

「キザすぎ」

速攻で二人に突っ込まれ、俺はずっこけてしまった。

「あのなあ・・・たまには格好つけさせてくれよ」

「んな事言ってる場合!?来るわよ!」

へいへい。

「はっ!!!」

俺は背中から翼を出して飛び上がる。

「ネガトーン!!!」

Vガンネガトーンがバルカンを掃射する。それは出るんかい。

しかし、タジャドルコンボとなった俺には全く当たらない。

「甘いぜっ!」

タジャスピナーから光弾を打ち出し、Vガンネガトーンに命中させる。

「ネガトーン!!!」

「さーで、これで終了だ!」

バツクルからコアメダルを取り出し、タジャスピナーにセットし回

転させ、そのままオースキヤナーでスキャンする。

【タカ・クジャク・コンドル！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！
！！】

「欲望の業火よ、この身に宿れ！紅蓮の！轟拳！フェニイイイツ
ク！スマツシヤアアアアア！！！」

正式名称は『マグナブレイズ』だが、細かい事は気にしない。

俺は炎の鳥を身体に纏い、Vガンネガトーンに突撃する！

「ネガトーン！！！！」

やはりネガトーンは三体に分離する。

「甘い、甘いぜ！」

炎の輪を飛ばして三体をくくりつけて行動不能にし、そのまま三体
一気に貫く！！！！

その後着地した俺は、こう呟いた。

「・・・南無三！」

ネガトーンは爆発。そこにはVガンダムのプラモデルが落ちていた。

「あ・・・あの・・・」

「ん？」

振り向くと、さっきの少年が地面に落ちていたVガンダムを抱えて
いる。

「どうも・・・ありがとう・・・」

そう言って少年は走り去った。

「琥珀！」

「琥珀君、大丈夫！？」

「大丈夫だいじょ・・・」

視界が傾く。なんだ？

そう考えた時には、気を失っていた。

プリキュアとオーズがネガトーンと戦うのを、ビルの上から観ていた人物がいた。

「やゝつと邪魔者のいない世界にたどり着いたと思ったら、風変わりな変身ヒロインに、オーズまでいるなんて。でもオーズがいる世界のくせに、他のグリードの気配もしないし・・・」

ネガトーンを倒し、倒れた琥珀と、琥珀を抱えた響と奏を見て、その人物は笑う。

「この世界・・・かなり楽しめそうかも・・・」

その人物は、手の平からメダルを落とした。

・・・この世界に存在するはずのない銀色のメダル、セルメダルを。

チームとケーキと紅蓮のコンボ（後書き）

琥珀「今回は俺のタジャドルTUEEE！な回だったな」
ちよっとチート過ぎたかなあ？

琥珀「良いんじゃない？そういうえば感想に書いてあったけど、オールスターズ編はどうするんだ？」

それについては、次の前後編が終わったら、他のプリキュアとのコラボをそれぞれやってからとは思ってたけどな。

琥珀「まあしばらく劇場には行けないだろうから妥当な線かもな」
じゃあそいう事にしよう。それでは次回もお楽しみに。

琥珀「コラボするのは良いけど、あんたフレッシュの放送見てなかったんじゃないか？」

・・・Wikipediaの旦那にお世話になります。

恋と教師と謎のヤミー（前書き）

ついにこの世界にもヤミーが・・・

今回は新キャラと場面変更多めでお送りします。

見にくい部分があると思いますが、よろしくお願いしますm（――）

m

恋と教師と謎のヤミ―

「ん・・・」

目が覚めると、我が家だった。

「お兄様、お目覚めになりましたか？」

声のする方を見ると、妹の刹那がこちらに歩いてきた。

「・・・今何時で、俺はなんでここに寝てる」

「18時です。北条様と南野様が、お兄様が貧血で倒れたので、ここまで連れて来てくださったんですよ」

「・・・まあ、本当の事は言えないしな。」

「最近徹夜続きだね。ちよつと無理しすぎたかな」

そう言つて起き上がる。

「お体は大丈夫なのですか？」

「貧血ぐらいどうつてことねえよ」

立ち上がつて、大広間へと向かう。そろそろ飯の時間のはずだ。

で、夕食。

「琥珀ちゃん、本当に大丈夫なの？お母さん心配だわ」

「俺ももう14なんだから、『ちゃん』ずけは止めてくれよお袋」

「まあ！昔の琥珀ちゃんなら『お袋』なんて言わなかったのに！」

およよ・・・と古風に泣き崩れるお袋。面倒臭い人だ。

「まったく、いい加減にしないか母さん。琥珀もそこまで子供ではないんだから」

呆れながら親父が助け船を出してくれる。

「しかし琥珀。貧血で倒れてしまうお前もお前だ。それに比べどう

だ父さんのこの筋肉！！カッチカチだろう！？カッチカチだろう！？ゾクゾクするだろう！！！」

服を脱いでボディービルのポーズを取る親父。

・・・まったく、どいつもこいつも・・・

次の日。朝飯を食った後、制服に着替え、家を出る。

ここからがやつと心の休まる瞬間だ。

「よう御曹司！元気か？」

しばらく歩いていくとクラスの同級生に声をかけられた。

「お前からみて、この時間帯の俺が元気じゃなかった事があったか？」

しばらくその同級生と世間話をする。昨日見たテレビがどうだったとか、アイドルの誰々が可愛いだとか、そう言うとりとめの無い話を、そいつが彼女と合流して、二人と別れるまで繰り返した。

その後俺も響と奏と合流する。

いつも通りの日常だ。

「ちよつと失礼？聖アリア学園中学校に行くには、どう行ったら良いのかしら？」

振り向くと、27歳ぐらいのセクシーな美女が立っていた。

「俺たち、その生徒ですけど・・・」

「本当に！？もしかしたら、一緒に登校させてもらっても良いかしら？」

そんなお願いを断る理由がどこにあるのか。

「申し遅れたわね。私は禍原 華那子。よろしくね」

「黒霧 琥珀です。よろしく願いします」

「北条 響です」

「南野 奏です」

華那子さんは俺たちを見て、妖艶な笑みを浮かべる。

「北条さんと南野さん、どちらが黒霧君の彼女なのかしら？」

「ふえっ!？」

真っ赤になつてますよお二人さん。

「あらあら、真っ赤になっちゃって可愛いわね 変な事を聞いてごめんなさい」

そんなこんなで、俺たち四人は共に学校へと向かった。

まさかとは思つたけどな。まさかとは思つてたけどさ、ここまでドンピシャだと逆に引くよ。

「原町先生が急病で入院なさった為、今日から皆さんの担任になる禍原 華那子です。宜しくね」

『『『う・・・うおおおお!!!!』』』

歓喜の余り大絶叫する俺以外の男子。

やれやれ。

「琥珀！早く行こうぜ！」

体育の授業前。既にジャージに着替えた友達が俺を急かす。

「分かってるって！」

ジャージを着ながら歩きだし、教室の電気を消してから、俺たちは体育館へと急いだ。

「誰も・・・居ないよね」

一人の少女が、琥珀が先程までいた教室に入ってきた。

少女は誰もいないのを再度確認すると、琥珀の制服に顔を埋めた。

「私の好きな、琥珀くんの匂い・・・私を好きな、琥珀くんの匂い・・・」

「あらあら、ずいぶん面白い事してるわね？」

少女が振り向くと、一人の教師がいた。

「禍原・・・先生。あの、これは」

「勘違いしないで？私は・・・貴女の味方」

そう言っただけで彼女は、銀色のメダルを取り出した。

「その欲望、解放してみない？」

「ぶえつくしよん！」

何故かくしゃみが出た。

「どうした？風邪か？」

「いや、多分誰か噂してるんだろ」

鼻を擦ってからビブスを着て立ち上がる。

チーム交代を知らせるタイマーが鳴り、俺たちのチームがコートに入る。

「さあ、勝ちに行きますか！」

「・・・はあ」

昼休み。

「どうしたの？琥珀くん」

弁当を食べながら奏が問いかけてくる。

「賭け試合に負けたんだって」

「賭け試合!？」

「・・・うちのクラスが勝ったら一ヶ月ジュース奢り。負けたら相手クラスに奏のメイド服姿の生写真」

「あくなるほど・・・って琥珀くん!何勝手に人の写真を賭けてるの!??っていかいつ撮ったのよそなの!？」

「・・・この前知り合いのサークルの売り子してくれた時の奴。もしお望みならもっとエロいのを取り直してでも」

「取り直しません!」

賑やかに飯を食う俺たち。

「そういえば琥珀。この前のは結局なんだったの?」

「この前のって・・・コンボの事か?」

「「コンボ?」」

響と奏が首を傾げる。

「コンボってのは、同系統のメダルを揃えて変身した姿の事さ。ただ、強い力を発揮出来る反面、体に大きな負担を賭けるから多用は出来ないけどな」

響はこちらにジトツとした視線を向ける。

「それ、命の危険は無いのよね?」

「知らん。第一、命の危険があるからって使うのを躊躇って、マイナールンドに負けました、じゃ本末転倒だ」

そう言っていちご牛乳を飲む。

その瞬間、刺すような視線を感じてゾクリとした。

「琥珀くん、どうしたの?」

「いや、今誰かに睨まれた気が・・・」

「あの雌豚ども、私の琥珀君に色目使いやがって・・・琥珀君も、私がいながらあんな雌豚にデレデレして・・・」

ギリギリと歯ぎしりしながら琥珀たちを見つめる少女がいた。

琥珀への屈折した愛情と、響と奏への憎悪から、次々とセルメダルが精製されていく。

（でも・・・もう少し。私の愛が、きっと琥珀君の目を覚ますから。そうですよね、禍原先生・・・）

あつという間に放課後。

俺は響と奏を連れて、近くのアーケード街で遊び回っていた。

服屋やアクセサリーショップを冷やかし、ゲーセンでハイスコア塗り替えやクレインゲームの筐体から某夢の国の住人のぬいぐるみをかっさらっていくのに奮闘したり、三人でプリクラを撮ったりと、青春を謳歌しまくった。リア充万歳。

今俺達は広場のベンチで休憩していた。

「三人でこんなに遊び回ったのって久しぶりだね！」

響が満面の笑みを浮かべている。こういう所は可愛いよねこいつ。

「これも琥珀ちゃんとハミィのおかげよね」

「は？」

「ニヤプ？」

俺とハミィは首を傾げる。ってかどっから出てきた。

「ハミィが私たちをプリキュアに選んで、琥珀くんが導いてくれた

から今の私たちがいるのよ。二人ともありがとう」

「いやあ、それほどでも……」

俺とハミイはデレッツとする。

しかしその時。

「ミツケタ……」

俺達の前に、異形の怪人が現れた。異常なほどに筋骨隆々の体に、巨大な棍棒を携えている。例えるなら、「トロール」と言った所か。

「オマエ……アルジノモノ。オレ、オマエをアルジノモトニツレテイク！」

怪人は俺に向けて棍棒を降り下ろす。

「てめえの都合なんざ知るか！」

俺は怪人の攻撃を避けつつ、オーズドライバーを装着して、タカ、トラ、バッタのメダルを装填して、オースキャナーでスキャンする。
「変身！」

【タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！……！】
タトバコンボに変身すると共に怪人に右ストレートを叩き込む。しかし怪人はびくともしていない。

「この野郎！」

トラクローを展開して切り裂こうとするが、クロー自体が弾かれた上に、強烈な一撃を食らって吹き飛ばされる。

「ぐあっ……！！」

なんて攻撃だ。ネガトーンの比じゃねえ。

「はあっ……」

いつの間にか変身していたメロディとリズムが怪人に拳を叩き込む。しかし、効果はまったく無いようだ。

「……ジャマ」

怪人は二人を俺より後方に吹き飛ばした。

「「キャアアアア……！！」」

怪人は、ゆっくりと俺達の方に向かってくる。

「アルジ、オマエラコロシタイトオモッテル。ダカラオレ、オマエ

ラフタリ、コロス」

二人を・・・響と奏を殺す？

誰だか知らねえがふざけるな。

そんな事したら、いや、そんな事を口にした時点で。

俺が貴様をブチコロス。

「・・・超変身」

【サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ・・・サゴーズ！！！】

「・・・ン？」

俺はサゴーズコンボに変身し、怪人の足を掴み、地面に叩きつける。

「グワツ！？」

そのまま怪人に馬乗りになって、何十回も何百回も殴りつける。

「コロスコロスコロスコロス・・・コロス！！！！」

メロディとリズムが何かを叫んでいるが、聞こえない。

怪人からセルメダルのような物が飛び散るが、どうでも良い。

こいつだけは俺の手で砕き殺す。

しかし、右拳を振り上げた途端、俺の体に異変が起きた。

「なっ・・・あ、ぐわあああああ！！！！」

身体中の筋肉を鋸で引き裂かれる様な激痛が走る。

そのまま変身が解除され、怪人のすぐ横にぶっ倒れた。

「シヌカトオモツタケド、コレデコイツヲアルジノモトニツレテイケル」

怪人は、俺を担ぎ上げ、この場から逃げ去った。

その瞬間、俺の意識が途切れた。

恋と教師と謎のヤミー（後書き）

華那子先生、質問です！

華那子「なあに？」

先生のヤミー、欲望を餌にしてない気が・・・

華那子「はあ・・・だから貴方は作者なのよ」
いや、そりゃ作者ですけど・・・

華那子「良い？私のヤミーはね・・・」

先生のヤミーは・・・？

華那子「次回ゲストが詳しく説明するわ」

丸投げ！？

華那子「それでは次回、『愛とヤンデレと力のコンボ』。あら、次回もサゴーズなのね」

今回扱い酷かったので・・・

華那子「果たして今回だけで済むのかな」

な・・・に・・・？

愛とヤンデレと力のコンボ（前書き）

前回の続きです。かなり強引にまとめてしまいました（- -;）
恐らく今までで最高の駄文ですが、暖かい目で見ていただけたら嬉
しいですm（――）m

愛とヤンデレと力のコンボ

「なあアंक。グリードの中に人間の恋愛に関する欲望でヤミーを作る奴っていたりするのか？」

とあるオーズの世界で、オーズに変身し、グリードやヤミーと戦う青年、火野 映司が、グリードでありながら右腕だけという不完全な復活を果たし、完全復活の為に映司と手を組んでいるアंकに問いかけた。

「あ？何だいきなり」

「いや、何となく」

アंकはアイスキャンディーを食べながら不機嫌そうに答える。

「ウヴァやカザリがそんな事するのはあり得ないだろうなあ。第一、そんな不安定な欲望でヤミーを作るグリードは気違いだ」

アंकはアイスの棒を眺めながら、何かを思い出す様な表情を見せる。

「昔は一人、そういう奴がいたんだけどな・・・」

「昔？800年前にそういうグリードがいたのか？」

「ああ。『不安定な感情こそ最高の欲望を育てる』ってのがそのつの格言でな。絶対に愛やらなにやらが絡んだ人間からしかヤミーを作らねえんだ」

「今そいつは、この時代に復活してるのか？」

「知るか。俺達が封印される前にどっかに消えたよ」

するとアंकが、急に何かに気付いた様な素振りを見せる。

「ヤミーだ。行くぞ映司」

「お、おい！待てよアंक！」

二人はヤミーを倒しセルメダルを回収すべく走り出した。

身体中から変な汁がダラダラと吹き出してくる。

俺もなかなかのヤンデレだと自負してたけど、まさかマジのヤンデレに遭遇するとは。

ゾクゾクするねえ。違う意味で。

「ねえダーリン。ダーリンは私に飽きちゃった？あんな奴ら、ダーリンに何もさせてくれないでしょ？私ならダーリンのしたいこと全部させてあげられるよ？風邪でダウンしても、インフルエンザでダウンしても、妊娠しても、ダーリンがしたいと思う時にさせてあげるんだから。だって私とダーリンは、運命の朱い糸でがんじがらめに縛り付けられているんだから」

絶対「あかい」の字が違うはずだ。

本能からそう確信出来る。そう思った瞬間、俺のポケットで携帯がなった。

「ダーリン電話だよ あの雌豚のどっちかだったら大変だから代わりに出てあげるね」

竜宮さんが俺のポケットから携帯を取り出して通話ボタンを押した。

「もしもし？」

「・・・案外多いんですね。こういう古典的な手に引っ掛かる方って」

電話からこう聞こえた瞬間、特殊装備の厳ついお兄さん達が視界中から出てくる出てくる。

三十人は出てきたかと思ったら、目の前から女性指揮官が歩みよって来た。

「お初にお目にかかります。黒霧総合警備特殊状況対応課第一小隊長の後藤 麗花と申します。琥珀様をお返し頂くためにお伺いしたのですが・・・」

麗花さんが俺と竜宮さんを見つめる。

「琥珀様、一通り終わってから出直しましょうか？」

「いやいやいや！何一通りって！一通りって何ですか麗花さん！？」

「何って・・・ナニですが」

「女の子がそんな下ネタ言っちゃ駄目！」

そんなアホみたいなやりとりをしていると。

「・・・何ですかあなた。私のダーリンに軽々しく話しかけないでくれますか？」

竜宮さんが麗花さんを睨み付ける。

「ダーリン？変ですね、私の記憶では琥珀様は北条様と南野様と淫らなハーレム生活をするという目標を抱いておられたはずですが」

「抱いてねえ！なんだその目標！？」

「抱いておられなかったのですか？残念です。退職したら私も困って頂くつもりでしたのに」

「それただ単にあんたの欲望でしょうが！っていうか、年の差を考えましょう年の差を！」

「シヨタコンなので問題外です」

「問題だらけです！」

なんて性欲に忠実な人だ。

「さて、これ以上琥珀様にセクハラするのはお助けしてからにしましょうか。お返し願えますか？」

「これが見えないの？」

竜宮さんが俺にナイフを向ける。

「あんたたちに取りられるくらいなら、ここで」

ここまででナイフが弾き飛ばされた。

麗花さんが拳銃をぶっぱなして弾いたようだ。

「次はその頭に風穴を開けますよ。それとも性欲処理に使われる穴にしましょうか？」

麗花さん、中学生に言っただけのけるセリフでは無いですよ。

「諦めて投降してください。大丈夫です、警察に引き渡したりはしません。私と一晩過ごして頂ければ結構ですので」

バイだったんだ。

「ふざけないで・・・あんたら全員殺してやる！！！」

竜宮さんの叫びと共に、どこからかトロールヤミーが出てきた。なる

ほど、竜宮さんが親だったのか。

「各員手筈通りに。給金分は働きなさい蛆虫ども」

『『『イエス・ママ！！！』』』

麗花さんの号令のもと、数人が竜宮さんを取り押さえ、数人が俺の縄をほどき、残りがトルルヤミーに対峙する。

「旦那、大丈夫ですかい？」

「サンキュー、ハワード。助かったぜ」

「いや、俺日本人ですぜ」

そう軽口を叩いたあと、彼もトルルヤミーへと向かって行った。俺は隊員の一人に拘束されている竜宮さんに向き合う。

「もう良いよ。ここは俺に任せて」

「し、しかし……」

「ただの同級生だよ。そんなに気にしなくて良いから」

「はっ！了解であります！」

そう言つてその隊員もヤミーの方へ駆け出した。

竜宮さんは人を殺せそうな眼で俺の方を見た。

「ダーリン……何で！？そんなにあたしが嫌い！？そんなにあの雌豚たちが良いの！？何であたしじゃ」

そこまで聞いて、俺は全力で竜宮さんの頬をひっぱたいた。

「俺に惚れてくれたのは嬉しいよ。けど、俺は今の君の気持ちに答えてはあげられない。それと……」

オーズドライバーにメダルを装填しながらトルルヤミーの方に振り向く。

「あの二人は雌豚じゃない。人間だよ」ベルトをスキャンしながらトルルヤミーの元に走り出した。

「変身！」

【タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！！！】

「うおらあ！」

歌が鳴りやむと同時にトルルヤミーにドロップキックを叩き込む。トルルヤミーがよろけたのを見て、俺はメダルをサゴーゾの三枚に

変える。

「この一撃に・・・全てを賭ける!」

【サイ!ゴリラ!ゾウ!サゴーズ・・・サゴーズ!!!】

歌が終わると同時にもう一度スキャンする。

【スキヤニングチャージ!!!】

俺は空高く飛び上がるが、原作の様にそのまま落下せず、トルルヤミーに落下しながら向かっていく。

そのまま右拳を振り抜いてトルルヤミーを吹き飛ばす!!!

「グ・・・グオアアアアア!!!」

叫び声と共にトルルヤミーは爆発し、当たりにセルメダルが散らばるなか、俺はこう呟いた。

「ダイナミック・・・クエイク!」

そう呟いて、倒れた。

「ん・・・」

目が覚めると、またしても自室だった。

「お目覚めですか?」

身体を起こすと、目の前には麗花さんと涙目の響と奏が居た。「三人共、どうした?」

「どうしたじゃないわよ!!!」

響と奏が叫ぶ。

「あんだ、あたしたちがどんなに心配したと思ってんの!?!」

「そうよ！私たちがもつと強ければって自分を攻めまくったわ！！」

お前ら、麗花さんの前でそういう事言うなよ。「琥珀様が寝ている間にお二人から事情は聞きました。あの化け物の事は会長には報告しましたが、琥珀様とお二人の事はまったく話してはいないのでご安心ください」

そうか、そいつは良かった。

「それでは、私は業務に戻ります。お三方、後はごゆっくり」

麗花さんが部屋を出ていく際に拳を握りこみ、人差し指と中指の間から親指をのぞかせてつきだしながらこう言った。

「待て待て待て！あんたは一体俺たちが何をするとおもうんだ！」

「何って・・・ナ」

「もういい分かった！何て言うかはもう想像ついたから！」

「それでは、ごゆっくり」

妖艶な笑みを浮かべて麗花さんは出ていった。

さて、麗花さんの言動に？マークを浮かべている二人に、どうやってフォローを入れるべきか。

こうして、俺の長い長い一日が終わったのであった。

愛とヤンデレと力のコンボ（後書き）

琥珀「駄文だな」

麗花「駄文ですね」

・・・いきなり出てきてなんだい君たち。

琥珀「俺は読者の皆さんの意見を代弁したただけだな」

まあ、今回は信じられないほど駄文だったけどさ（T・T）

麗花「元気出して下さい作者さん。私と琥珀様の
シーンを書いて名誉挽回しましょう」

・・・君はこの小説の制限年齢を一段階上げる気かい？

琥珀「麗花さんの提案はともかく、次はこんな事にならないようにしろよな」

はい、気をつけますm（――）m

麗花「それでは皆さま、次回もよろしくお願いいたします」

オリキャラ紹介

黒霧 琥珀

外見イメージ

種死のシン・アスカ

転生小説のテンプレに従ってスイートプリキュアの世界に転生した主人公。転生する際にオーズドライバーとコアメダルを受け取り、仮面ライダーオーズに変身する。

ハートキャッチ最終回放送日に死んでしまった為、原作知識無しである。

響と奏の幼なじみで、二人の数少ない男友達でもある。

属性的にはヤンデレを自称しているが、奏が王子先輩に惚れているのを咎めていないので実際は素直クールである。

戦闘の際は鍛え上げた身体能力とオーズの性能をフルに活かして戦う。戦闘スタイルは歴代ライダーの物を応用している。

また、ネガトーン戦は歴代プリキュアと響鬼以降の平成ライダーの知識の応用で戦っている。

好きなものはアニメ、特撮、麻雀、奏のケーキ。

嫌いなものはイカサマ、（オタクに大きな偏見を持たせるような）犯罪者。

黒霧 刹那

外見イメージ

「ハヤテのごとく！」の鷺ノ宮 伊澄

琥珀の妹。

私服は常に和服である。

兄である琥珀と、琥珀の幼なじみである響と奏をとっても慕っている。
霊能力は無い。方向音痴でもない。漫画のセンスが独特でもない。
むしろ漫画に関しては天才と言っても良いくらいである。

好きなものは琥珀、響、奏、漫画。
嫌いなものは特に無し。

黒霧 鉄心

外見イメージ

「鋼の錬金術師」のアームストロング少佐

琥珀と刹那の父親。

世界中に支社を持つ「黒霧財閥」の最高責任者。

その言動で株価が大幅に動く程の人間なのだが、家庭での様子だけを見ているとただの筋肉バカ。

今後彼の行動が物語に大きく関わってくるとかこないとか・・・

好きなものは筋肉、家族。

嫌いなものは家族に危害を加える存在。

黒霧 栞

外見イメージ

「らき すた」の高良 ゆかり

琥珀と刹那の母親。

おっとりとした性格で、琥珀と刹那を溺愛している。
名家に生まれ、一般常識に疎く、100均とコンビニとファミレス
は空想の産物と思っている上に、琥珀が生まれるまで「赤ちゃんは
コウノトリが運んでくる」と信じきっていた。
好きなものは琥珀、刹那、家族だけの時間。
嫌いなものは特になし。

後藤 麗花

外見イメージ

「東方Project」の八雲 紫

民間警備会社の最大手「黒霧総合警備」の社員で、どう見ても民間
企業が受け持つレベルではない依頼を専門に行う「特殊状況対応課」
の第一小隊隊長。

ちなみに第一小隊のモットーは「米軍だって潰してやらあ。だけど
飛行機だけは勘弁な」である。

劇中ではシヨタコンだと言っていたが、実際は年下であれば女子だ
って構わず手を出すのでロリコンでもある。

ちなみに琥珀を狙っているのは玉の輿狙いではなく、「自分を性的

な意味で満足させてくれそうだから」らしい。

禍原 華那子

外見イメージ

「STAR DRIVER 輝きのタクト」のワタナベ・カナコ

琥珀、響、奏の担任。

グリードの一人であり、オーズの世界から様々な世界を渡り歩いてこの世界にやって来たようだが、正体やコアメダルの種類は不明。アंक曰く、「不安定な感情が最高の欲望を生み出す」という信念を持っているらしく、恋愛が絡んだ欲望からのみヤミーを作る。

他のグリードとは違い人間を見下さず、むしろ対等の存在として見ている。

グリードが存在しない世界でオーズに変身する琥珀と、プリキュアに変身する響と奏に興味を抱いている。

好きなものは恋愛、甘い物、セルメダル。

嫌いな物は元の世界のオーズ。

オリキャラ紹介（後書き）

という訳でオリキャラ紹介でした。

紅先生、琥珀を考案して頂き、改めてありがとうございます。そして、はっちゃけたキャラにしまい申し訳ないですm（――）m

琥珀「で、次回は？」

感想ページでターザン先生にリクエストして頂いたエピソードをやつて、それから歴代プリキュアとのコラボをやりたいと思ってるんだけど・・・

琥珀「だけど？」

まずは歴代プリキュアが同じ世界に存在するのか、それともディケイド方式の平行世界なのかを決めないと・・・

琥珀「という訳でこの小説をご覧の皆様。作者にアドバイスをよろしく願います」

よろしく願いますm（――）m

サイコと酸味とミラクルベルティエ（前書き）

カ・ダ・イ！多す！ぎ・る・ぜ！！！！

琥珀「何「タ・ト・バ！」のリズムでぼざいてるんだよ」

学校の課題が多すぎてなかなかまとめられなかった・・・

琥珀「確かにこのやりとりは久しぶりだな」

今回のように、更新が10日過ぎてもされない場合は「ああ、課題が多いんだろうな」と考えて頂ければ幸いです。

それでは、ターザン先生からのリクエストエピソード、お楽しみください（ハ－ハ）

サイコと酸味とミラクルベルティエ

「それロン！悪いな、国土無双十三面待ち（ライジング・サン）だっ！」

昼休み。俺はクラスの男子を集めて麻雀をやっていた。

もちろん賭けはしていない。ごくごく健全な麻雀である。

「くっそ、これでまたハコだよ！」

「琥珀引き強すぎるって！絶対誰も勝てねえよ！」

ちなみにこれで通算30回連続ライジングサンだ。天文学的な確率すぎるし、カードゲームをテーマとしたアニメの主人公並のチートドローだ。

「俺を負かしたきゃ、アカギさんでも小泉さんでも宮永さんでも連れてきやがれ！」

少し調子に乗りすぎたかもしれんが、こんだけチートドローが続けば調子にも乗りたくなるよ。

「あら、随分楽しそうね」

「楽しいですよ・・・って禍原先生！？」

慌てる俺の後ろで、卓を囲んでいた残りの三人が大急ぎでマツトを畳み、牌と点棒を袋に放り込む。

「あ、あのですね！これは確率の実践的な勉強と言うか、上手な世渡りの仕方の勉強と言うか、その・・・」

「勘違いしないで？私は一局打ちに来ただけよ？」

はい？

「マジ・・・ですか？」

「マジですよ？」

良かった。いくら義務教育とは言っても昼休みに学校で麻雀なんて、嚴重注意で済めばいい方だ。

「さっき見てたけど、黒霧くん、随分強運なのね。でも、かつて『天和女帝』と呼ばれた私に勝てるかしら？」

なんか、面白そうだ。

「先生、午後の授業自習にしてくれます?」

俺は畳まれたマットをもう一度机の上に敷いた。

「『天和女帝』だかなんだか知らないですけど、ぶっ潰させて貰いますよ!」

放課後。

「・・・・・・親番全部天和なんて、チートの中のチートだろ・・・」

「

そりゃ『天和女帝』なんて呼ばれる訳だ。

あんなだけ大口叩いて、これだけボコボコにされるとは。穴があつたら入りたい。

「こっはくゝ一緒に帰ろ?」

顔を上げると、響と奏がすでに帰り仕度をして立っていた。

「・・・よし、なんか食って帰るか。勝負には負けたけど今日は俺の奢りだ」

「「ゴチになります」」

「いくら奢るって言ったからってさ・・・頼みすぎだろ・・・」目の前にはケーキやらパフエやらのスイーツの山。

それらをまるで飲み物かのように腹に納めていく響。

「はっふえ、ふおはふはふおふおっふえふふえふはんふえひふあひふひひやひやひ」

「とりあえず日本語で喋ってくれるか？俺はナメツク語は翻訳出来ない」

ちなみに響は「だって、琥珀が奢ってくれるなんて久しぶりじゃない」と言っていたはずだ。

「ふいふいひっふあは、ふおんふあふいふあふあふえふあふえふおふあふえふおふおはふいふえふあひふあほ」

「お前もか！！！」

因みに奏は「響ったら、そんなに慌てなくても食べ物には逃げないわよ」と言っているはずだ。

「ゴメンゴメン。琥珀の奢りなんて珍しいし、私たち最近エネルギー不足で」

エネルギーの塊が何を言ってるやがる。

「最近ね、琥珀くんとやってる組手の他に、私と響だけでトレーニングしてるの」

どんな話の流れだ。

「何でだよ？組手だけでも十分だと思うけど」

俺の言葉に二人が少ししんみりする。

「全然足りないわよ。この前だって、メダルの怪物に一撃でやられて、琥珀くんが連れ去られるのを黙って見てるだけだったじゃない」

「だから決めたの。もっと強くなって、琥珀を助けられるようにしたいって」

意外に気にしてたんだな。「なあ、二人とも・・・」

俺が二人に語りかけようとした瞬間。

「ネーガトーン！！！」

何だか聞き覚えのある叫び声。

「見つけたぞプリキュア！仮面ライダー！この新たな力を得たネガトーンで、貴様らの息の根を止めてやる！！！」

さて、今回のネガトーンは・・・

「・・・サイコショッカー？」

某カードゲームの罫カードを使用不可にするモンスターに酷似していた。

「二人共、行くぞ！！！」「うん！」

「ええ！」

俺はオーズドライバーにタカ、ウナギ、タコのメダルを装填してスキャンする。

【タカ！ウナギ！タコ！！！】

俺はタカウナタ・・・で良いのかな、良いことにしよう、に変身した。

「レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション！！！」

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！！！」

「爪弾くは、たおやかなる調べ！キュアリズム！！！」

「届け！二人の組曲！！！スイートプリキュア！！！」

二人もプリキュアに変身し、俺たちはサイコショッカーネガトーンに対峙する。

「ったく、てめえらも進歩がねえな！俺たちに何回痛い目見せられてると思ってるんだよ！」

「やかましい！今までのネガトーンと思うと痛い目を見るぞ！ネガトーン！奴らを叩きのめしてやれ！」

「ネガトーン！！！」

サイコショッカーネガトーンが拳を降り下ろしてきた。

「伏せ（リバーズ）カードオープン！！！」『聖なるバリア ミラー

フォース』……って、罨カードは発動出来ないんだっただな！！」

俺は両腕の鞭をネガトーンの拳に巻き付けて引っ張り、拳の軌道をずらす。

「メロディ！リズム！今だ！」

「はあああああ！！！！」

二人は飛び上がってネガトーンの頭部を蹴り飛ばした。

「ネーガトーン！！！！」

ネガトーンは衝撃で仰け反るが、俺が縛りつけていない左手で二人を吹き飛ばす。

「メロディ！リズム！」

俺はタコメダルを取り外し、バッタメダルを装填してバックルをスキャンする。

【タカ！ウナギ！バッタ！！！！】

バッタレッグで跳躍して二人を抱き止めて、そのまま着地。

「大丈夫か二人とも！？」

「全然大丈夫！かすり傷にもならないわ！」

「行くよメロディ！琥珀くん、サポートお願い！」

メロディとリズムは跳躍し、再びネガトーンに攻撃を仕掛けようとする。

「まったく、猪かお前らは！」

バックルのメダルをクワガタ、カマキリ、チーターに変更してスキャンする。

【クワガタ！カマキリ！チーター！！！！】

ガタキリーターにコンボチェンジし、ネガトーンの足元を高速移動しつつカマキリソードで切りつける。

「オラオラオラア！！！！」

「ネガッ！？」

足元を集中して切りつけたため、ネガトーンはバランスを崩す。

「はあっ！！！！」

「やあつ!!!」

バランスを崩したネガトーンに二人が蹴りを入れて吹き飛ばす。

「今までより大したことない!それでも喰らえっ!」

メロディがネガトーンに向かって走り出す。

「馬鹿!不用意に近づくな!」

メロディが拳を振り上げた瞬間、ネガトーンがその腕でメロディを捕らえた。

「しまった!?!」

「メロディ!!!!」

「つたく、だから言っただろうが!」

カマキリをゴリラ、チーターをバッタに変えてスキャンする。

【クワガタ!ゴリラ!バッタ!!!!】

ガタゴリバになったと同時に跳躍し、メロディを掴んでいる腕を殴ろうとするが、遅かった。

「ネーガトーン!!!!!!」

ネガトーンが放った怪光線がメロディに直撃していた。

「きゃあああああ!!!!」

「メロディ!てめえこの野郎!!!!」

全力でネガトーンをぶん殴り、メロディを救出する。

「大丈夫かメロディ!」

「・・・なんとも無いよ?」

「馬鹿言え!あんだけ至近距離で直撃してノーダメなんてあり得ねえだろ!」

「でも、本当に何でも無いんだけど・・・」

そんな俺たちを見て、セイレーンが驚いている。

「何っ!?奴め、でまかせを言ったのか!?ネガトーン!ここは一旦退くわよ!」

そう言っただけでセイレーンとネガトーンは退却していった。

場所を移し、奏の家。

「しかし、本当にかすり傷一つ無いな」

俺は奏から救急箱を借りて響を治療しようとしていたのだが、怪光線の直撃を受けているのに目立つ負傷はどこにもない。

「だから大丈夫だってば、琥珀は心配すぎ。それに・・・」
「それに？」

「・・・顔、近いんだけど」

今、俺と響の顔の距離はわずか数センチ。

少し体を動かせば、キスどころかもっと凄い事が出来る距離だ。

「わ、悪い・・・」

素で照れてしまった。

「二人ともお待たせ。ケーキ持ってきたわよ」

助かった。これ以上二人きりだったら変な気を起こしていた。気を取り直して、奏が持ってきてくれたケーキを食べる。

うん、いつも通り旨い。

しかし、響からはいつものリアクションが出てこない。

「響、どうしたの？」

「・・・っばい」

「「は？」」

「すっぱ〜〜〜い！！！！！！」

何を言っとなるんだこのおぜうさんは。

「何言っただお前。いつも通りの絶妙な甘さだろうが」「琥珀こそ何言っただの！？奏が作ったとは思えない酸っぱさよ！？」

もう一口食べてみる。

「・・・普通に甘いけどな。もう一回食ってみるよ」
響はもう一度ケーキを口に入れる。

「やっぱりすっぱくくくくくくいい!!!!」

またしても悶える響。

しかし何で急に・・・・・・あ。

「もしかして・・・あのネガトーン的能力か？」

そうだとしたら、奴が響に当てたあの光線が原因だろう。しかし・

・
「響の前で言うのもあれだけど・・・地味だな」

「・・・そうね」

「地味じゃないわよ!!! 奏のケーキが酸っぱく感じるなんて、あたしにとつては死活問題よ!!!」

確かに、奏のケーキを酸っぱく感じるようになってしまったら俺だって廃人になってしまうだろう。

「琥珀、奏! あいつらをさがしに行こう!!! あのネガトーンを倒せばなんとかなるかもしれない!!!」

まあお約束だな。

「よし、明日学校が終わったら探してみるか」

「明日じゃ遅いわよ! 今すぐにも探しに」

「行きたいのはやまやまだけどな、時計を看一看。中学生がうるついて良い時間じゃないだろ」

「う・・・」

「家まで送ってやるから、今日は諦めろ」

こうして俺と響は帰路についた。

「これは一体どういう事だ！このネガトーンなら奴らを倒せると言
ったじゃないか！！！」

深夜、とある廃屋。

セイレーンは一人の女性に怒鳴りちらしていた。

「貴女ねえ・・・私は「強化出来る」とは言っただけど、あの三人の
邪魔者を「始末出来る」とは言って無いわよ？」

「その言葉も怪しい物ね！現にネガトーンの放った光線は、プリキ
ュアの一人に少しもダメージを与えられていないのよ！！！」
女性はやれやれと言うかの様に首をふる。

「私は「どう強化されるかは解らないけど」とも言っただけよ？そ
の光線だって、何か付加効果があるかもしれないじゃない。ちゃん
と効果を試してもせずに彼らにぶつけた貴女にも責任はあるわ」

「や・・・やかましいわ！！！」

「とにかく、もうちょっと頑張つてよね。プリキュアとやらの事は
どうでも良いけど、この世界のオーズの実力がどのくらいのものか
見ておきたいから」

「だったら自分が奴らに仕掛ければ良いでしょうが！！！」

「ぎゅんねん この前作ったヤミーが無事に帰ってきたら一気に畳
み掛けるつもりだったけどね」

そう言つて女性は、妖しげな笑みを浮かべる。

「それに私、こう見えても彼らの先生なのよ？」

「勢いで探すって言っちゃったけど・・・どこを探せば良いんだろ
う・・・」

俺と響と奏は、ネガトーン探しに奔走していた。

「まあ、すぐ見つかるとは思ってはなかったけどな」

まあすぐ見つかったら、あいつらは一体何がしたいのか、って話だしな。

「ねえハミイ、何か良い考えは無いかな？」

響がハミイに助言を求める。久しぶりに見た気がするのは気のせいだろう。

「うゝん・・・ハミイも解らないニヤ」

「・・・ですよねゝ・・・」

さてどうしよう・・・と思った時、俺の目の前を音符が横切った。

「なんだ音符か・・・って音符!？」

とりあえず掴んでおく。

「やったニヤ琥珀!音符ゲットニヤ」

俺の前にフェアリートーン・・・だったかな?が寄ってきたので、音符を入れてやる。

「ドドッ!ドリゝ」

・・・あ。

「ちよつと閃いたかも」

「「え!?!」」

「ニヤプ?」

俺は深呼吸して、大声で叫ぶ。

「よっしやゝゝ!?!?!音符300個もゲットしちゃったぜゝゝゝ!」

！！これで伝説の楽譜の復活も間近だ~~~~！！！！！！！！！！」

「えっと、琥珀くん？」

まあ、こんなので釣られる訳が・・・

「音符が300個だと!？」

・・・あ、釣れちゃった・・・

しかもご丁寧にサイコシヨッカーネガトーンまで引き連れてやがる。

「単純だなお前・・・」

「貴様・・・騙したのか!？」

こんなんで騙されるお前もお前だけだな。

俺はライオン、ウナギ、ゾウの三枚をオーズドライバーに装填してスキャンする。

「変身!」

【ライオン!ウナギ!ゾウ!!!】

ラウナゾになった俺は鞭を振り回しつつネガトーンに歩み寄る。

「さーて、響の味覚をおかしくしてくれたお礼をしなくちゃな!!!」

俺は鞭を振り回し、少しずつネガトーンをいたぶる。

「ネ・・・ガトーン!!!」

俺の連打に苛ついたのか、ネガトーンが俺に拳を降り下ろす。

「そんなの当たるかつ!」

俺はバックステップで回避し、ウナギメダルをカマキリメダルに変更してスキャンする。

【ライオン!カマキリ!ゾウ!!!】

ラキリゾにコンボチェンジした瞬間、俺はネガトーンの拳に捕らえられた。

「しまった!？」

「琥珀くん!このおつ!!!」

俺を助けようと飛び出したリズムも、俺と同じように捕らえられる。
「ネーガトーン!!!!」

「ぐわあああああ！！！」

「きゃあああああ！！！」

俺とリズムは怪力で締め付けられる。

「良くやったネガトーン！そのままその二人を握り潰しておしまい！！！」

「ネガトーン！！！」

徐々に力を強めていくネガトーン。

俺はともかく、ほぼ生身「に見える」リズムにはかなりのダメージがあるはずだ。

「二人を・・・離せつ！！！」

メロディの攻撃でネガトーンは体勢を崩し、その隙に俺とリズムはネガトーンの拳から脱出する。

「サンキュ、助かった」

俺はメロディに礼を言っただけで立ち上がろうとするが、膝が笑ってしまっただけで立ち上がれない。

「な・・・予想以上にダメージが貯まってるな・・・」

やっぱコンボの多用が響いてるのかもな・・・

「メロディ、行こ・・・うっ！」

どうやらリズムもダメージが酷いらしい。

「フッフ、仮面ライダーも相手もそうとう酷い有り様ね！さあ、諦めてあんたたちが今まで集めた音符を渡しなさい！」

まずい、このままじゃ全滅しかねない。

「メロディ、リズムを連れて逃げろ。このままじゃ俺たち全滅だ」

「何言ってるの！逃げるにしても全員で逃げようよ！」

「いくらお前でも、今の俺たち二人を庇いつつここから逃げるのは無理だ。俺がおとりになってる内に・・・」

「嫌！」

「そんなこと言ってる場合か！俺たちがこのままやられたら、あいつらを止める奴がいなくなるぞ！」

「だからよ！それに、私は友達を見捨てるなんてことは絶対にしな

い！！！」

響・・・

「ふん！また下らない馴れ合いのつもり！？」

「下らなくはない！あたしたちの友情を馬鹿にする奴になんか・

・・・」

メロディがネガトーンを睨み付ける。

「あたしは、絶対に負けない！！！」

その瞬間、メロディの胸元が輝きだした！！！

「何だ！？まさか、メロディにはサイバディにアプリボワゼする能力が・・・」

「違うニャ！メロディの友達を思う心が、ベルティエを目覚めさせたんだニャ！」

ベル・・・ティエ？

「ベルティエ・・・よし！」

メロディは指を三回鳴らすと、胸元から何かスティッキのような物を取り出した。

「奏でましょう、奇跡のメロディー！ミラクルベルティエ！！おいで、ミリー」

オレンジ色のフェアリートーンがミラクルベルティエの先端に装着される。

「駆け巡れ、トーンのリング！プリキュア！ミュージッククロンド！！！」

メロディがミラクルベルティエで描いたリングがネガトーンを囲む！
「三拍子っ いちっ、にいっ、さんっ ファイナーレッ！！！」

メロディの言葉に呼応するようにネガトーンが爆発した！！！！
そして、先ほどまでネガトーンがいた場所に、サイコショッカーの

カードとセルメダルが落ちてきた・・・セルメダル？

「なんでネガトーンからセルメダルが・・・」

前回のヤミーといい、一体誰が・・・

「美味し〜〜い!!!」

奏のケーキを元通り美味しく食べる様になった響は、一口食べるたびにこうやって叫んでいた。

「嬉しそうに食うなあ・・・」

「だって嬉しいんだもん」

響の隣では、奏が嬉しそうに微笑んでいた。まあ、自分の作ったケーキでこんだけ喜んでもらえるなんて、料理人冥利に尽きるだろうな。

いろいろと気になる事は山積みだし、これからもっと戦いは厳しくなっていくだろう。でも、今は考えない様にしよう。

せめて奏のケーキを食ってる間くらいは、面倒くさいことは考えなくてもいいはずだ。

サイコと酸味とミラクルベルティエ（後書き）

さて、今回のネガトーンもなかなかアレでしたね（笑）

琥珀「面白いつちゃ面白いけどな」

次回もお楽しみに！

???「フッフッフ・・・あたしの出番も刻一刻と近づいてきたわね」

琥珀「誰!？」

先輩とモデルと花言葉（前書き）

先輩プリキュアとのコラボ編です。どのプリキュアと共演するかは・
・タイトルで分かるかなあと。

それではどうぞ。

先輩とモデルと花言葉

「ねえ響、琥珀くん。今度の日曜空いてる？」

昼休み。三人で弁当を食べていると、奏が一冊の雑誌を取り出した。

「なになに、『フェアリードロップ』？」

「どうやら服屋の特集記事が載っているようだ。」

「最近話題のお店なの。なんでも、あの来海もかさんの実家でや
つてるお店なんだって」「来海ももかつて、あのトップモデルの来
海ももか！？」

「トップモデル？トップをねえとどう違うんだ？」

「全然違う！！！！」

モノローグに突っ込みを入れるな。

「とにかく、日曜に今話題のこのお店に行こうと思ってるの。二人
も一緒にどう？」

「行く行く！もしかしたら来海ももかに会えるかも知れないし！ね、
琥珀も行こうよ！」

俺が女物の服見てどうするんだ。

しかし、気にはなる。

頭のどこかで、「来海」と「フェアリードロップ」って単語が引つ
掛かっている。きつと前世で何かあったんだろう。とりあえず、行
ってみればなにか分かるはずだ。

「わかった。付き合うよ」

服屋か・・・私服、少しましなのを着てかなきゃな。

で、日曜日。

俺たちは加音町から電車を乗り継ぎ、「希望ヶ花市」に来ていた。

「で、迷ったと」

「し、仕方ないじゃない！この地図分かりにくいんだから！」

俺と響は、奏を頼りにフェアリードロップに向かっていたのだが、どうやら完璧に迷ったらしい。

「あの・・・どうかなさったんですか？」

「・・・ん？」

俺たち三人が振り向くと、赤い髪をポニーテールにした、俺たちと
同じ年ぐらいの少女が立っていた。

「いや、お恥ずかしながら、道に迷っちゃって。フェアリードロ
ップって店を探してるんですけど、どう行けばいいんですかね？」

「フェアリードロップですか？そこでしたら私の家の隣なんで、案
内しますよ」

マジか。言ってみるもんだな。

「申し遅れました。私、花咲 つばみと言います」

「俺は黒霧 琥珀。よろしく」

「あたしは北条 響。よろしく」

「南野 奏です。よろしくお願いします」

花咲さんは響と奏を交互に見たあと、俺に向き直った。

「あの、つかぬことをお聞きし」

「どっちも俺の彼女じゃないですよ。ただの幼馴染みです」
きつとそういう質問だろう。

「何で分かったんですか！？もしか」

「エスパーでもサイコドライバーでもないです」

なんというか、読みやすいな、花咲さんは。

その後も俺たちは、フェアリードロップへの道中、世間話を続けた。

希望ヶ花市の名所や加音町のことなど、あれやこれや。

更に驚きなのは、花咲さんが来海ももかの妹と大親友という事だった。

偶然ってのは怖いな。

そうこう言ってる内に、フェアリードロップに到着した。

「お待たせしました。ここがフェアリードロップです」

「花咲さん、道案内ありがとうございました」

「お礼って訳でも無いけど、加音町に来たときはあたし達に案内させてね！」

「はい、是非お願いします それと、一つお願いが・・・」

「なに？何でも言ってます？」

花咲さんは少し伏し目がちに俺たちを見る。

「よ、よろしければ・・・友達になつてくれませんか？」

「・・・え？私「俺」達まだ友達じゃなかったの？」「」

「ふえ？」

俺たち三人のハモりに花咲さんが驚く。

「俺達が花咲さんと友達になりたいと思って、花咲さんも俺達と友達になりたいと思ったんだろ？だったら俺たちはその瞬間友達さ」
自分で言ってるんだが、鳥肌が物凄い。

「あ・・・ありがとうございますっ！」

「それともう一つ！ダチになったんだから、敬語は出来るだけ無し、俺たちの事は名前呼びで」

「はい！分かりました琥珀くん！」

こんなやりとりをしていると、フェアリードロップの中から青いロングヘアーの少女が出てきた。

「つぼみ？何してるの？」

「あ、えりか！今この三人と友達になった所です！」

「マジで！？つぼみの友達ならあたしの友達！あたしは来海 えりか！えりかで良いよ、よろしくね！！！」

なかなかフランクな少女だ。するとその時。

「見つけたわよ仮面ライダーにプリキュア！今日こそ音符は頂いていくわ！！！」

元気だねえ、セイレーン。

しかしいつもと違うのは、珍しくネガトーンを引き連れていない所だ。

「ネガトーンはどうした？」

「それは今から作るのよ！これを使ってね！」

セイレーンは音符とセルメダル、そしてあの黒光りする虫の入った虫力ゴを持っていた。

「出でよ！ネガトーン・ヤミー！！！」

黒光りするあの虫と音符、そしてセルメダルが結合し、コックローチドーパントのような姿の怪人へと変化した。

「.....」

なんて安直な鳴き声だ。

俺はオーズドライバーに、お馴染みの三枚を装填してスキャンする。

【タカ！トラ！バツタ！！！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！！！



タトパソコンポに変身した俺はトラクローを展開して、Gヤミーに攻撃する。

「はっ！」

「GGツ!？」

トラックローがヒットした部分から、セルメダルが数枚飛び出してき
た。って、え？

「欲望を満たして無いのにもうメダルが？」

「そうよ！そいつは音符の力で、貴様らと戦えば戦うほどメダルが精製され、その力を増していくのだ！」

マジか。なんてお得なヤミーなんだ。

「奏、どうしよう・・・」

あたしと奏は、変身した琥珀とあの怪人の戦いを傍観するしかなかった。

本当は変身して琥珀をサポートしたいけど、つぼみとえりかが居るから変身出来ない。

「響さん、奏さん！早く逃げて下さい！」

つぼみがそう叫んだ時、私は耳を疑った。

「何言ってるの！？琥珀はともかく、二人を残して行けるわけないじゃない！」

あたしの言葉に、えりかが胸を張りながら答えた。

「あの黒猫はプリキュアをご指名なんだから、あたし達が逃げる訳には行かないよ」

へ？

「つぼみさんとえりかさんも、プリキュアなの？」

「え？って事は、お二人もプリキュア何ですか？」

「よし、それじゃ、皆で変身しちゃうおう！」

「はい！」

「うん！」

「ええ！」

「GGッ！」

「おっと！」

Gヤミーの右拳をkaroujite避けて、脇腹に膝を叩き込む。

動きの止まったGヤミーに連打を叩き込んで突き放し、ハイキックで吹き飛ばす。

「GGッ!？」

このヤミー……

「強い……！」

戦えば戦うほどセルメダルが溜まる、というセイレーンの言葉は嘘ではないらしい。

「フッフ、どうやら今回は倒せそうね！」

「……待ちなさい……！」

「なに？」

振り向くと、四人が勇ましい目付きでヤミーとセイレーンを睨み付けている。

「調子に乗るのもそこまでよ黒猫ちゃん！」

「ふざけるな！プリキュアはともかく、貴様らなんぞに用はない！」

「あなたにはなくても私たちにはあります！えりか、響さん、奏さん！行きましょう……！」

「やるっしゅ！」

「OK！」

「はい！」

そう言つて響と奏はキュアモジューレを、つぼみとえりかは香水瓶を象つたようなアイテムを取り出す……つて、え？

「そっか……聞き覚えがあるはずだぜ」

つぼみとえりかは、前世の俺と共に戦いを終えた、四人の伝説の戦士の内の二人だ。だからこそ、『来海』という苗字や『フェアリー

ドロップ』という名前に聞き覚えがあつたんだろう。

「プリキュア！オープンマイハート！！！」

「レッツプレイ！プリキュアモジュレーション！！！」

響と奏はいつものようにキュアメロディとキュアリズムに、つぼみはピンクを基調とした衣装を着用してピンクのポニーテール、えりかは水色の髪に、つぼみと同じ衣装だが、つぼみのピンク部分が水色に変わった物を着用している。

「大地に咲く一輪の花！キュアブロッサム！！！」

「海風に揺れる一輪の花！キュアマリン！！！」

「ハートキャッチプリキュア！！！」

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！！！」

「爪弾くは、たおやかなる調べ！キュアリズム！！！」

「届け！二人の組曲！スイートプリキュア！！！」

四人のプリキュアが、俺と共に並び立つ。が・・・

「変身したはいいけど、やっぱりあれと戦うのは抵抗が・・・」

マリンがGヤミーを見ながら少し嫌そうな顔をする。

「大丈夫大丈夫。こういう時には・・・」

「くっ、まさかあいつらの他にもプリキュアがいるなんてね！ここは一旦退くわよ！」

「・・・セイレンは基本的に撤退するから」

セイレン達が撤退したあと、俺と響、奏は、元プリキュアのつぼ

みの祖母の管理する植物園で、キュアサンシャインに変身する「明
堂院 いつき」と、キュアムーンライトに変身するクールビューテ
イーなお姉さま、「月影 ゆり」さんを交えて、お互いのプリキュ
アの情報交換をしていた。

「砂漠の使徒・・・」

「私たちがプリキュアになる前に、そんな事があつたなんて・・・」
つぼみ達の戦いの話を聞いて、やや衝撃を受ける響と奏。

「仮面ライダーか・・・」

「プリキュアの他にも、世界を守る戦士が居たなんてね・・・」

いつきとゆりさんは、響と奏より、俺の方に感心を抱いたようだ。

「まあともかく、俺と響と奏、つぼみとえりか、いつきとゆりたん
がいれば世界は安泰って事だな」

「ちよつと待って」

ん？

「今、なんて言ったかしら？」

ゆりたんはどうやら俺の言葉を聞き逃していたようだ。しょうがな
いなあ。

「俺と響と奏、つぼみとえりか、いつきとゆりたんがいれば世界は
安泰って」

「ゆりたんって、もしかして私の事かしら？」

他に誰がいるんだろう。

「愛称を考えてくれるのは嬉しいんだけど、ちよつとそれは恥ずか
しいというか・・・」

うつすらと顔を赤くするゆりたん。かーいいなチクショウ。

「じゃあゆりっぺで」

「死んだ世界戦線!？」

「ゆりゆり」

「第二のキラ!？」

「ゆーりん」

「師匠ですか!？」

「ゆりやんぬ」

「3時のおやつ!？」

「ユリーザ」

「宇宙の帝王!？っていうかそれは酷いよ!？」

「じゃあセーラーマーキユリー」

「「「「「っていうか結構序盤で『ゆり』関係なくなってるし「ますよ」!?!」「」「」」」」

確かに。元ネタと『ゆり』を掛け合わせただけになってるな。

因みに、ツツコミの順番は響 奏 つぼみ えりか いつき 全員だ。

「じゃあ・・・ゆり姉さん、って呼ばせてもらっても良いですか？」

「え、ええ・・・それなら良いわよ」

若干気圧されてるゆり姉さん。まあ、こんなコントを見せられたらな・・・と、その時。

「「「邪悪な気配がするです「しゅ」!?!」「」」」

うわ、びっくりした!?!!

つぼみのパートナー妖精シプレ、えりかのパートナー妖精コフレ、

いつきのパートナー妖精ポプリが急に叫びだした。

「どうしたんですか!？」

「さっきの怪人が街中で暴れてるです!?!」

「皆、行くぞ!?!」

俺たちは植物園を出て、ヤミーが暴れている場所へと向かった。

「ドコダ・・・カメンライダー！プリキュア！」

「ここだあつ！」

俺たちを探して暴れまわるGヤミーに背後からドロップキックを食らわせて吹き飛ばす。

オーストライバーにライオン、クジャク、バッタのメダルを装填しスキャンする。

「早速行くぜ！変身！！！」

【ライオン！クジャク！バッタ！！！】

「・・・プリキュア！オープンマイハート！！！」

「・・・レッツプレイ！プリキュアモジュレーション！！！」

俺はラジャバに、六人はそれぞれプリキュアに変身する。

「大地に咲く、一輪の花！キュアブロッサム！！！」

「海風に揺れる、一輪の花！キュアマリン！！！」

「陽の光浴びる、一輪の花！キュアサンシャイン！！！」

「月光に冴える、一輪の花！キュアムウウンライト！！！」

「・・・ハートキャッチプリキュア！！！」

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！！！」

「爪弾くは、たおやかなる調べ！キュアリズム！！！」

「・・・届け！二人の組曲！スイートプリキュア！！！」

「え、え」と、以上の面子でお送りしまゝす

こついつ時名乗り口上が無いのは辛いな。

「ガ、ギギャギャギャ！！！」

趣向を変えたのか、気味悪い叫びを上げて突進してくるGヤミー。

「さてと、害虫駆除と行きますか！」

左手を軽く振ってから俺も走り出し、Gヤミーの頭部に膝蹴りを叩き込む。

よろけたヤミーに、ムーンライトが回し蹴りを二回三回と叩き込み、バランスを崩したヤミーにハイキックを叩き込んで吹き飛ばす。

「ナイスキックっすムーンライトさん！！！」

「・・・あんなの、殴りたく無いじゃない」

そりゃそうだ。他の五人も攻めあぐねているようだし。

しかし、この時最悪の事態が起こった。

「ガ、アグアアアアア！！！！」

Gヤミーが急に苦しみだしたかと思うと、姿を変えて巨大化した。全長10メートルはあろうかという巨大なGに。

「「「「「きゃああああああああ！！！！！！！！」」」」」

五人は力の限り叫んでいる。ん？五人？

振り向くと、ムーンライトは立ったまま気絶していた。

虫嫌いなんだ、やつぱり可愛いな・・・

「ガゲギヤギヤギヤギヤ！！！！」

「うおっと！！！！」

巨大Gヤミーが足の一つを俺に向かって降り下ろしてくるが、俺はなんとかわした。

「さーて・・・どうやって倒そっかな・・・」

そんなことを考えていると、バイクに乗った何者かが、Gヤミーにマシンガンをぶっぱなしながら俺に近寄ってきた。

「・・・久々の出番が無駄弾打ちと宅配便ですか。まったく・・・」

「麗花さん！？」

「全国の男子学生の方お元気ですか？あなたの後藤　麗花です」
いや、ネタは良いから。

「それよりも。ゴホン・・・アルカタカラノオトドケモノデス」

「何で棒読み？」

麗花さんは横幅はそれほどないが、縦に長い箱を俺に渡した。その包みの中には、とんでもないものが入っていた。

「剣かよ・・・」

ただの剣ならまだ良かった。しかしこの剣は、どこからどうみても『メダジャリバー』なのだ。

「この前琥珀様を拐かした怪人がばらまいたメダルを解析して開発された物です。お役立て下さい」

今は変な事を考えている余裕は無い。

俺はメダジャリバーを受け取り、巨大Gヤミーに苦戦するプリキュア達の元へと走り出した。

「ここここ琥珀くん！た、助けて！」

「おおおおちついて下さいリズム！まずは落ち着いてタイムマシンを」

「お前が落ち着け！」

とんでもなくボケた事を言うブロッサムにツツコミを入れてから、巨大Gヤミーに向き直る。

「ガギャギャギャギャー！！！」

俺に向けて降り下ろされた足を避けて、内側からヤミーの足をメダジャリバーでぶった斬る。

「ギガギャー！？」

さすがに切り落とす事は出来なかったが、斬った部位から数枚のセルメダルが飛び出した為、それをキャッチする。

メダジャリバーに三枚のセルメダルを装填し、刀身に現れた三枚のセルメダルをスキャンする。

【トリプル！スキャンングチャージ！！！】

「はあああああああ、せいやあああああ！！！！！」

某パンツの人と同じように叫び、メダジャリバーをヤミーの腹に向けて振り上げる！！！！

「ガ、ギギャアアアア！！！！」

叫びながら巨大Gヤミーは爆発し、セルメダルとなったのだが・・・

「なんだこりゃ・・・」

セルメダルはなんと、俺の背丈を楽に越えるような山を作っていた。

「お疲れさまでした。メダルはこちらで回収しておきます」

すでに何台かのトラックにメダルが積み込まれ、運ばれていく。

「麗花さん、一つ聞いていい？」

「会長がメダルを集めている理由以外でしたら」

「興味ないよ。この剣を・・・メダジャリバーを開発したのは誰？」

「黒霧生体研究所の東宮博士です。発案は会長ですが」
親父の思惑さらっと言っちゃってません？

「じゃあ、博士と親父に礼言っという。それじゃあ、後はよろしく」
メダジャリバー、どうやって持って帰ろうかな・・・

時間は流れ、日も落ちかかってきた。

俺、響、奏は、駅前でハートキャッチ組に別れを告げていた。

「な〜んか、ドタバタして終わっちゃったね〜」えりかがやや残念
そうなそぶりを見せながら言った。

「しょうがねえよ。いつの時代も、ヒーローはゴタゴタに巻き込ま
れるのが一般的なのさ」

「つばみさん、えりかさん、いつきさん、ゆりさん、今日はありが
とうございました」

「あたし達以外のプリキュアの話が聞けて、勉強になったよ」
響と奏が四人に礼を言う。

「ボクたちも、君たちに会えて良かったよ」

「はい！三人と友達に慣れて良かったです！」

つばみといつきの言葉を聞いた所で、電車の到着を知らせるアナウ
ンスが流れる。

「『それじゃあ、また！』！』！』」

加音町へ帰る電車の中。

俺の両隣ですやすやと寝息を立てる響と奏に肩を貸しながら、俺は悩んでいた。

「プリキュアの原作知識が、思い出せない・・・」

ハートキャッチの原作はおぼろげには思い出せるが、それ以前のプリキュアに関してはまったく思い出せない。

「ま、いつか・・・」

そう考えながら、俺も眠りについた。

その後、余裕で乗り過ごして、一悶着あったけど。

それはまた、別のお話・・・

先輩とモデルと花言葉（後書き）

メダジャリバーが輝いたバトルでした。

琥珀「メダジャリバーなんて久しぶりに見たぜ」

それにしても、戦闘描写があっさりしまくってるな・・・もっとス
キルアップせねば。

そして、大量のセルメダルを黒霧グループに取得させるために、で
っち上げました。ネガトーンヤミィ。

一応設定はあるので、その内明かすと思います。

それでは、また次回（ハ－ハ）

嘘特報・嘘予告

「全ての悪しき魂よ・・・ここに蘇れ！！！！」

加音町での転生生活・劇場版

「愚かな人間どもに我らの力を見せつけるのだ！かかれっ！！！！」

『『『イーツ！！！！』』』

復活する歴代の悪の組織！

「私たちの世界を・・・」

「精霊界を・・・」

「あなたたちなんかの！」

「好きにはさせないんだから！」

「私たち、堪忍袋の緒が・・・切れました！！！」

世界の危機に、伝説の戦士プリキュアと・・・

「悪の野望が潰えぬ限り・・・」

「我々仮面ライダーが滅びる事はない！！！」

伝説の英雄、仮面ライダーが奇跡の共闘！！！！

加音町での転生生活・劇場版！

『プリキュア & am p ;仮面ライダー スーパーオールスターズ！

時空^{とき}を越えて、俺たち、共闘！！！！』

「こはくうううう！！！！！！」

・・・オーズ、暁に死す！？

嘘特報・嘘予告（後書き）

「見れぬなら 作ってしまえ 劇場版」
そんな感じで書いてしまいました（；、）

これが実現するかは未定です。特にタイトル。
琥珀「なあ、最後の奴ってさ・・・」
・・・ノーコメント。

友と老人とニセ親友（前書き）

お待たせしました。

少し無理矢理感がありますが生暖かい目で見守って頂ければ幸いです
す m (——) m

友と老人とニセ親友

「・・・・・・・・」

深夜、セイレーン達のアジト。

セイレーンは月を眺めながら、考え込んでいた。

『駆け巡れ、トーンのリング！プリキュア！ミュージッククロンド！
！！』

『はああああああ、せいやああああああ！！！！』

プリキュアと仮面ライダーは、次々に新たな力を手に入れて強くな
っていく。

それに比べて、こちらは次々とネガトーンを撃破され、音符を次々
と奪われていく。

「やはり、奴らの強さの中核となっているのは仮面ライダーか・・・

」
初めて変身した時のプリキュアのままなら、さっさと片付けて音符
集めに専念出来た。

しかし、仮面ライダーが出てきた事で、奴の脅威的な強さに感化さ
れるようにプリキュアも少しずつ強くなっていった。

「ならば、奴をプリキュアから引き離す事が出来れば、奴らを倒す
ことも出来るはず！待っていないさい仮面ライダー！必ず貴様を私の
虜にしてやるわ！！！！」

セイレーンの笑い声が、夜の闇の中に響いた・・・

「響、また間違えたよ？」

「うあ！ゴメン奏」

「気にしないで？もう一回やろう？」

日曜日、調べの館にて。

俺はハミイと共に、響と奏のピアノの練習を見学していた。

なぜピアノか。ハミイの話では、『ハーモニーパワー』なるものが二人の力になっっているらしく、二人の心が一つになればなるほどプリキュアとしての力が高まるらしい。

「良い感じニヤ」 この調子なら二人はもっと強くなれるニヤ

「

「そういうもんかね・・・」

個人的にはこういう考え方は苦手だね。いくら使える力が強くなっても、使う本人が未熟なら、その力はそいつ自身を滅ぼしかねない。もちろん、これは二人だけではなく、俺にも言える事だ。

コンボに慣れてきたとはいっても、まだまだ俺も未熟。ヤミーが出てきた以上、その内グリードと戦うだろう。

ヤミーのモチーフから見ても、俺が転生するまでには出ていないグリードなのだろうし、まだ使っていない三種のコンボも使いこなせる様にならなければ。

「何か悩んでるようじゃの？」

「うおお！！！」

背後から何者かに声をかけられた。

「お・・・音吉さん？」

俺に声をかけたのは、調べの館の主的な存在、音吉さんだった。どう言う人なのかは知らん。ここでパイプオルガンを作っている、孫思いのおじいちゃんということしか俺たちは分かっている。

「少し進路の事で。お孫さんお元気ですか？」

『孫』と言う単語が出た瞬間、音吉さんの顔が「にへらあっ」って感じになる。

「もちろん元気じゃあ〜」

良いおじいちゃんだな。本当に。

さて、差し入れにたい焼きでも買って来るか。

「少年」

「はい？」

「大いなる力には大いなる責任が、新しい力には新しい痛みが伴う。覚えておきなさい」

「・・・はい」

なんというか、敵わないな。

次の日。

「と言うわけで、君たちには殺し合いをしてもらいます」

『『『』』』どう言う訳だ（ですか）！！！！！！！！』』』』

国語総合の授業中、禍原先生がとんでもねえ事を言っただけやがった。

「ゴメンゴメン。やっぱり教師になったら一度は言ってみたいわよ

ね」

「そんな事言いたいと思う先生そう居ませんよ」

「じゃあ私がオンリーワンね」

「そんなオンリーワンは誇らないで下さい」

禍原先生、フリーダムだ。

「えっと、どこまで話したっけ？あぁ、スーパー戦隊史上の中で世界征服を果たした組織は？って質問をしようと思ってたのよね。じやあ黒霧くん」

「機械帝国バラノイアですけど、絶対そんな話じゃありませんでした」

実際支配してたのも一瞬だったし。

「分かってるわよ　そうそう、作文の課題を出すって話をしてたのよね」

禍原先生は黒板に何かを書くが、余りにも勢いをつけすぎた為になんて書いてるかまったく分からない。

「先生、なんて書いてあるか分かりません」

「めっちゃ　ケって面白いわよね」

「先生は教師として一体どこにたどり着きたいんですか？」

こんなに『全力・・・全開！』なボケをさばくのは久しぶりだ。

「という訳で、皆には『友達』ってテーマで作文を書いてきてもらうわよ」

もうツツコまなくて、良いよね・・・

放課後。

俺たち三人は、体育館に向かっていた。

なぜ俺たち三人が放課後に体育館に向かうのか。

その理由はとても単純。俺が男子バスケの助っ人を頼まれたからだ。

「でさ、二人は何書くの？」

体育館に向かう途中、響が俺と奏に問いかけた。

「んゝ、未定」

「私もまだ決めてないかな。響は？」

奏が振ると、響は『（＾　＾）』って感じの顔になる。

「もちろん、あたしたち三人の事に決まってるじゃん」

「あれ、俺たちって友達だったっけ？」

「え！？琥珀酷い！！！」

「いや、俺たちって『友達』って言うよりは『親友』だと思っただけだ」

鳥肌が物凄い。

「おお？琥珀、ずいぶん恥ずかしい事言うねゝ」
言うな。言わんでくれ。

「ちなみに琥珀くん、『親友』のラインを教えてくれる？」

奏が俺にマイクを向けるふりをする。何だ、今日は俺が弄られる日か。

「『親友』のラインねえ・・・まあ、一般的には長い付き合いの奴の事を言うんだろっけど・・・」

ここで一度言葉を切る。

「やっぱ、親友になれそうって周波数で決めるんじゃない？」

「ひゅゝひゅゝ」

くそ、言わなきゃ良かった。

「なるほど、親友になれそうって周波数が・・・」

私と響は、体育館のギャラリで琥珀くんがバスケ部の中に混ざって練習しているのを見学していた。

「琥珀！」

「任せろ！」

コートの中で、琥珀くんがバスケ部員からパスを受け取る。

「スラム・・・ダアंक！！！」

跳躍して、ダンクシュートを決める琥珀くん。いつ見ても凄い身体能力ね。

「奏、琥珀やっぱり凄いね」

昔から凄いとは思ってたけど、最近特に凄いと思う。私たち以上に体を張って戦っているのに、日常生活でその疲労やダメージを全く見せずにふるまっている。

「響」

「ん？」

「これからも頑張ろうね。琥珀くんに負けないくらい」

「・・・うん」

再びコートを見ると、琥珀くんがタオルで汗を拭いながらこっちに歩いてくるのが見えた。

練習も終わり、俺は汗を拭いながら響たちの方へと向かった。

「お待たせ、二人共」

「凄かったじゃん琥珀！ダンクなんて初めて見た！」

響が目を見張っているが、俺としては余り嬉しくない。

「ああやって運動神経高い所見せるから助っ人に引っぱりだこなんだよな。個人的にスポーツはやるより見る方が好きなのに」
その方がくつろげるし。

「でも、体育祭のMVPは狙うんでしょ？」

ぐ、痛い所を。

まあ、そのくらいしないと楽しくないしな。

「ねえ二人共、そろそろ帰らない？」

奏がそう提案すると同時に鋭い視線が俺たちに突き刺さってきた。

『リア充氏ね』ってか。

俺はさっさと制服に着替えて、二人と共に体育館を出た。

帰り道。

俺たち三人は商店街に来ていた移動パン屋でメロンパンを買って食べ歩きつつ帰っていた。

「うん、美味い」

クッキー部分のサクサク感とパンのふっくら感が絶妙な完全調和を生み出している。

まあ焼きたてだからこそ生み出せる状態なのかもしれないが。

因みに、メロンパンは焼きあがってすぐはクッキー部分がサクサクだが、時間が立てば立つほど水分を吸ってベタベタになってしまう。そしてこの弱点、メロンパンが誕生してからウン十年間解決されていないらしい。

まあ、パン生地とクッキー生地を別々に焼いてクリーム的な物で繋ぎ合わせればその弱点も解決されるんだろうけど・・・リアルでやるパン屋は居ないと思うね。

「やつぱ中にクリーム入ってないほうが美味しいね」

「当たり前だ。クリームとか果汁とかが入ってるのなんてメロンパンとは言わん」

もはやメロン味のパンだ。

そんな話を話しているうちに響の家に着き、奏の家に着き、という感じに、各々家に帰っていった。

「ねむ・・・」

昨日は散々だった。帰った途端に黒霧生体研究所から届いた新装備

のチェックを完徹、しかもお袋と刹那にバレない様にするというハードさ。

親父と博士は俺を殺す気か。

重い目蓋を擦りながら歩いていると、前方にキョロキョロしているうちの学校の女子がいた。

「・・・どうしたの？」

思わず声をかける。

「ひゃっ!？」

いやいや、そんなに驚かんでも。

長い黒髪で眼鏡をかけているその少女は、おどおどしながらこちらを見ている。「あ、あの・・・聖アリア学園の生徒さんですか？」それ以外にどう見えるんだろうか。

「私、今日転校してきたばかりで道が分からなくて・・・」なるほど、それでキョロキョロしてたのか。

「じゃあ、俺が道案内するよ」

「本当ですか!？ありがとうございます!」

うお、眼鏡女子の笑顔つてのも中々・・・

「申し遅れました。私、黒霧 エレンって言います」
ん？

「俺は黒霧 琥珀。よろしくね」

「あ、苗字同じですね」

あえて触れなかったのに。「じゃあ、エレンって呼ばせてもらって良いかな？自分と同じ苗字の人を苗字で呼ぶのって気まずいから」佐藤とか鈴木って苗字ならともかく、俺の苗字でこんな事が起こるとは考えても見なかった。「じゃあ、私も琥珀って呼ばせてもらって良いですか？」

いきなり敬称無しか。思いきるねえ。

あ、俺もか。

「それじゃあ、よろしくエレン」

「こちらこそよろしく、琥珀」

エレンの　じゅんすいなえがお！

もえのジュエルで　エレンの　じゅんすいなえがおのいりよく
が　あがった！

こうか　は　ばつぐんだ！

きゅうしょにあたった！

こはく　は　もえたいせいでなんとかたえきった！

ポケモン風に表して見たが、実際瀕死だ。学校まで持ってくれよ、
俺の体・・・

「こっはく」

後ろから声が聞こえたので振り向くと、響と奏がこちらに歩いて来た。

「おう二人とも、ちょうど良かった。こちら・・・」

そう言っでエレンの方を振り向くと、姿が見えなくなっていた。

「・・・あり？」

いつの間に消えたんだ？

「どうしたの？」

「いや、さっきまでここに転校生が居ただけど・・・」

なんでだ？

「そう言えば琥珀くん、昨日渡したい物があるって言ってたけど、
どうしたの？」

ああ、忘れる所だった。

「ほら、これ」

二人に赤い缶と緑の缶を渡す。

「なにこれ、ジュース？」

「まあ、タブ引っ張れば分かるよ」

響は赤い缶の、奏は緑の缶のタブを開ける。

すると赤い缶は鷹型、緑の缶はバッタ型のロボットに変形した。

「キュイイイ！」

「うわ！」

「キュロロロ！」

「何！？」

二人共驚きを隠せないらしい。そりやそうだろう。

「その二つは黒霧生体研究所謹製、『カンドロイド』」

「『カンドロイド？』」

「そ。響が起動させたのは空からの偵察と追跡を主とする『タカカンドロイド』。奏が起動させたのは、録音録画、通信機能を搭載した『バッタカンドロイド』。二種セットを二人にプレゼント」
新しいバッタカンに響に、新しいタカカンを奏に渡す。

「これを、何で私たちに？」

「今後、もし別れて行動する事になった場合があるかもしれないから、そういう時のためにな」

「携帯があるじゃない」

「電波が遮断されたら一発だろ。その点カンドロイドは、黒霧グループの持つありとあらゆる技術を注ぎ込んで開発されたから、そんなにそこらのちゃんな妨害は通用しないぜ」

ファンタジックな妨害には聞かないかもしれんが。

「なるほど」

他にもまだカンドロイドはあるが、二人に渡すのはこの二体、いや二缶、いや待て、カン『ドロイド』だから二機か？

「・・・琥珀、すんごいどうでもいいことで悩んでない？」

「ギクッ！！！」

「・・・口で『ギクッ！！』って言うくらいだからそうみたいね」
止めてくれないかなあ、モノローグにツッコミ入れるの。

昼休み。

俺はエレンを響と奏に紹介し、共に昼飯を食べた。

響と奏はお手製の弁当、俺はコンビ二弁当、エレンはメロンパンである。

「ねえエレン、お昼メロンパンだけで大丈夫？あたしたちの弁当分けてあげようか？」

響が少し心配そうに尋ねる。お母さんかお前は。

「大丈夫です。私、メロンパンさえあれば生きていきますから」

エレン、フレイムヘイズだったりせんだろうな。

「でも、もし足りなかったら遠慮なく言ってね。ね、琥珀？」

「俺は嫌だけどな」

「「え！？」」

「コンビ二限定なのに完全予約制という幻の『地獄麻婆弁当』。例えば親友三人の頼みであろうと渡さん！！！」

「じ・・・地獄麻婆！？」

「かつては普通に販売されていたものの、あまりの美味しさに酔いしれた人々がもう一度食べたいって願望から暴徒と化したため一度は封印された、あの地獄麻婆！？」

そんな裏歴史があったのか。

「「琥珀（くん）」！食べさせて！！！」

「だが断る！」

そんな感じで騒いでいると。

「あの・・・親友三人って言ってましたけど、二人の間違いじゃ・・・」

エレンが俺たちの方を見て言った。

「ん？響と奏とエレンで三人だから、間違ってないだろ」

「でも、私今日この学校に来たばかりですよ！？」

「……だから？」

「だから？って……」

「甘いなエレン、お前が朝俺に話しかけた事によって、俺の26の秘密能力の一つ『ある程度誰とでも親友になれる程度の能力』が発動した！だからこの先、誰がなんと言おうと俺たちは親友だ！」

前世だったらこんなこと言った瞬間頭が破裂していた事だろう。

「うつ……ぐすつ……」

え？

見てみると、エレンは両目に大粒の涙を浮かべていた。

「エ……エレン？」

女子を泣かせてしまった！

「う……嬉しいです、今までこんなこと言われた事なかったんで・
・・」

涙を拭いながらも笑顔を見せるエレン。

（何この子、可愛過ぎる！！！！）

そう俺は心の中で思っただった。

エレンが転校してきてから、一週間。

ついに俺がバスケの助っ人をする日が訪れた。

「いよいよだね、琥珀」

「頑張つてね、琥珀くん」

「全力で応援します!」

三人が俺に声援を送ってくれる。

「んじゃ、行ってくるわ!」

試合は第1Qから第3Qまではハプニングもなく、俺たちが3点リードで勝っていた。しかし第4Q、事件は起きた。

相手のラフプレイの影響で、俺は足をひねってしまったのである。

「・・・不甲斐ねえ」

俺はベンチで、相手チームが荒波のように攻め立てるのを眺めるしかなかった。

「琥珀くん、ちょっと足見せて」

「は?」

横を向くと、奏が救急箱を開けてこちらをじっと見ていた。

「奏さん、何考えてるんですか!?!」

「応急処置すれば、少しは動けるかも知れないでしょ?」

「そんな、無茶です!」

エレンの言う通りだ。下手すれば足を更に痛めかねん。だが。

「決めるのは、琥珀くんだよ」

「・・・頼む」

「琥珀!?!」

奏は、俺の足にテーピングを始める。

「はい、これで終わり。残り時間ぐらいは動けると思っ」

「・・・サンキュ。なあ奏」

「なに?」

「シュシュ、貸してくれ」

「良いけど・・・何に使うの？」

奏から髪を束ねていたシュシュ受け取り、左手にはめる。

「残り時間怪我しませんように、って御守りにするよ」

俺は立ち上がり、試合に再び出してもらうべく歩き出した。

「ふう、終わった終わった」

試合は終了、最終的に6点差で俺達が勝利した。

「しかし、響達も冷たいな。怪我人ほつといてどっかに行っちゃもうとは」

試合が終わり、戻ってきたら、響達はどこかに消えていた。
着替えて響達を探そうとしたら、足元でバツカンドロイドが跳ねていた。

「ん？」

手に取ってみる。

『琥珀、聞こえるかニヤ！？』

「ハミイ？なんでお前がこれを」

『その話は今はいいニヤ！メロディとリズムがネガトーンと戦ってるニヤ！急いで来てニヤ！』

「な・・・わかった、すぐ行く！」

体育館を出て校舎の方に向かうと、バスケットボール型のネガトーンとメロディ、リズムが戦っていた。

俺はシャチ、トラ、バッタの三枚をバックルに装填してスキャンする。

「变身!!!」

【シャチ！トラ！バツタ！！！】

俺は・・・シャトバ？に変身して跳躍し、ネガトーンをぶん殴る。

「おらあ！」

「ネガトーン!!!!」

ネガトーンを吹き飛ばした俺の元にメロディとリズムが駆け寄ってくる。

「琥珀くん！エ、エレンさんは……」

「エレンがどうした!？」

「琥珀、落ちて聞いて。エレンは、セイレーンが変装していたの！」

「なん・
だ・
と・
？」

見れば確かにセイレーンがいる。

「おいセイレーン！一体どういっつもりだ？」

「どういふつもり……？ 決まっているだろう！ あんたちの仲をボロボロに……じゃなくてボロボロに引き裂いてやるためよ！」

なぜこのタイミングでオンドウル語を……

「って事は、手加減しなくて良いんだな！」

シャチとバツタのメダルを、ライオンとチーターに。

「怒りの臨界点を越えた、百獣の王たる俺と貴様には天と地ほどの差があることを教えてやるう！行くぞ、俺のターン！超！変！身！！！」

【ライオン！トラ！チーター！！！ラッタ～ラッタ～！ラトラータ
ー！！！！】

シャツバから、全コンボ中最速を誇るラトラーターコンボへ。

「戦う交通安全！激走形態！ラアアアトラアタアア！！！」

ちょっとふざけすぎたかな。

「ふざけるな！ネガトーン！奴をギッタギタにしておやり！」

「ネーガトーン！！！！」

ネガトーンは体当たりをしてくるが・・・

「遅いっ！」

高速移動で回避し、背後から蹴り飛ばす。

「ネガトーン！！！！」

「さあて、これで止めだ！」

【スキヤニングチャージ！！！！】

バックルを再びスキャンした俺とネガトーンの間、3つの光のリングが現れる。

「ライトニングインパルス！！！！」

俺はリングをくぐり抜けながらどんどんスピードを上げ、ネガトーンに強烈な蹴りを叩き込む！！！！

「ネガ・・・トーン！！！！」

俺の蹴りをまともに喰らったネガトーンは爆発し、その場には音符とバスケットボールのみが残った。

「くっ・・・覚えてなさい！」

セイレーンが捨て台詞を吐いたと同時に、俺はその場に倒れた。

「痛っ！」

「じっとしてて！」

ネガトーンとの戦いのあと、俺は保健室で奏の手当てを受けていた。実はスキャニングチャージをした際、バスケットで痛めた方の足をネガトーンに振り抜いてしまったのである。

「まったく琥珀くんだったら、不注意にも程があるわ」

「・・・面目ない」

「琥珀くん、もうちょっと自分を大事にしてね？」

「・・・ああ」

なんだろう、素で恥ずかしい。

あ、そういえば。

「奏、シュシュありがと」

左手に着けていたシュシュを奏に返す。

「そのシュシュ、琥珀くんにあげる」

「・・・もらっても止める髪がないんだが」

「そうじゃないわよ。それは御守り」

奏が俺の手を握り、じつと俺の目を見つめる。

「・・・これから先、全部終わるまで、琥珀くんが無事でいられますように、って」

俺に向かって微笑む奏。なんだろう、フラグ回収シーンな気がするのは俺がギャルゲ脳だからだろうか。

「こはくく、かなでく。一緒にかえ・・・ろ・・・」

保健室に入ってきた響が、俺と奏を見て、一言。

「・・・ゴメン。ごめつくり！」

走り去ってしまった。

「ひ、響!？」

「響!お前絶対勘違いしてるぞ!？」

このあと響の誤解を説くのに3時間かかったが・・・

また別の話、って事で。

友と老人とニセ親友（後書き）

カーレンジャーの大いなる力によってネタ化した話でした（；、）

ここで連絡& a m p ;緊急アンケートを。

前回投稿した『嘘特報・嘘予告』を実現する事に決めました（ハ―ハ）

スタート時期は・・・夏の劇場版公開までには始めたいと思ってます（ハ―ハ）

続いてアンケートですが、今後琥珀達を他の世界に飛ばそうと考えています。

そこで、「琥珀達に訪ねてほしい世界」を募集します。

訪れてほしい世界がある方は、感想ページにどしどしご意見をお寄せくださいm（――）m

さて今回は、ついにあの人が登場！

リュウガ先生と月光閃火先生に考察していただいたオリキャラ、そして新たな自作オリキャラも・・・

????「やあつとあたしたちのデビュー戦ね。ド派手にかますわよ！」

????「フッフッフ、ついにワイの歌が加音町に響く日がやってきたで！読者の方々、次回を楽しみにしときや！」

????「小説だから響きはしらないと思うんだが・・・まあ良いか」
それでは、次回をお楽しみに（ハ―ハ）

「???」ところでさ、あたし以外は感想ページに設定案があるから
軽くバレバレだと思っただけど」
・・・あ(;´ ` (

農と窮地と新戦士たち（前書き）

今回は新キャラ祭です。

月光閃火先生とリュウガ先生にそれぞれ考えて頂いたオリキャラも初参戦です。

・・・描写が上手く出来ていないかもしれませんが（；、、）

それではどうぞ（＾ー＾）

農と窮地と新戦士たち

早朝、加音町某所にて。

ギューイイイイイン！！！！

大音量のエレキギターの音が響きわたる。

『ヒヤッハア！今日も最高のビートだぜ相棒！』

「当たり前や『アストラル』。ワイを誰やと思っとなねん」

少年は、登ってきた朝日を見つめながら、叫ぶ。

「いずれ日本の音楽界の筆頭となるこの中央 なかお ビート 音！これくらい出来
んでどないするっちゅうねん！！！！」

同時刻、別の場所です。

音がかき鳴らしたギターの音で目覚めた少年がいた。

「ったく、また音の奴か・・・」

少年は目を擦りながら、カーテンを開ける。

「・・・今日も精霊たちにとって、平穏な1日になりますように」

また別の場所では。

「ん~~~~良く寝た~~~~」

一人の少女が目を覚ました。

少女はベッドの脇に置いてあったミルク缶と、その上に置いてある
黒い缶のような物に手を合わせる。

「神様仏様ゴリカン様！どうか今日も稼がせてください！」

最近1日が終わるのが早く感じるのは老化なのだろうか。

朝に響たちと一緒に登校したと思ったら、あつという間に放課後である。

「琥珀、奏、今日は何して帰る？」

「そうだな、久しぶりにクレープなりなんなり食い歩いてみるか？」
毎回奏のケーキ屋の一角を借りて奏のケーキをただ食いするってのも迷惑だろうし。

「それ良いかも！ね、奏」

「そうね、もしかしたら新作ケーキの参考になるかもしれないし」

「んじゃ決定！」

俺たち三人は店選びをするべく歩き出した。

「ん？」

ある店が俺の目に止まった。

「琥珀くん、どうしたの？」

「いや、あんな店あつたっけ？」

帆船をモチーフにした店構えだが、どうやらクレープ屋のようだ。
「なんか凄いいね」。あそこ行ってみない？」

チャレンジャーだな響。

「あの・・・」

「・・・はい？」

見てみると、恐らくその店の店員さんがチラシを持っていた。

「もしよろしければ、こちらどうぞ」

「「あ、どうも・・・」」

俺と響は普通に受け取ったが、奏はガツガチに固まっていた。

「奏？」

「奏、どうしたの？」

奏は、目を白黒させながらようやく口を動かした。

「あ、あの・・・もしかして、桃園 愛夢先輩ですか!？」

「あら、南野さん？」

「奏、知り合いか？」

奏は俺を物凄い剣幕で睨んだ。

「琥珀くん知らないの!？」

いや、知らんから聞いているんだけど。

「桃園先輩は、聖アリア学園時代にスイーツコンテストのありとあらゆる賞を三年連続で総なめした、初代スイーツ姫なのよ!？」
え？スイーツ姫って世襲制だったの？

てつきり東山先輩だけが呼ばれてるのかと思った。

「いや、そんな大したことじゃ・・・」

「大したことですよ!あの、サインもらっても良いですか？」

これこれ奏さんや、仕事の邪魔しちゃうけんよ。

「ちよつと愛夢!早くチラシ配りやつちゃつてよ!」

俺たちの方に新たな店員さんがやって来た。

「申し訳ありません琉歌さん。中学校の後輩がいたもので・・・」
琉歌さんと呼ばれた店員さんを見て、今度は響が言葉を失う。

「あ、あの！もしかして仙堂　琉歌先輩ですか！？あたし大ファンなんです！サインしてください！！！」
お前もか。

俺たち三人は、愛夢先輩と琉歌先輩に案内され二人がバイトしているクレープ屋「ガレオン」の休憩室にいた。

そこで学園の話をしていると、二人の男性従業員が入って来た。

「あれ？ジョーもハカセも休憩？」

「ああ、だいぶ客足も落ち着いてきたからな」

「ほんと、この時間帯は大変だよ。ところで、その三人は？」

琉歌先輩は二人に俺たちの事を説明した。

「そうか。俺は新明　浄一郎。よろしく頼む」

「僕は球磨川　土門。よろしくね」

新明さんと球磨川さんは琉歌先輩と愛夢先輩を挟むようにして座った。

「そつえば、皆明日の音楽自慢大会は見に行くの？」

「「音楽自慢大会？」」

俺と響、奏は首を傾げる。

「知らないの？ほらこれ」

球磨川さんが俺たちにポスターを見せてくれた。

「宣伝してくれて主催者に頼まれたんだけど、うちの店長面倒くさがりだから放置されてるんだよね」

ふーん・・・

「球磨川さん、その大会、参加条件は何かありますか？」
どうしたんだい奏さんや。

「いいや？どうやら飛び入りの参加もOKみたいだよ？」
なんか嫌な予感がする。

「響、琥珀くん。この大会に出ない？」

・・・やっぱり。

「出るのは良いけど・・・練習はどうするの？」

「琥珀くんの家に泊まり込んで」

「ちよつと待て！どうしてそうなった！？」

「琥珀くんの家ならピアノがあるでしょ？」

「響の家にもあるだろうが！」

「ゴメン琥珀、うちのピアノ今調律中で・・・」

・・・こういうのも『前門の虎後門の狼』って言うんだろうか。

「・・・わかった。ちよつと待ってる」

俺は携帯を取り出し、家に連絡を入れた。

「あらあら、響ちゃんに奏ちゃん お久しぶりね」

家に入るやいなや、お袋が二人を猛烈に歓迎しはじめた。

「お久しぶりですおばさん」

「もー二人とも、『おばさん』じゃなくて『お義母さん』って呼んでって言うてるのに」

その理屈で言ったら俺は一夫多妻制実行者って事になっちまうぞ。
「まあとりあえず上がってちょうだい？ ゆっくりお話ししよう」
お袋に促されて、二人は我が家へと足を踏み入れた。

晩飯を食ってから、俺たち、というか響と奏は我が家のピアノを使って明日の音楽自慢大会の練習をしていた。

俺は参加するつもりなどなかったのだが、奏の無言の圧力によって参加する事になってしまった。

セレブ生活の中で培ったピアノの腕やバイオリンの腕などとうに錆び付いているので、ギターで参加する事にする。

選曲は某J9シリーズ第一作のOP。

え？ 『ギターを使って人前で歌う曲じゃない』 って？ 気のせいじゃないK A N A

・・・おえつ。

あっという間に音楽自慢大会当日！

「い・・・いよいよだね響」

「う、うん・・・なんかあたし緊張してきた・・・」

ガチガチに固まる二人を見て、あることに気がついた。

「なあ二人とも、ピアノで出場するんだよね」

「「うん」」

「じゃあ、その肝心のピアノは？」

「「・・・ああああああ！！！！！！！！！！」」

・・・何しに來たんだろうね、彼女達は。

「なんや、何かあつたんかいな？」

なぜか関西弁が聞こえた。

振り向くと、俺と同じようにギターを背負った高校生ぐらいの男性と、何も持っていない同じく高校生ぐらいの男性と出会った。

「もし俺たちに何か出来る事があるなら手伝うが・・・」

ギターを持ってない方の人、スツゲエ優しいな。

「いや実は、こいつら今日の音楽自慢大会にピアノで出ようとしてたのにピアノを用意してないって本末転倒な事をしたもんで」

「なんやて！？よっしゃ分かった！お嬢ちゃん達、ちょっと待ってな！」

関西弁のお兄さんはどこかに走り去ったと思ったら。

「おい！！！！誰かこれ運ぶの手伝ってくれへんか！！？」

そう叫んで、数十秒後には幼稚園や小学校に常備されてるような小型のピアノを他の参加者に手伝ってもらいながら運んできた。

「あそこの質屋のおっさんから借りてきたわ。これで存分に腕をふるえるやろ？」

「「あ・・・ありがとうございますっ！」」

「礼なんていらへんて。ほな、頑張りや〜」

そう言つてその二人はどこかに消えていった。

「響、頑張ろうね！」

「もちろん　ここで決めなきゃ女が廃る！」

「私も、気合いのレシピ見せてあげるわ！」

その時、時計台の鐘が鳴り響いた。

「いよいよだね、琥珀、奏」

確かに開始時間だが、審査員を含めた審査に必要な諸々がどこにも見当たらない。

その時。

「アゝアゝアアアゝアゝアゝ」

何故かゾツとするような歌声。

周りを見ると、参加者の人々が泣き崩れている。

そして、ステージ上には見知った顔。

「レディース&ジェントルメン！音楽自慢大会へ、ようこそ」

「ようこそ」

あいつらは・・・えつとなんだっけ、とりあえず適当に言ってみよう。

「てめえらは・・・イモ欽トリオ！」

「違う！」

「じゃあ、コント赤信号！」

「それも違う！」

「インスタントジョンソン！」

「お疲れちゃ〜ん・・・って違うわ！」

「我が・・・」

「言わせん！我々はトリオ・ザ・マイナーだ！」

ああ、そういえばそんなチーム名だったな。

「あんたたち、大会を邪魔しに来たの！？」

響がトリオザ某に叫ぶ。

「音楽自慢大会など・・・ない！！！」

「ええっ！！！」

いや、あいつらが出てきた時点で気付こうよ。

「じゃあ、あのポスターは・・・」

気にする所そこ？

「あれは俺様の手作りポスターだ！」

乗らなくても良いしどうでもいい。

「出だよ！ネガトーン！！！」

トリオなんちゃらのでかい緑の奴がそう叫ぶと、参加者が持っていたシンバルとハーモニカがネガトーンと化した。

「響、奏、行くぞ！」

「うん！！！」

俺はオーズドライバーにサイ、クジャク、ゾウの三枚を装填しスキヤン。

「変身！！！」

【サイ！クジャク！ゾウ！！！】

「レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション！！！」

俺はサジャゾに、二人はそれぞれメロディとリズムに変身する。

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪弾くは、たおやかなる調べ！キュアリズム！」

「届け！二人の組曲！スイートプリキュア！！！」

いつもならこのまま戦闘開始だが、今日の俺は一味違う。

何故なら、やっと名乗り口上を思い付いたからだ！

「この世に蔓延る悪の野望を、三つのメダルで打ち砕く！仮面ライダークオーズ！堂々見参！！！」

少し昭和寄りかもしれないが、この世界じゃ無いよりマシだ。

「ネガトーン！やってしまえ！」

「ネーガトーン！！！」

俺たちに向かって飛び掛かってくるネガトーン達。

「メロディ！リズム！ハーモニカ型は任せろ！二人はシンバル型を

頼む！」

「分かった！」

「琥珀くん、気をつけて！」

俺は飛び掛かってきたハーモニカネガトーンに向かって、右拳を振り抜く。

「うおらあ！」

「ネガトーン！」

ハーモニカネガトーンは時計台に激突。俺は追撃をかけるべく走り出す。

しかし。

「ネガトーン！！！」

ハーモニカネガトーンは俺に向けて光弾を放ってきた。

「ちょ、それはよけらんねえ・・・ぐああああ！」

必死にガードしたが、あまりの威力に吹き飛ばされてしまう。

「きゃああああ！！！」

メロディとリズムもシンバルネガトーンの攻撃を受けて吹き飛ばされる。

「はーはっはっはっ！どうやら貴様らもここまでのようだな！ネガトーン！奴等を叩きのめしてやれ！！！」

「ネガトーン！！！」

ジリジリと俺たちに近付いてくるネガトーンたち。

「万事休すか・・・」

その時、メダル状の光弾が三体のネガトーンに着弾した。

「ネガトーン！！！」

なんでだ、あれはこの世界には無いはず・・・

いや、メダジャリバーやカンドロイドが生まれた時点で、あのツールが生まれる事は決まっていたのかも知れない。

「ヤッホー。助けた方が良い？」

声のした方を見ると、昨日知り合った琉歌先輩がバースバスターを構え、さらにさっきの二人が琉歌先輩を挟んで立っている。

「な、何だ貴様らは！？？」

「あたしたち？」

「俺たちは、通りすがりの・・・」

「正義の味方や！」

「覚えておけ（きや）！！！！」

琉歌先輩はバースドライバーを腰に装着。関西弁の兄さんは背負っ

ていたギターを取り出し、親切な兄さんは自らの手を目の前に突きだす。

琉歌先輩がセルメダルを指で弾いて空中に飛ばし、それをキャッチしたあとバーストライバーに装填。

「・・・変身」

「アストラル！トランス・フォーメーション！！自らの内に燃ゆる魂よ！その熱き鼓動を奏で表せ！！」

「精霊よ我に力を、そなた等を襲う穢れを祓わん！はあああ！」

琉歌先輩の体をカプセル状のオーラが、関西弁の兄さんの体を七色の五線譜が、親切な兄さんの体を強い光が包み込む。

「な、なんだあ！？」

オーラやら光やらが消え去ると、琉歌先輩はバースに、関西弁の兄さんは黒髪から金髪になってヘッドインカムみたいな物が装着され、親切な兄さんは西洋の騎士みたいな鎧を身に纏う。

「穢れも野望も邪悪も欲も、メダルの力でぶっ潰す！仮面ライダーバース！見！参！！！！」

ソウル・ビート

サウンド・ファイター

「轟くは！熱き魂の鼓動の旋律！魂の響撃闘士！“クルセイダーフォトン”！！」

「精霊騎士アルム！出陣！！！」

なんだなんだ、なんかいろんなのが出てきたぞ！？

「ええい、何人出てこようと同じ事！ネガトーン、奴等を捻り潰してやれ！」

「「ネガトーン！！！！」」

「ネガトーンだかなんだかねえが、俺の歌を聞けえっ！！！！」

そう言いながら、クルセイダーフォトンはギターを掻き鳴らす。

「行くぜっ！！！！」

そう叫んでから、クルセイダーフォトンは歌いだす。曲は某熱気バサラの『突撃ラブハート』だった。

何故かその歌は、俺たちを『まだまだこれからだ』という気持ちにさせてくれた。

「ヤック・・・デカルチャー・・・」

俺たちは感動しているが、ネガトーンたちはどうやら苦しんでいるようだ。

「ネガ・・・」

「バース、アルム、今だ！」

「OK！こいつで決めるよ！」

琉歌先輩はバースバスターのマガジンを銃口にセットし、ハーモニカネガトーンに狙いを着ける。

「ハデに消し飛べ！！！」

【Cell burst】

バースバスターから高威力威力の光線が放たれ、ハーモニカネガトーンに直撃する！！！！

「ネガトーン！！！」

ハーモニカネガトーンは爆発し、元のハーモニカに戻った。

「今度は私の番だ！」

アルムがシンバルネガトーンAと対峙する。

「聖なる命の輝きが、邪悪な魂を討ち滅ぼす！『聖霊光』！！！」

アルムが放った強力な光がシンバルネガトーンAを包み込む！！！！

「ネ・・・ガ・・・」

シンバルネガトーンAは浄化され、シンバルの片割れに戻った。

「琥珀・・・って言ったっけ！？残りはやれる！？」

「やります！」

俺はタジャスピナーにバックルのコアをはめ込みスキャンする。

【サイ！クジャク！ゾウ！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！！！！】

「プロミネンスクエイク！！！」

タジャスピナーに集まったエネルギーを、そのままシンバルネガトーンBに向けて打ち出す！

「ネ・・・ガトーン！！！！」

シンバルネガトーンBが爆発し、元のシンバルへと戻った。

「ぐぬぬぬぬ・・・覚えておけ！」

「覚えておけ」

トリオなんとかが撤退し、その場には俺、メロディ、リズム、琉歌先輩、クルセイダーフォトン、アルムが残った。

「見事だったドド」

どこからか声がした。

俺たちがその声の主を探すと、覆面で顔を隠し、マントを着けた女性に紫色のフェアリートーンと共に立っていた。

「あなた、誰？」

「キュアミューズドド」

リズムの問いに、何故かフェアリートーンが答えた。「オーズ、バース、アルム、クルセイダーフォトン。お前たちの戦いは見事だったドド。それにひきかえ・・・」

ミューズはメロディとリズムを見つめる。

「オーズたちがいなければお前たち二人はネガトーンに倒されていたドド。それでもプリキュアかドド」

いや、俺も琉歌先輩達が来なかったらやられてたんだけど。

ミューズはそう言って去ろうとした。

「待つて！あなたもプリキュアって事は、あたし達の仲間って事？」

こう問いかけたメロディを一瞥するミューズ。

「・・・私は誰の味方でもないドド」

そう言つてミューズはどこかへと去っていった。

「ほな！新たな出会いとワイらの勝利を祝つて・・・カンパーイ！！！」

「カンパーイ！！！！」

戦闘後、俺たち6人は奏の両親が経営するカップケーキショップ『ラッキースプーン』で祝勝会と自己紹介等を行っていた。

クルセイダーフォトンに変身した「中央^{なかお}音^{ひート}」先輩、精霊騎士アルムに変身した「空野^{そらの}勇騎^{ゆうき}」先輩、バースに変身した「仙堂 琉歌」先輩、そして音先輩の相棒である喋るギターの「アストラル」。

三人と一本の新しい仲間を迎えた事で、これまで以上に安心して戦えるかもしれない。そう思った。

・・・けどこの時。奏が大きな悩みを抱えているなんて。

勝利と新たな仲間を喜ぶ俺たちは、誰も知らなかった。

農と窮地と新戦士たち（後書き）

という訳で新キャラ祭でした。

月光閃火先生、リュウガ先生、改めてありがとうございます。
そしてうつすら設定を追加して申し訳ありませんm（――）m

それでは次回もお楽しみに（＾ー＾）

悩みと初代と二つの新コア（前書き）

琥珀「なあ作者、あんたテスト期間中じゃなかったか？」

息抜きに書いてたら完成してもうた・・・

琥珀「息抜きなら許す。『テスト期間だけど勉強しないで3話くらい更新しちゃうぜヒヤッハウ！』ってなったらライターで町内引きずり回し300週の刑だったぜ」

良かった・・・勉強しててホント良かった・・・

琥珀「それじゃあ皆！最後までバビューンと見てくれよな！」

銀河美少年！？

悩みと初代と二つの新コア

とある町を拠点とする移動屋台「タコカフェ」。

そこであり得ない程のたこ焼きを食べる少女と、それを少し引ききみに見る少女二人がいた。

「美味し〜〜い！！！！やっぱアカネさんのたこ焼きは最高」

「なぎさ、いくらなんでも食べ過ぎじゃない？」

「まあ、なぎささんらしいですけど・・・」

この三人の少女の名はそれぞれ、美墨なぎさ、雪城ほのか、九条ひかりと言う。この三人、一見普通の中学生に見えるが、実はそうではない。

この三人は、伝説の戦士『プリキュア』として、平和を脅かす悪人達と様々な戦いを繰り広げてきたのである。

「だって、アカネさんのたこ焼き美味しいんだもん」
その時。

「探しましたよ、プリキュア」

三人の前に、謎の青年が現れた。

「あんた、誰！？」

「なんで私達がプリキュアって事を知ってるの！？」

警戒する三人に、青年が苦笑いする。

「そう警戒しないでください。僕は紅 渡。君達と同じく、世界を守っている者です。もっとも、この世界ではありませんが」

青年 渡は語り続ける。

「実は、君達に届け物を頼みたいんです」

そう言つて、三人に何かを投げ渡す。

「これは・・・」

「メダル？」

三人に二枚ずつ、紫色のメダルが投げ渡された。

「それを、この世界の仮面ライダーに渡して下さい」

そう言った渡の後ろに、灰色のオーロラが現れる。

「では、よろしく願います」

渡はそのオーロラの中に消えていった。

「なんだったんでしよう、あの人・・・」

「とりあえず、つぼみに電話してみよう？あの子この前、『新しいプリキュアと仮面ライダーって戦士に会った』って言ってたよね？」
なぎさはつぼみの携帯に電話をかける。

『はい、花咲です』

「あ、もしもつぼみ？私、なぎさ」

『なぎささん！？どうしたんですか？』

「いや、実はね・・・」

俺は某ジャムプロの歌を口ずさみながら駅へと向かっていた。何故俺は駅に向かっていているのかって？

実は今日、つぼみ達ハートキャッチ組が、三人の知り合いを連れて加音町にやって来るのだ。

しかも只の知り合いじゃない。なんとその三人もプリキュアなのだ。おそらく新人プリキュアである響と奏、そして『仮面ライダー』である俺に興味があるのだろう。

「おーい！琥珀くん！」

見ると、駅前でつぼみが俺に向かって手を振っていた。

俺は少し小走りで皆の元に駆け寄る。

「悪いな。待たせちまって」

「いえ、私達も今来た所ですし」

つぼみ達は7人組だった。という事は、顔を知らない三人が件のプリキュアの方々か。

「えっと、そちらの方々が・・・」

「ああごめん。自己紹介遅くなっちゃったね。あたしは美墨 なぎさ。こっちの黒髪の子が雪白 ほのかで、金髪の子が九条 ひかり」

「俺は黒霧 琥珀。堅苦しいの苦手なんで、琥珀って呼んでくれ」

「じゃああたしたちも名前呼びでお願いね」

「よろしくね、琥珀くん」

・・・なんだってんだ、ほのかの笑顔が可愛い過ぎるぜチクショウ。その時。

「キヤアアアア!!!」

どこからか叫び声が聞こえた。

「今のは!?!」

「皆、行くわよ!」

ゆり姉さんの叫びと共に俺たちは走り出した。

「なんじゃこら・・・」

この状況を言い表すにはそれしかなかった。

多数の羽の生えた真つ青な小人みたいな化け物が女性を襲っていた。

「あれは・・・ピクシー?」

ほのかが呟く。なるほど、言われてみれば某稲妻形傷持ち魔法使いの映画にあんなのが出ていた気がする。

「とりあえず倒す！」

俺は久々にタトバの三枚を装填してスキャンする。

【タカ！トラ！バツタ！！！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！！！】

「この世に蔓延る悪の野望を、三つのメダルで打ち砕く！仮面ライダーオーズ！堂々見参！！！」

口上をかましてから走り出し、近場のピクシーに拳を叩きつける。

「オラアツ！」

「ギャツ！」

気味悪い叫びをあげながらセルメダルをばら蒔くピクシー……つてセルメダル！？

「こいつら、ヤミーか！」

タイプとしてはメズールのヤミーに近いのだろう。

しかし想像上の生物がモチーフだからいつぞやのトルヤミーと同じグリードが作ったヤミーだし……

「キャキャキャキャキャ！！！」

無数のピクシーヤミーが俺に向かってくる。

「ちっ！」

トラをカマキリに変えて再スキャン。

【タカ！カマキリ！バツタ！！！】

「はあっ！！！」

タカキリバになってカマキリソードを振り回し、群がって来たピクシーヤミーを蹴散らす。

「ギャギイツ！」

俺の周りを囲んでいたピクシーヤミーを数体切り裂いて、俺の周りから分散させる。

「どうした、来いよ！」

ピクシーヤミーは距離を保ったまま攻めてこない。

その時。

「琥珀！」

「琥珀くん、大丈夫!？」

メロディとリズム、そしてバースに変身した琉歌先輩が駆けつける。

「さーて、バシバシ稼ぐわよ！」

琉歌先輩がバースバスターを構えた瞬間・・・

「オンナ・・・」

「オンナダ・・・」

『『『『オンナアアアアアア!!!!!!』』』』

「え!？」

「ちょ、何よ!？」

ピクシーヤミーはメロディと琉歌先輩、そしてつぼみ、いつき、なぎさに群がり始めた。

「メロディ！」

「琉歌先輩！」

俺とリズムは二人を、ほのか達はつぼみ達三人を助け出そうとするが、ピクシーヤミーは一瞬にして五人を連れ去って行った。

「・・・・・・・・ちくしょおおお!!!!!!」

「ん・・・・・・・・」

気がつくと、あたしは縄で縛られて、かなり広い部屋にいた。

琉歌先輩、つぼみ、いつき、それに誰かは知らないけどショートカ

ツトの女の子も一緒に縛られていた。

「琉歌先輩！つぼみ！いつき！」

あたしの声で、皆も目をさました。

「響さん、いたいこは・・・」

「つたく、何よこの縄！こんな事するなんて、どこのどいつよ！」

その時、扉が開いて男の人が入って来た。

「やあ子猫ちゃん達、お目覚めかな？」

「・・・なんかこの人、気持ち悪い。」

「何が子猫ちゃんよ！ヤミー使って人さらいしてる卑怯者のくせに！」

「卑怯者とは心外だなあ子猫ちゃん。僕はただ君たちを天使にしようとしているだけなのに」

「・・・この人、目がイッテる・・・」

琥珀、奏。早く助けて・・・

俺たちは音先輩と勇騎先輩と合流し、五人を助けるべく作戦を練ることにした。

「すみません、俺のせいで・・・」

「しょうがないだろう。相手の目的が分からなかった以上、後手に回ってしまうのは仕方がない」

「まずは相手がどこを拠点しとるかを探すか。確かヤミーっちゅうのは人間の欲望から生まれとるんやろ？」

あれこれと話していると。

「琥珀くん、ちょっと一人にさせてもらっても良いかな？」

「ん？ああ、わかった」

そうして奏は俺たちの輪から外れていった。

「はあ……」

また役に立てなかった。

響がベルティエを手に入れたり、琥珀くんが新しい力を披露したり、音先輩や琉歌先輩、勇騎先輩という新しい戦士達が現れる度に思う。
……自分は足手まといなんじゃないか、って。

「はあ……」

「何か悩んでる？」

落ち込む私の隣にほのかさんが腰掛けた。

「ほのか……さん？」

「もし良かったら、話してくれないかしら？」

私は、正直にすべてを打ち明けた。

「……そうだったの……」

「私にはベルティエもないし、琥珀くんや先輩達みたいに優れた能力があるわけでも無いから、ネガトーンやヤミーと戦う度にそう考えちゃって……」

「考えすぎじゃないかしら？」
え……？

「今までプリキュアとして戦ってきたなら、『自分にしか出来ないこと』があるって気付くはずよ?」

自分にしか出来ないこと・・・?

「あなたの他にも、『自分は足手まといじゃないか』って悩んだプリキュアはたくさんいたわ。けどね、彼女達は『自分にしか出来ないこと』を見つけて誰よりも強くなったの。だから、あなたも今より強くなる事が出来るはずよ」

ほのかさん・・・

「二人とも、いいか!？」

私たちの元に琥珀くんが駆け寄ってきた。

「ヤミーがまた出た。追いかければ響達を助けられるかもしれない!!--!」

ヤミーが・・・

待ってて響、私が必ず助けるから!

「・・・あんなのにヤミーを仕掛けるんじゃないわ」

私はビルの屋上から、ピクシーヤミーが暴れまわっているのを眺めていた。

セルメダルを稼ぐために、美人であればどんな女にも手を出すあの男の欲望を利用してヤミーを作ったのはいいいけど・・・

「やっぱり信条を曲げてまで作る事は無かったかもね・・・」

そんなことを考えていると、眼下に黒霧くん達が走って来るのが見

えた。なるほど、さらわれた仲間を助けるためにピクシーヤミーを追って来たのね。

なら、少し手伝ってあげようかしら。

私は、異形の姿・・・グリードとして本来の姿になる。

『はっ！』

私は、黒霧くん達の元に飛び降りた。

俺たちはピクシーヤミーが暴れまわっている現場に到着した。

「これ以上好き勝手させるかよ！」

このタイプのヤミーを倒すために最適な、クワガタ、カマキリ、バッタのメダルをバツクルに装填しようとしたその時。

何者かが俺たちの前に飛び降りてきた。

「な・・・」

「なんやなんや、何者や！」

俺たちの前に現れたのは、黒く禍々しい、何をモチーフにしたのか分からない怪人。

ただ一つ分かるのは、そいつが女性だって事だ。

『ふう・・・初めまして、ね。オーズ、プリキュア、それに・・・クルセイダーフォトンにアルム、だっけ？』

喋った・・・？

「何者だあんた。何故俺たちの事を知っている」

勇騎先輩が怪人に問いかける。

『私はヴァイジャヤ。欲望を糧にする『グリード』の一人よ』

・・・やっぱり、この世界にもグリードがいたのか。

『とりあえず、そんなに身構えないでくれないかしら？ 私は今あなたたちと戦うつもりは無いわよ』

『その言葉、どうやって信じる言うんや』

音先輩が『アストラル』を取り出そうとする。

『そうねえ・・・これなら信じてもらえるかしら？』

ヴァイジャヤは俺に何かを投げ渡した。

『これは・・・コアメダル？』

見たことのない、黒いコアメダル。

『この意味は、オーズであるあなたなら分かるでしょう？』

『・・・ああ、よく分かるよ』

グリードにとつてコアメダルを失うということは、自分の力を失うということだ。

『音先輩、勇騎先輩。あいつ嘘は言ってますん』

『・・・何故そう言い切るん』

『俺たちを倒す気なら、コアメダルなんて渡しません。万全の状態で俺たちを叩き潰すはずです』

『オーズの言う通りよ。それにそのメダル、そこのお嬢さんたちが持つてるコアメダルの暴走を押さえ込む力も持つてるわ』

は？誰がコアメダルを持つてるって？

『あ、そういえば・・・』

ほのかとひかりが、俺に二種の紫色のコアメダルを渡した。

『紅 渡って人に『この世界のオーズに渡してほしい』って頼まれて・・・』

・・・なんだか今が人生で一番『ああ、俺転生したんだ』って思った。

『種明かししちゃうとね、その紫のメダルは恐竜系のコアメダルで、私のは幻獣系のコアメダル。私のコアも紫のコアと同じくらい強力な力を発揮するけど、私のコアはその紫のコアの暴走を封じる効果

があるのよ』

「ちよつと待て。他種族のコアメダルの力を抑制する能力を持ったコアメダルなんて聞いた事無いぞ」

『そんな事私に聞かれても、そういう物としか言えないわよ』

ヴァイジャヤは肩をすくめるような素振りを見せる。

『で？お友達は助けに行かなくて良いの？今なら頼もしい案内人付きよ？』

・・・地獄への、が付かない事を祈るよ。

結局ヴァイジャヤの誘いに乗った俺たちは、町外れにある古い洋館にたどり着いた。

『私が案内するのはここまでよ。後は自分たちで頑張りなさい』

そう言っただけヴァイジャヤはどこかに消えた。・・・きつとどこかに隠れて、ピクシーヤミーが生成したセルメダルを回収するつもりなんだろう。

「よっしゃ、行くで！！！」

音先輩の声と共に、俺たちは洋館に踏み込んだ。

「・・・どうやら、不粋な訪問者の様だね」

俺たちの目の前には、恐らくピクシーヤミーの親であろう男が立っていた。

「人さらに不粋とか言われたくねえよ！！！」

「・・・どうやら、話も通じないらしいね」

どっちがだ。

男の後ろから、かなりたくさんのかき出しやミミが出てきた。

「ここは俺に任せて、皆はさらわれた人たちを……！」

「わかった！」

「気をつけや！」

皆が走りだすのと同時に、俺はメダルを三枚取り出す。

この狭い中でガタキリバになるわけにはいかないので、サイ、カマ
キリ、コンドルの三枚。

バックルに装填して、スキャン。

「変身……！」

【サイ！カマキリ！コンドル……！】

サキリドルに変身して、俺はヤミミに立ち向かう。

「行くぜ……！」

私たちはヤミミを琥珀くん任せて、響たちや他のさらわれた人達を助けるために洋館の奥へと向かい、そこで縛られている響達や、さらわれた人達を見つけた。

「響……！」

「奏……！」

私たちは縛られている皆の縄をほどく。

「響、奏、この人たちは俺たちに任せて、琥珀の援護を頼む……！」

「……はい……！」

「はあっ！！！」

カマキリソードを振り回し、近場のピクシーヤミーをぶった斬る。
あれからなんとかヤミーを外に誘きだしたのだが、あまりにも多すぎてメダルを変える暇がない。

「ったく、本当勘弁してくれよ・・・」

構えながらもぼやいていると、響と奏が駆け寄ってきた。

「琥珀、大丈夫！？」

「助かった！メダルを変えるから、援護してくれ！」

「わかったわ！」

二人はキュアモジューレを取り出した。

「レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション！！！」

響はメロディに、奏はリズムに変身する。

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪弾くは、たおやかなる調べ！キュアリズム！」

「届け！二人の組曲！！スイートプリキュア！！！」

二人が変身したその時。

『『『ウオゴオオオ！！！！！！』』』』

ピクシーヤミーが叫びだし、50体近くが2mほどの怪人態に、20体近くがネガトーンほどのサイズになる。

「欲望が暴走したのか・・・？」

とはいえ、あいつらが一瞬でも止まったのは好都合だ。

バックルのサイメダルをクワガタメダルに、コンドルメダルをバツメダルにしてスキャン。

「超変身！」

【クワガタ！カマキリ！バツタ！！ガタガタキリッバ！ガタキリバツ！！！】

サキリドルから昆虫系コアメダルのコンボ、ガタキリバコンボに。

「オーズ流忍法！分け身の術！」

こう叫ぶと、俺の周りに分身が49体出てきた。

「これで決まりだ！」再びバックルをスキャン。俺の分身たちもバツクルをスキャンする。

【スキャンングチャージ！】×50

「ガタキリバキック！！！」×50

俺と49体の分身の蹴りがピクシーヤミー怪人態に命中する！！！！

『『『『『ギヤアアアアアアアア！！！！』』』』』

50体の怪人態は爆発し、セルメダルになる。

「後はネガトーンサイズの20体だけ……ぐっ！？」

もう一度スキャンングチャージしようとしたが、変身が解除され、

俺はその場に膝をついてしまう。「……そりやそうだ。いくら慣れたつつつても、前回と今回でコンボ2連続だもんな……」

後は……

「プリキュア！パッショナートハーモニー！！！」

私とメロディの攻撃がヤミーの一体を撃破する。

けど、周りにはまだまだヤミーがいる。

「くっ・・・まだまだ!」

私とメロディは体勢を立て直す。

その時。

「プリキュア!シルバーフォルテウェーブ!!!」

「聖皇剣!破邪の太刀!!!」

私たちの前にいたヤミーの一体が花状の光に包まれて、もう一体が真つ二つになって爆発する。

キュアムーンライトとアルムが助けに来てくれた。

「二人とも、ありがとうございます!」

「私たちだけじゃないわ」

「ああ。ブロッサムにマリン、サンシャインにクルセイダーフォトン。それに・・・あの三人もな」

アルムの視線の先を見ると、そこにはほのかさん達が。

「なんでここに!?!危険です、早く逃げて!!!」

「大丈夫。あたしたち、結構強いから」

「奏さん・・・いえ、キュアリズム。見ていて・・・私たちの、本当の姿!」

ほのかさんとなぎささんはお互いの手を取り合い、ひかりさんは何かを取り出して叫ぶ。

「デュアルオーロラウェーブ!!!」

「ルミナス!シャイニングストリーム!!!」

三人の体を光が包み、その光が消えると、なぎささんは黒、ほのかさんは白、ひかりさんはピンクと白の衣装を身にまとっていた。

「光の使者、キュアブラック!」

「光の使者、キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!!!」

「闇の力の僕たちよ!!!」

「とつととおうちに、帰りなさい!!!」

「輝く命、シャイニールミナス！光の心と光の意思、全てを一つにするために！」

ほのかさん達も、プリキュア・・・？

俺は三人の変身を見て、あまりの凄さに腰が抜けた。いや、元々抜けてたけど。

変身も凄かったが戦闘も物凄い。

ブラックは「まっくのうち！まっくのうち！」と合いの手を入れたくなるような連打で、ホワイトは鮮やかな柔術で、ルミナスはオーソドックスながらも完璧なコンビネーションで、バッタバタとヤミーを薙ぎ倒していく。

「俺よりガチバトルしてるな、あの三人・・・」

ハートキャッチ組やアルム、クルセイダーフォトンの活躍により、ついに残るヤミーはあと一体。

「みんな、あのヤミーは私に任せて！」

リズムがヤミーの前に立ちはだかった。

「私には、メロディ達みたいな力も、琥珀くんたちみたいに強い精神を持つてる訳でもない・・・けど！私は、みんなを支えてみせる！！！」

その時、リズムの胸元が輝いた！

「こ、今度こそアブリボワゼか！？」

「んな訳無いでしょ！？ベルティエよベルティエ！」

んなこたあ百も承知だ。

「刻みましよう、大いなるリズム！ファンタスティックベルティエ
！！！おいで、ファリー」

リズムの取り出したベルティエに、黄色いフェアリートーンが装着
される。

「駆け巡れ、トーンのリング！プリキュア！ミュージッククロンド！
！！」

リズムが飛ばした光のリングがヤミーに直撃する！！！！

「三拍子っ いちっ、にいっ、さんっ フィナーレっ」

リズムの掛け声と同時にヤミーは爆発。これでヤミーはすべてセル
メダルになった。

その瞬間だった。

辺りに散らばっていたセルメダルが宙に浮き、飛んでいく。

『はゝい、お疲れ様』

やっぱりそのつもりだったか、ヴァイジャヤ。

「あんた、やっぱりセルメダル狙いで俺たちを・・・」

『あつたり』 それじゃあ、ばゝいに』

古いネタを言つてヴァイジャヤは去つていった。

夕方。

俺たちはハートキャッチ組となぎさたちを見送りに来ていた。

「いや、それにしても奏のカップケーキ美味しかった。」

「ホントホント！あたしのフルコースのデザートは奏のカップケーキで決まりだよ。」

「はしゃぐえりかとなぎさ。というかその梓は『虹の実』とかじゃなくて良いのか？まあ食えんけど。」

「今回はバタバタしてそれどころじゃなかったけど、今度加音町に来たときはゆつくりしていつてね！」

「今度はワイの歌も聞きに来てえな！ライブハウスのドリンク代くらいならサービスするさかい！」

響と音先輩の言葉と共に、電車の到着を告げるアナウンスが鳴る。

こうして七人は帰っていった。

「また・・・会えるよね」

奏が少し呟く。

「会えるさ」

そう遠くない時期に、きっと・・・

その時は、とんでもない厄介事が絡むだろうが。

「う~~~~！あたしのセルメダル~~~~！！！」

琥珀達がつぼみやなぎさたちを見送っている間、勇騎はファーストフード店で琉歌の自棄バーガーに付き合わされていた。

「なあ琉歌・・・もう20個も食ってるぞ？そろそろ止めておいた方が・・・」

「ヤダ！」

涙目でハンバーガーを食い続ける琉歌。

「はあ・・・せっかく夜飯ぐらいは奢ろうと思ったのにな・・・」

勇騎の言葉に、ピタリと止まる琉歌。

「・・・ホント？」

「・・・嘘ついてどうする」

「じゃあちよつと待ってて！すぐにこれ食べきっちゃうから！」

「いや、今から奢るって言ってるのに」

「奢りは別腹！」

このあと、勇騎の財布は脅威的な胃袋を持つ琉歌によって壊滅的打撃を受けたが・・・

それはまた、別の話。

悩みと初代と二つの新コア（後書き）

ガタキリバにMH組にリズムのベルティエ、更に恐竜系コアメダルと幻獣系コアメダル獲得というてんこ盛りなお話でした。

さて、次回から異世界訪問編スタート！

感想ページに寄せられた世界から作者が単に行かせたい世界まで盛りだくさん！（なお、加音町チームが行く異世界は諸事情により感想ページに寄せられた順番とは異なります）

という訳で作者のあとがきはここまでにして、次回予告に行きます！

じゅかい！第12話！

琥珀「異世界に行け、だあ！？」

響・奏「宇宙人が弁当屋やってる!?!」

???「若い奴らにばかり任せておけるかよ!行くぞ皆!」

???x5

「激走!アクセルチェンジャー!?!」

次回!【激走戦隊:まさかの割り込み!?!ワル知恵教授の息子!】

響・奏・琥珀

「自転車、バイク、自動車を運転しながら携帯は弄らないでね(ゝるなよ)」!

特報（決定版）

「俺、参上！！！！」

特報

「この世界を我らの手に！！！！」

『『『『『イーーーー！！！！！！』』』』』

続々と蘇る歴代悪の組織によって、『スイートプリキュアの世界』、
絶対絶命のピンチに！

「この世界を・・・お前らの好きにはさせない！」

「悪の野望が途絶えぬ限り・・・」

「我々仮面ライダーが倒れる事はない！！！！」

このピンチに、歴代仮面ライダーと・・・

「派手に行くぜっ！……！」

あのとんでもなくゴージャスな奴らも立ち上がる……！！

この豪華共演は、TVでは絶対に見られない……！！

【プリキュア&仮面ライダー feat.ゴージャススーパーオールスターズ！ 超決戦！時空を越えた絆……！！】

「なんだなんだ、一体何が起こってる！？」
オーズ、全コンボ集結……！！

特報（決定版）（後書き）

「またかよ」って思ってる方大勢いると思います。
でもこれ「決定版」ですので。

本編の方はもうちょいお待ち下さいm——（m

激走戦隊：まさかの割り込み！？ワル知恵教授の息子！（前書き）

皆様のお陰で10万PV突破しました＼（^^）／

これからも「加音町での転生活」と、最近更新した劇場版「プリキュア&mp：仮面ライダーfeat.ゴージャススーパーオールスターズ！超決戦！時空を越えた絆！！」をよろしく願いますm（――）m

また一つ訂正を。

前回「異世界編」と報告しましたが、何回かに小分けしてやりたいと思いますm（――）m
それではどうぞ（^^）

激走戦隊：まさかの割り込み！？ワル知恵教授の息子！

「平和やなあ〜」

「平和ね〜」

「平和ですね〜」ある日曜の昼下がりに。

俺たちは「ラッキースプーン」でゆったりと過ごしていた。

冒頭の台詞は順に、音先輩、琉歌先輩、奏である。

「いくらなんでも気を抜きすぎじゃないか？」

「まあ、たまには良いんじゃないっすか？」

苦言を呈する勇騎先輩をなだめる俺。

しかし、今日は平和すぎるほど平和だった。

その時。

「はじめまして、皆さん」俺たちの前に謎の青年が現れた。

「なんやあんたは！？」

「僕の名は紅 渡。世界の管理者の一人です」

・・・良かった。大人の方で本当良かった。

「琥珀くん、紫のコアメダルは届きましたか？」

「え、ええ。ありがとうございます」

「で、何のよう？まさかそれだけ言いに来たわけじゃないでしょ？」

琉歌先輩が不機嫌そうに尋ねる。

「実は・・・君たちに異世界に行つて貰いたいんです」

「「「「「・・・は？」「」「」「」

俺以外がキョトン、とする。

そりゃそうだろうな・・・

「行つて欲しい世界は3つ。その3つの世界は、それぞれ『起こるはずの無かった脅威』にさらされようとしています」

「起こるはずの無かった脅威・・・？」

「説明している時間はありません。お願いできますか？」

「俺は良いですけど、みんなは・・・」

みんなの方を振り向くと、みんな何故か腕組みしていた。

「別にかまへんで？」

「同じくだ」

「異世界なんて行こうと思って行ける所でもないしね」

「琥珀「くん」、行こう！」

みんな・・・

「分かりました、行きます！」

「ありがとうございます。それでは・・・」

渡さんが指を鳴らすと、お馴染みの灰色のオーロラが現れる。

「1つの世界で事件を解決するたびにこのオーロラが現れるようにしておきました。それでは、幸運を」

俺たちは、オーロラの中へと入った。

「暇やなあ」

「暇よねえ」

「暇でございますねえ」

とある世界にあるしがない自動車店「ペガサス」。その社員である「上杉 実」、「八神 洋子」、「土門 直樹」はそれぞれの机に突っ伏していた。

「あんた達ねえ・・・もうちょっとシャキツとしなさいよ」

三人に「志乃原 菜摘」が苦言を呈した。

「んな事ゆったかて、エグゾスを倒してから地球も平和やし、この

「・・・っう・・・」

オーロラをくぐり抜けた先は、雪国でもなんでもなく、地面に大激突するはめになった。

「皆無事か・・・？」

「「「「「「「「「「「「「「「「」

7人の声が返ってくる。

「・・・ん？7人？」

「番号、年齢若い順に」

「1」

「2」

「3」

「4」

「5」

「6」

「7」

「やっぱり二人多い！二人おっさんが混じってる！！！」

「「おっさんって言うな！！！」」

俺たち6人は、「ペガサス」の社員さん5人、いや、俺の前世で言うところの「激走戦隊カーレンジャー」に事情を説明した。

「なるほど、異世界から・・・」

「それなら、天井から落ちて来たのも納得でございます」

恭介さんと直樹さんが頷く。やっぱりカーレンジャー勢は順応力が高い。

実さんは音先輩と意気投合してるし、女性陣は女性陣でキャピキャピしている。その時。

「みくんな～！久しぶりダップ！」

なんか不細工な宇宙人が「ペガサス」に入ってきた。

「なんか出たあ！！！」

響と奏が宇宙人を見て叫んだ。

「あんたが『訪れるはずのない驚異』って奴ね！？覚悟しなさい！！！」

琉歌先輩がバースドライバーに手をかける。

「ちよつと待った！あんたダップをどうする気だ！！！」

「・・・・・・ダップ？」

俺とカーレンジャー以外の皆が首を傾げる。

「ダップダップ！よろしくダップ！」

「・・・・・・知り合いだったのか（んだ）・・・・・・」

ダップは誤解を解くと、カーレンジャー勢に向き直る。

「そうだ皆、大変ダップ！」

その時、どこかで爆発音が響いた。

「なんや今のは！」

「みんな行くぞ！」

俺たちは爆発音のした方向へと走り出した。

町中ではボーゾックの戦闘員、ワンパーが暴れていた。

「なんでワンパーが暴れているでございますか!？」

「ボーゾックは解散したはずやろ!!!」

ワンパーは俺たちを見ると、一目散に襲いかかってきた。

「ちっ、琉歌先輩!」

「OK!行くわよ!!!」

俺はタトバの三枚をバツクルに装填してスキャンし、琉歌先輩はバーストライバーにセルメダルを装填してグリップを回す。

「「変身!!!」」

【タカ!トラ!バツタ!!!タ・ト・バ!タトバ!タ・ト・バ!!!】

「口上省略!」

「右に同じ!」

俺はタトバコンボに、琉歌先輩はバースに変身して走り出す。

「おらあっ!」

ワンパーの一体を殴り飛ばし、後ろから迫ってきたワンパーにエルボーを叩き込んで、更に回し蹴りを叩き込む。

「おりやつ!はあっ!よいしょっ!!!」

琉歌先輩はニーキックや左右のフックを多様してワンパーを蹴散らしていく。

「二人共!」

「私達を忘れてもらっては困るな!」

すでに変身したメロディとリズム、アルムとクルセイダーフォトンもワンパーを蹴散らしていく。

「リッチブラスター!!!」

どこからか光線が飛んできて、俺たちの足元に着弾する。

「いけませんねえ若者達よ。私が出があるのは君たちでは無いのですよ」

なんかすらつとした宇宙人が出てきた。

「何よあんだ！」

「これは失礼いたしました。私、こういう者でございます」

宇宙人は俺たちに名刺を渡して、再び元の位置に戻った。

「えーっと、『宇宙犯罪コンサルタントのカリスマ、リッチハイカーJr.』・・・？」

「その通り！私、全銀河をまたにける宇宙犯罪コンサルタント、リッチハイカーJr.と申します！」

・・・リッチハイカー『Jr.』って事は・・・

「実は私、かの伝説の宇宙犯罪コンサルタント、「リッチハイカー教授」の息子なのですが、その父はチーキュの『激走戦隊カーレンジャー』に倒されてしまいました」

「・・・はあ・・・」

「先ほどは『用は無い』と申しましたが、皆さんをチーキュのヒーローと見込んでお願いがあります。『激走戦隊カーレンジャー』を呼んできて頂けませんか？」

お前、犯罪コンサルタントとしての威厳は無いのか・・・

「ちよーっと待ったあ！」

俺たちの前に恭介さんたちが歩みでる。

「なんですかあなたたちは！私はチーキュの一般市民に用はありませんよ！？」

「じゃあしいわい！ワイらが親子共々ぶつとばしたるわー！！」
恭介さんたちは・・・名前忘れたけど、鍵を取り出した。

「皆行くぞ！」

「・・・激走！アクセルチェンジャー！！」

五人の身体を光が包み、色とりどりのスーツに変わる。

「レッドレーサー！」

「ブルーレーサー！」

「グリーンレーサー！」

「イエローレーサー！」

「ピンクレーサー！」

「……戦う交通安全！激走戦隊！カアアレンジャア……！」
「……」

生でこの名乗りを聞けるなんて……泣けるぜ！

「行くぜ！」

カーレンジャーは走り出し、リッチハイカーJr.に攻撃しようとする。

しかし、それは何者かに阻まれた。

「なんやあいつら！」

またしても現れた宇宙人。しかも二人組。

一人は胸に稲妻マーク、腰に二本の剣を装備している。

もう一人は、ピッチピチのアニメキャラ入りTシャツをGパンに入れたような……ぶつちゃけ偏見だらけなオタク像を形にしたような姿だった

「ヒヤハツハア！俺様は宇宙一の凶戦士！VVヴァサード！」
ヴァーヴァー

「ぼ、僕は宇宙一のアニメオタク、OOオターリンなんだな」
オオ

「リッチハイカーJr.！」

レッドレーサーがリッチハイカーJr.に叫ぶ。

「なんででしょうか？」

「OOオターリンの方、チェンジで」

この言葉に、リッチハイカー側はずっこける。

「待ちなさいカーレンジャー！そんな制度はありませんよ……！」

「だってなあ……」

「彼を倒したら、ヒーローとして胸を張れないでございます！」

「せやせや！そんな秋葉系宇宙人を倒したら、カーレンジャーの株ががた落ちやで！」

「って言うか、あれと関わるのが嫌！」

「カーレンジャーの意見ももつともだわ！だいたい、あんたみたいのがいるから世間一般のオタクの品位がさがんのよ！」

レッドレーサー、ブルーレーサー、グリーンレーサー、ピンクレーサー、琉歌先輩にめったくそに言われるOOオターリン。

「・・・オ」

「・・・・オ？」「・・・・」

「オタクを馬鹿にするなああああ！！！」

OOオターリンは急にブチキレたと思ったら、高速で動き回ってカーレンジャーに攻撃を شدした。

「・・・・うわああああ！！！！！！」

オターリンの攻撃で吹き飛ばされるカーレンジャー。

「ヒヤッハア！次は俺様の番だあ！！！！」

VVヴァサードが二振りの剣を抜いて飛びかってくる。

「させるか！」

【タカ！カマキリ！バツタ！！！】

タカキリバへ変身した俺はカマキリソードでヴァサードの攻撃を受け流す。

「はあ！リヤア！ヒヤハッハア！」

「はっ！はあっ！オラアッ！！！！」

ヴァサードの連撃を必死に受け流す。

「やるなあ、ヒヤッハア！」

「ごあっ！！！！」

ヴァサードの頭突きを受けて俺は体勢を崩してしまう。

「ヒヤア！ヒヤハッハア！！！！」

「ぐわあああっ！！！！」

体勢を崩した所に連撃を食らってしまう。

「フッフッフ。今回はこの辺にしておきましょうか。では皆様、またの機会に」

そう言ってリッチハイカーJr.たちは消えていった。

「しかし、どうすりや良いんだ・・・」

恭介さんがペガサス地下の秘密基地で呟いた。

「なんとか、リッチハイカー」r. たちの弱点を知ることが出来れば・・・」

「それならば、本官がすべて知っているぞ!!!」

「シグナルマン、少し黙っててくれ・・・シグナルマン!？」

ペガサスの秘密基地に現れたのは、全身に信号やらパトランプなんかがついている宇宙警察官　シグナルマンがいた。

そういえば、彼の宇宙警察と『デカレンジャー』の宇宙警察ってどう違うんだろうね？

「それにしてもカーレンジャー! 本官に断りなく異世界から未成年者を6人も招くとは何事だ!!!」

「なんでそんな事までお前に断り入れなきゃいけないんだよ!!!」
確かに。

「それはそうと、異世界から来た諸君、はじめまして! 本官は宇宙警察のシグナルマン・ポリス・コバーン。以後よろしく! あ、これお近づきのしるしに・・・」

シグナルマンは俺たちに、シグナルマンの顔がデザインされた金太郎飴を渡してきた。

「え」と、これは・・・」

「シグナルマンキャンディーだ! チーキュの飴細工職人の方に作っ

て頂いたから味は保証済みだぞ！」

「・・・なんて中の人ネタだ。全力で叫びたいところだが、俺が転生者って事をこんな事でばらしたくはない。」

「あ、美味しい・・・」

響さんや、空気を読もう。そんな時、雷鳴のような音が轟いた。

「な、なんでございますか？」

皆が驚く中、琉歌先輩が恥ずかしそうに手を挙げた。

「・・・ゴメン、あたしの腹の虫」

俺と勇騎先輩以外は総ズツコケ。

「まあ、昼時だしな・・・よし、飯買ってくるか！！！」

俺と響、奏、琉歌先輩は恭介さんに連れられて、とある弁当屋に来ていた。

「いらっしゃい！」

「ようガイナモ！焼き肉弁当を13人前、大急ぎで！」

「はいよ、ちよつと待っててちようだいよ！」

恭介さん、いくら常連だからって俺らに紹介無しに注文するのはどうなんだい？

しかもほら、俺以外硬直しちゃってるし。

「「う・・・宇宙人が弁当屋やってる！？」」

そりゃあ驚くだろう。曲線的な装甲で顔のほとんどを覆ってる宇宙人が焼肉弁当13人前作ってたら誰だってびっくりするよ。

「なんだいなんだいお嬢ちゃん達！宇宙人がチーキュで弁当屋やりゃいけないってのかい！？」

多くの人は「自分の星でやれよ」って突っ込みを入れると思うけどな。

「・・・宇宙人だとかなんだとかはどうでも良いから、作れ。早く弁当を！！！」

腹ペコの琉歌先輩がバースバスターをガイナモに突き付けて・・・
って待て待て待て！！！！

「待つてください琉歌先輩！ペガサスの地下に宇宙警察がいるんだから発砲沙汰は駄目です！！！」

このあと、俺と恭介さんが変身してやっとな暴走した琉歌先輩を止める事が出来た。

「……………いっただっきまゝす（ダップ）！！！」

ペガサスの地下。

カーレンジャー組と俺たちは、俺たち買い出し組が買ってきた「キツチンがいなも」の焼肉弁当と「芋長」の芋羊羹を食べながら、作戦会議を行っていた。

「VVヴァサードもOOオターリンも、実はリッチハイカーJr.が宇宙の監獄惑星、『新ジェイル星』から脱走させた囚人なのだ」
シグナルマンが紅しょうがをアホみたいにかけた焼肉弁当を食いな

がら説明してくれた。

たしか『メガレンジャーVSカーレンジャー』でもヘルメードとか言うのが脱獄してたような……

どうなってるんだ、この世界の宇宙警察のセキュリティ。

「ちょい待ってくれや信号のおっさん。あのVVヴァサードつちゅうのは分かるけど、あのオタク宇宙人、そんな悪い事しとったんかい？」

音先輩が問いかける。ってか信号のおっさんて……

「ちなみに、OOオターリンが捕まった理由ってなんなんですか？」
奏がシグナルマンに問いかける。

「うむ。奴の罪は、宇宙一の電気街惑星『^{アイカーベ}AKB星』で、白昼堂々通り魔を働こうとした罪だ」

……シャレにならねえ。その時、部屋内に取り付けられていたパトランプが回り、警報音がなり始める。

「ボーゾック発生ダップ！」

「ダップ、ボーゾックではないでございますよ？」

「そうだったダップ……え〜っと、宇宙犯罪者発生ダップ！」

「よっしゃあ！行くぞみんな！」

「『『『激走！アクセルチェンジャー！！！！』』』」

「え！？ここで変身すんの！？」

俺たちもワタワタと変身する。

「『変身！』」

「『レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション！！』」

「アストラル！トランス・フォーメーション！！自らの内に燃ゆる魂よ！その熱き鼓動を奏で表せ！！」

「精霊よ我に力を、そなた等を襲う穢れを抜わん！はあああ！」
【タカ！トラ！バッタ！！！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！！！】
俺たちもそれぞれタトバコンボ、バース、キュアメロディ、キュアリズム、アルム、クルセイダーフォトンに変身する。

「この世に『みんな行くぞ！！！！』名乗りは現地なの！？」

俺たちはリッチハイカー」r、VVヴァサード、OOオターリンの元へたどり着いた。

「お待ちしておりましたよ、皆さま方」

「ヒヤハツハア！性懲りもなく俺に引き裂かれにきやがったか！！」

「ハアハア・・・ま、魔法少女なんだな・・・」

・・・おい、一人変なのが混じってないか？気のせいかな、気のせいだね・・・

「ほな皆、名乗ってまうか！」

「ちよつと待つてグリーンレーサー。・・・どうせなら、皆カーレンジャー流で名乗らない？」

「それは名案ですでございます！」

「尺の短縮にもなるし、あたしは賛成」

いやピンクレーサー、「尺の短縮」って・・・

「よし、ならそれで行くぞ！」

「レッドレーサー！」

「ブルーレーサー！」

「グリーンレーサー！」

「イエローレーサー！」

「ピンクレーサー！」

「シグナルマン・ポリス・コバーン！」

「仮面ライダーオーズ！」

「仮面ライダーバース！」

「キュアリスム！」

「キュアメロディ！」

「クルセイダーフォトン！」

「精霊騎士アルム！」

皆が名乗った所で、俺は叫ぶ！

「天に輝く！五つ星！！！五星戦隊！」

『『『『『ちよつと待て（ちいや）！！！！！！！！！！』』』』』

「・・・なんでだよ」

「違うから！いろいろと違うから！」

「せやで！正しくはこうや！」

グリーンレーサーが前に踏み出す。

「みなぎる関西スピリッツ！浪花戦隊！」

『『『『『それも違う！！！！！！！！！！』』』』』

「なんであんたが間違えんのよ！」

「いや、関西人の血が騒いでもうて・・・」

「まったく・・・私がやる」

アルムが前に出た。

「五人揃って！」

『『『『『俺（わたくし）（あたし）（わたし）（本官）達は十

二人！！！！！！！！！！』』』』』

珍しい・・・アルムがボケるなんて・・・

これが噂の『カーレンジャー時空』か・・・

「よし、仕切り直しだ！！！」

『『『『『戦う交通安全！激走戦隊！カアアアアアレンジアアアア！……！……！』』』』』 見るだけでも感動だったかやるとなるとさらに感動的だ。異世界に来て良かった。

「ええい、やゝつてしまいなさい！」

『『『チーッス！……！』』』

「ヒヤッハア！……！」

「な、なんだな……」

「皆行くぞ！」

レッドレーサーの叫びと共に俺たちも走り出した。

「マフラーガン！」

「これでもくらいな！」

ブルーレーサーと琉歌は、それぞれ「マフラーガン」と「バースバスター」でワンパーを蹴散らしていく。

「やるじゃねえか！ヒヤッハア！……！」

VVヴァサードが斬りかかってくるが、二人は紙一重でかわす。

「あゝもう！ギヤーギヤーうるさい！」

琉歌はバースドライバーにセルメダルを二枚装填してグリップを回す。

【DRILE ARM】

【SHOVEL ARM】

電子音声と共に、琉歌の右腕にドリルアーム、左腕にシヨベルアームが装着される。

「はっ！はあっ！おりゃあっ！……！」

「ちょ、ま、ぐわあああ……！」

ヴァサードはドリルとシヨベルで滅多殴りにされ吹き飛んだ。

「……カ・イ・カ・ン」

すっきりした様子の琉歌を見て、ブルーレーサーは震える。

（年下なのに……怖すぎるでございます）

「おらおらおらあ……！」

グリーンレーサーは持ち前の怪力でワンパーを持ち上げ、ジャイアントスイングの容量で投げ飛ばす。

「よし、俺も！」

クルセイダーフォトンには手に持った『アストラル』をかき鳴らす。

「サウンディックソリタリー！」

『アストラル』から放たれた旋律は、周りのワンパーをすべて蹴散らした。

「サイドナックル！」

「バンパーボウ！」

イエローレーサーとピンクレーサーはそれぞれの専用武器「サイドナックル」と「バンパーボウ」でワンパーを次々と薙ぎ倒していく。

「はあっ！」

「てえいっ！」

キュアメロディとキュアリズムも自らの体を武器にワンパーを殴り飛ばす。

「ハアハア・・・美少女がいっぱいなんだな・・・」

〇〇オターリンが四人に近寄ってくる。

「キュアメロディ、行くよ！」

「分かりました、イエローレーサー！」

キュアメロディとイエローレーサーは〇〇オターリンに向かって跳躍する。

「ダブルチェッカーチョップ！！！」

二人のチョップを受けて、〇〇はオターリンは派手に吹っ飛ぶ。しかし吹っ飛んだ際、〇〇オターリンはキュアリズムのスカートの中を覗いてしまう。

「きゃ、きゃああああ！！！」

「ち、違うんだな！誤解なんだな！」

「もうあったまきた！キュアリズム！行くよ！！！」

「はい！」

「ちよ、ま・・・」

「ダブル乙女の怒りパーーーーンチ！！！」

「のわああああ！！！」

キュアリズムとピンクレーサーの強烈なアップパーを食らって〇〇オ

ターリンはまたしてもぶっ飛ばされた。

「シグナイザー！ガンモード！」

「聖皇剣！破邪一閃！！！」

シグナルマンは「シグナイザー」から放たれた光弾で、アルムは自らの剣技で蹴散らしていく。

「なあ、シグナルマン！」

「何だ！精霊騎士アルム！」

「・・・私たちの所だけ、敵が少ないな」

「・・・ああ」

「ゴージャスブレード！！！」

「メダジャリバー！！！」

「バイブレード！！！！フェンダーソード！！！」

俺とレッドレーサーは、リッチハイカーＪｒ．と激しいつばぜり合
いを繰り広げていた。

「もらった！」

一瞬の隙を突いてレッドレーサーがリッチハイカーＪｒ．の剣を叩
き落とす。

「しまった！」

「行くぞ！ツインソード・ツインカムクラッシュ！！！」

レッドレーサーがリッチハイカーＪｒ．を左右から挟み込むように
斬り裂く！！！！

「ぬうつ！！！」

リッチハイカーＪｒ．がふらついた所で、レッドレーサーはバイブ
レードを上空に放り投げる。

それを俺はスーパー戦隊名物『俺を踏み台にした！？ジャンプ』で
跳躍して掴む。

「スクエアパニッシュメント！！！」

俺はメダジャリバーとバイブレードで大上段でぶった斬る！！！！

「ぐわああああ！！！！！！！！！」

吹き飛んだリッチハイカーＪｒ．の所に、VVヴァサードとOOオ
ターリンがよろけながら近寄ってきた。

俺とレッドレーサーの元にも皆が駆け寄ってくる。

「それじゃあ、一気に決めちゃいましょう！！！」

全員が必殺技の準備をする。

「ギガブースター！！！」

「ミラクルベルティエ！！！」

「ファンタスティックベルティエ！！！」

【スキヤニングチャージ！！！！】

【CELL BURST】

「行くぜ！ショウダウン！！！」「聖なる命の輝きが、邪悪な魂を
討ち滅ぼす！」

全員の武器にエネルギーが集まる！！！！

「『『『『『オールスターズフルバースト！！！！』』』』』』
光弾やら光のリングやらが一斉に放たれる！！！」

「おのれ、カーレンジャーアアアアア！！！！」

「ヒヤハ、ヒヤハッハアアアア！！！！」

「天使ちゃんマジ天使なんだなあああああ！！！！」リツチハイカ
ーJr、VVヴァサード、OOオターリンは大爆発した。

「もう行っちゃうのか？」

戦いが終わった後、カーレンジャー勢は俺たちを見送ってくれた。

「はい、あと2つ行かなきゃいけない世界が残ってるんで」

「またいつでも来いや！大歓迎するさかい！」

「気をつけてくださいයිございます！」

「カーレンジャーの皆さん、本当にお世話になりました！」

「あの宇宙人に、弁当美味しかったって伝えてちょうだい！」

そうして俺たちは、灰色のオーロラをくぐった。

激走戦隊：まさかの割り込み！？ワル知恵教授の息子！（後書き）

という訳でカーレンジャーの世界でした。

今回は予告が思い付かないので省略しますm（――）m

それでは次回もよろしくお願いしますm（――）m

魔法先生：夏だ！海だ！水棲コンボだ！！！（前書き）

お待たせしました！

琥珀「・・・今まで何してたんだよ」

いやあ、ちよつと天宝来の玉が無くなって・・・

琥珀「・・・それは龍星 王 だろ。お前は龍星 皇」

まあそれはともかく、お待たせしてすみませんでした。

いつもより短めですが、お楽しみくださいm（――）m

魔法先生：夏だ！海だ！水棲コンボだ！！！！

「のわっ！」

「うわっ！」

「どわっ！」

「「「きゃあっ！」」」

またしても地面に落下した俺たち。

「なんで毎回落ちるんだ・・・」

頭を擦りながら立ち上がる。

「・・・貴様ら、何者だ？」

「何者だ、じゃなくて何処の世界だ・・・ん？ちよっと番号、今回も年の若い順に」

「いち・・・ですかね」

「2！」

「3！」

「4・・・ですか？」

「ご、ご・・・」

「6アル！」

「7！」

「8！」

「9！」

「・・・その理屈なら10だな」

「大変だ！5人も多い！」

「だから貴様らは何者だと聞いておろうが！」

顔を上げると、金髪幼女に丸眼鏡をかけた少年、サイドポニーの少女にややおかっぱ気味の少女、褐色肌の少女が立っていた。

「えーっと、ここは・・・」

「坊や、蹴散らしてやれ！」

「ちよ、ちよっと待ってください師匠^{マスター}！！！！この方達の事情も聞い

てあげないと・・・」

「そうだそうだ！弁解を要求する！」

この後数十分の説得でなんとか話を聞いてもらえる事になった。

「異世界から、ですか？」

「そんな戯言をどう信じろと言うのだ」

「俺たちの話は信じない癖に、自分たちが魔法使いだったり吸血鬼だったたり、おまけにその坊やが中学校の教員つてのを俺たちに信じろと？」

「む・・・」

言葉を詰まらせる幼女、もとい「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」。

アナスタキティ

ちなみにこの場には、眼鏡を掛けた少年「ネギ・スプリングフィールド」、サイドポニーの少女「桜咲 刹那」、ややおかっぱ気味の少女「宮崎 のどか」、褐色肌の少女「古菰」、黒髪ロングで眼鏡を掛けた「早乙女 ハルナ」、キラリと輝くオデコが知性的な「綾瀬 夕映」、ゼンマイと魔力のハイブリッドロボ娘「絡操 茶々丸」が同席していた。

ちなみにこの場所、エヴァンジェリンの持つ「別荘」と呼ばれる素敵空間である。

「ワイらはあんたらと敵対するつもりはない。信じてくれや」

「・・・なら、その」

エヴァンジェリンは俺をじっと見つめる。

「・・・はい？」

「首を出せ」

言われた通りに首を出す。

エヴァンジェリンはそこに噛みついた。

「「「「なに「なんやて」！？」「」「」

「ん・・・うむ、ちゅぷ・・・」

目隠したらアレな感じに聞こえる音を立てながら俺の血をすっエヴァンジェリン。

あれ、視界が霞んできた・・・

俺が気が付いた時には、何故か宴会が始まっていた。

「あ、気がつきました？」

ネギが俺に近付いてきた。

「何か食べます？」

「・・・レバー。山盛りで」

俺がそう頼むと、ネギが茶々丸と一緒にレバー刺しと焼かれたレバーが大量に持ってきた。

「どうぞ。・・・先ほどはマスターが失礼しました」

「いや、慣れてるから・・・」

「血を吸われるのにですか？」

「いや、死にかけるのに」

ガキの頃から結構殺されかけたるからな。

「琥珀、気がついた？」

響が山盛りの肉を持って近づいてきた。

「お前・・・太るぞ」

「だ、大丈夫！それよりさ、明日『アラアルバ白き翼』の皆が海に行くんだって！で、あたしたちも一緒に行かないかって誘われたんだけど、琥珀はどうする？」

「・・・『アラアルバ白き翼』？」

知っているが首を傾げる。

「ネギ君達のチーム名なんだって。昔ネギ君のお父さんが『アラアルブラ紅の翼』ってチームのリーダーだった事にあやかってるらしいよ」

ふーん、と適当に相槌を打つ。

「海、ねえ・・・」

どうやら今回の事件はそこで起こるのかね。

「・・・・・・・・海だ（や）・・・・・・・・・・・・・・・・！！」
「・・・・・・・・」
当たり前だろ。

今の叫びは響と奏、ハルナに、ツインテールのツンデレ娘「神楽坂明日菜」と、黒髪の京娘「近衛 木乃香」があげたものである。

「これが日本の海ですか・・・」

ネギが呟く。そういえばイギリス人なんだよね。

「輝く太陽、青い空、そしてまるで塵のような人の群れ。どこの世界でも海ってのは変わらない」

さて、最初にする事と言えば・・・

「場所取りだな」

「ナンパやる」

見事に意見が分かれる年上の男子。

「勇騎先輩に賛成。場所取りしましょう」

俺を含んだ男子勢は十数人が落ち着ける場所を探すべく歩き出した。

場所取りの後は買い出し。

俺は木乃香と響とネギと共に食料の調達に。

「それで、海の家にはどんなものが売ってるんですか？」

ネギが目をキラキラさせて聞いてくる。

「伸びたラーメン」

「肉なし焼きそばとか？」

「じゃがいもだらけのカレーとかもやな」

「え・・・そんなのしか売ってないんですか？」

「「醍醐味ですから「やから」」」

「醍醐味ですか・・・？」

その時。

「らっしやいらっしやい！悪魔に魂売り渡しても惜しくないほど美味しいイカ焼きだよ〜！」

「おいお前！この海でイカ焼きを売るとは良い度胸でゲソな！」

「はあ！？何言ってるんだお前！？」

・・・見なかった。この世界の住人じゃないイカなんて見なかった。

「ハヤテ！イ 娘が！ 力娘がいるぞ！」

「お嬢様！？そんなに急ぐと危ないですよ！」

・・・見なかった。借金執事とその主人なんて本当に見なかった。

「なんか賑やかやな」

賑やか、で片付くのか？

するとその時。

「キシヤアアアアア！！！」

喧しい雄叫び。すると人間型のイカの化け物が暴れていた。

「なんやあれ！？」

「仲間が焼かれてるのを見て暴れてるイカの化け物・・・とか？」

「そんな事言ってる場合ですか！早く止めないと！」

「はいはい、あれは俺に任せておきな」

オーストラライバーを装着して、クワガタ、ゴリラ、コンドルのメダルを装填してスキャン。

「変身！」

【クワガタ！ゴリラ！コンドル！！！】

ガタゴリドルに変身し、軽いステップを踏んで近づく。

「今回は口上省略！」

イカ怪人、略してイ怪人にワンツを叩き込む。

「キシヤア！？」

よろけたイ怪人にさらに連打を叩き込む。

「ふっ！はっ！オラア！！！」

「キシヤアアアアア！！！」

俺のパンチで吹っ飛ばイ怪人。

「キシヤッ！！！」

「おっと！」

イ怪人は苦し紛れに右を打ち下ろしてきたが、俺はゴリラアームで受け止め、から空きの体に三連打を叩き込む。

「キシヤッ！！！」

イ怪人は口から墨を吐きつけてきた。

「な、てめ、この野郎！」

墨によって視界が暗転。

視界が戻ってきた頃には、イ怪人は消えていた。

イ怪人との戦闘を終えた俺たちは、皆の元に戻ったんだが・・・

「増えてね？」

とりあえずそれが第一声だった。

なぜか人数が倍に。

まあ原作通りと言ったならそこまでのなのかもしれんが。

「おゝ！これまた凄いイケメン！」

「お兄さんお名前は？」

おそらく「明石 祐奈」と「柿崎 美砂」が詰めよって来る。

その後は自己紹介に二回目の買い出しと、いろいろ大変だった。

「・・・何も起こらん」

ついに夕方である。イ怪人の襲撃から、まったく何も起こらないのだ。

「あいつを倒さなきゃ次の世界に行けないってのに。どこに行ったのやら」

他の皆はあつというまに麻帆良勢と打ち解けてどっかにいつちまうし。

普段グイグイ行くタイプなのに、なぜか俺は麻帆良勢みたいなタイプが苦手だ。

「あんたを連れ戻しに来たのよ！」

「はいはいそうですか・・・って、え？」
なんだ今の。

とりあえず声がした方に行ってみると、ネギとアスナにツインテールの幼女が対峙していた。

「アーニヤ、だから僕はまだ・・・」

「何言ってるのよ！もし着いてこないっていうなら、力づくでも・・・」

その時、アーニヤとやらの体から砂が出てきて、あのイ怪人が・・・って、え？

「あれ、イマジンだったのか！？」

おのれデイクイド、と叫ぶべきか、それとも俺たちが来たせいで世界がおかしくなってしまったのか。

まあどちらにしても、俺のやることは変わらない。

俺は飛び出し、イマジン スクウィッドイマジンとも呼ばうか、に飛び蹴りを加える。

「どりゃあつ！」

俺の飛び蹴りをくらったスクウィッドイマジンはよろめく。

「仮面ライダー！邪魔は止めてもらおうでゲソ！」

「俺が仮面ライダーって判断したのは褒めてやる。だがその語尾は

止める！」

バックルを装着し、クワガタ、ウナギ、タコを装填してスキャン。
「変身！」

【クワガタ！ウナギ！タコ！！！】

ガタウナタになり、スクウィッドイマジンに駆け寄る。

「ネギ！アスナ！その幼女をしっかり守ってる！」

時を越えられたら俺には対処できないからな。

「分かりました！琥珀君も気をつけて！」

「ありがと・・・よ！」

スクウィッドイマジンに向けて鞭を振り抜く。

「ギギャッ！」

「いつもより多めに電気を流しております、ってな！」

設定出来るかは知らんけど。

「琥珀！」

琉歌先輩がバースバスターを連射しながら走って来た。

「琉歌先輩！他の皆は！？」

「勇騎と音がこの界限では有名な高校生漫才師って事でなんとか一般人を食い止めてる！響と奏はその前座として夫婦漫才！」

「ああなるほど・・・っておい！」

「とにかく早く倒して、次の世界に行くよ！」

「はい！」

俺も走り出し、鞭をスクウィッドイマジンに叩き付ける。

「おらあっ！」

「ゲソッ！？」

スクウィッドイマジンは俺の鞭と琉歌先輩のバースバスターを食らって膝をつく。

「よっし、これで決まりよ！」

琉歌先輩がマガジンを銃口に取り付けた瞬間。

「ゲソオオオオオ！！！」

スクウィッドイマジンが巨大化、というか巨大なイカに姿を変える。

「キヤシャアアアア！！！！」

とりあえずさ、叫び声を統一しなイカ？

・・・ヤバい、移った。

「何よあれ！どうする！？」

「とりあえずタジャドルでイカ焼きに、つてのも考えたんですが・・・
せっかく海だし、こいつで行きます！」

俺はクワガタをシャチに変えてスキャンする。

【シャチ！ウナギ！タコ！！！シャッシャッシャウッタ〜！シャッ
シャッシャウッタ〜！！！】

水棲系コアのコンボ、シャウタコンボに。

「こいつで決まりだ！」

俺はバツクルをもう一度スキャンする。

【スキヤニングチャージ！】

「はっ！」

俺は鞭で巨大イカを捕らえて飛び上がる。

「はあああああ、せいやあああああああ！！！」

タコの様になった俺の足がドリルのように回転し、巨大イカを貫く
！！！！

「ゲソオオオオオ！！！」

巨大イカは結局統一出来なかった叫びをあげて爆発した。

その後俺たちが見たものは。

漫才が意外にも受けていた二組は死ぬほど漫才、モノマネ、モノボケをやらされて真っ白に燃え尽き、酒も入って無いのに100万倍のハイテンションな麻帆良勢。

・・・なんて言うか、あの状況を一言で言い表すなら。

「地獄絵図」という言葉がふさわしかった。

「皆さん、もう行っちゃうんですか？」

「そうだよ。まだ1日しか居ないじゃんか」

その1日が大変だったんだから良いじゃないか。

「また来るがいい。今度は致死量にならんように吸ってやる」
遠慮します。

「じゃあね皆！縁があつたらまた会おう！」

「はい！皆さんお元気で！」

響とネギが言葉を交わした後、俺たちはオーロラの中に入った。

魔法先生：夏だ！海だ！水棲コンボだ！！！（後書き）

・・・はい。無理矢理ですね。

でも「ネギま！」と絡めようと考えたらこれしか浮かびませんでした。すべて力不足によるものです。もっともっと精進します。

さて、今回は思い付いたので次回予告を。

次回！「加音町での転生生活」！

???「クイーン・・・僕と一緒にいこう・・・」

???「この街を泣かせる奴は・・・絶対に許さねえ！」

響・奏「（なんだかデジャブ・・・）」

『Wの世界：【Qの受難／ストーキング・ミッション】』

琥珀「てめえなんかにこの街のアイドルを渡すか！」

これで決まりだ！

Wの世界：【Qの受難／ストーキング・ミッション】（前書き）

お待たせしましたm（――）m

・・・塾だのなんだの忙しすぎるんじゃないやボケエ！！！！

・・・ゲフン。失礼しましたm（――）m

それではどうぞ。

Wの世界：【Qの受難／ストーキング・ミッション】

「ここが最後の世界ね・・・」

琉歌先輩が呟く。

最初に言っておこう、今回は落ちなかった。

「しかし、あれは・・・」

勇騎先輩の言葉に、全員がある一点を見つめる。

そこには、巨大な風車がついたタワー・・・

『風都タワー』があった。

「ふう・・・」

俺はハードボイルド探偵「左 翔太郎」。

どんな時も風が吹きやまない街「風都」でしかない探偵を・・・

パコオーン！

「痛たっ！？何すんだ亜樹子オ！」

「やかましい！モノローグを口で垂れ流すな！」

俺をスリッパで殴ったのは、この「鳴海探偵事務所」の所長の「照井 亜樹子」。

「しょうがないよ亜樹ちゃん。翔太郎のそれはもはや病気だ」
本を片手に、俺の相棒である「フィリップ」が毒づく。

「それにしても暇ね」。依頼の一つや二つこないかな」

亜樹子が呟いた瞬間、事務所のドアが開いた。

扉を開けると、予想通り二人の男性と一人の女性。

「すいませ〜ん。サンタ服のおっさんから紹介されてきたんですけど・・・」

俺が代表して呟くと。

「依頼ですか！？どうぞこちらに！申し遅れました、あたし所長の照井 亜樹子！あそこに座ってるのが左 翔太郎君で、あっちの髪跳ねてるのがフィリップ君！」亜樹ちゃんがこんなにいるさいなんて俺聞いてない。

「おい亜樹子、そんなガキから依頼受けるのか？」

・・・我慢しろ我慢。確かに俺の見てくれは中学生だ。

「いや、翔太郎。彼らはただの子供じゃないよ」

「なん・・・だと・・・？」

翔ちゃんがネタできるなんて俺聞いてない。

「彼らは巷で噂のアイドル『ブライトシンフォニー』のメンバーさ」

・・・はい？

「あ〜〜〜！そう言えばTVで見たことある！」

ちよ、亜樹ちゃん？

「あの、何か勘違いしてませんか？」

「私たち、TVになんて出た事ありませんけど・・・」

「しかもあたし達この世界の人間じゃないし」

琉歌先輩の一言にフィリップ。いやフィリップ『さん』か。

「異世界の人間・・・興味深い！」

フィリップさんが五人とドタバタしている間に俺は翔太郎さんに事情を説明する。

「・・・という訳で、依頼を手伝わせて欲しいんです」

「なるほど。若いのにずいぶん苦労してんだな・・・」

「いやあ、それほどでも」

「誉めてねえぞ」

その時、事務所の扉が開いて、今時の女子高生二人が入って来た。

「翔ちゃん翔ちゃん！」

「おうエリザベス。どうした？」

「クイーンをストーカーしてる奴を捕まえて欲しいの！」

・・・え？

今回の依頼人は翔太郎さんお抱えの情報屋、通称『風都イレギュラーズ』の「クイーン」さんと「エリザベス」さん。

「最近、クイーンを尾行とかしてる奴がいるらしくて、翔ちゃんならなんとかしてくれると思ったの」

「心配しすぎよエリザベス。別に大したことじゃ・・・」

「大したことだよ！それにクイーンに何かあったらどうするの！？」

「エリザベス……」

なんだろう、何か置いてきぼりな気が……

「あの……」

そんな中、奏が申し訳なさそうに手を挙げる。

「ストーカーなら、誰か男の人と歩けばもしかしたら出てくるんじゃない……」

この言葉を聞き、俺、音先輩、翔太郎さんは拳を鳴らす。

「よし、一回勝負な」

「一回だと運ゲー過ぎるんで三回にしましょう」

「なら最初に何回勝負にするかジャンケンで決めよか」

その時、また事務所の扉が開く。

「なあ翔太郎、ちよつと頼みたい事が」

「……そのまま回れ右してビバリーヒルズに帰れ！！！！」

その人物は来た瞬間追い出された。誰かはお察しください。

結局ジャンケン三回勝負が行われ、誰がクイーンさんと共にデート
紛いをするかを決めた。

その結果。

「いよつしゃあああああ！！！！」

張りきりまくる音先輩とかなり落ち込む翔太郎さん。

え？俺？俺はクイーンさんよりエリザベスさん派なんだただ盛り上

げただけ。

「ねえねえ。琥珀くんだっけ？」

「え？はい」

エリザベスさんがやや上目遣いで俺を見つめる。

「あたしとデートしない？」

・・・え？

どうしてこうなった。

確かクイーンさんのストーカーを捕まえるためにクイーンさん×音先輩のペアを作ったはずなのに、なぜエリザベスさん×俺のペアが出来てるんだ？

「ねえエリザベス。こんな事でストーカーなんて出てくるの？」

「さあ？」

「さあつて・・・」

「出てきた時に考えれば良いんじゃない？はあ～～。若い男子つてのはええのう・・・」

「エリザベスさん、暑いです」

「素直じゃないな～うりうり～～」

「ちょ、当たってますよ!？」

「当ててんのよ～～」

「何「や」これ・・・」

俺たちは二組の偽カップルを尾行し、犯人が現れるのを待ち構えていた。

「しっかしさあ、本当にこれでストーカーなんて捕まるの？」
ぼやく琉歌。

「まあ、翔太郎さんの探偵の勘を信じるしかないだろ」

「勇騎、それは違うぞ」

勇騎をたしなめる。

「『探偵の勘』じゃない、『探偵の直感』だ！」

「「「「「はいはい」」」」」

「・・・ほ、ほら！あいつらを見失っちまうぞ！」

俺たちは再び四人を追いかけた。

「さて、そろそろ風都のデートスポットは回り尽くしたんだけど・・・
誰も出てこないね」

「「「『誰も出てこないね』じゃないでしょ「やろ」！...」」」
「ティヒッ」

「そんなペ　ちゃんみたいな笑顔には騙されませんよ」

なんとなくだが、この二人は中の人のキャラに引っ張られてるような気がする。

いや、そんなに中の人に詳しい訳じゃないんだけどさ。その時。

「うわああああ!!!!」

何だかゴム毬みたいなデ・・・もといぽっちゃりした男が俺たちに向けて突っ込んできた。

「危ないんで」

「避けよか」

俺と音先輩は冷静にパートナーを庇って道を空け、ぽっちゃり男の突進を避ける。

「ありがとう」

「いやゝん　ダーリン頼りになるゝゝゝ」

誰がダーリンか。あれ、なんかデジャヴ。

「なんで・・・なんでなんだよ!」

立ち上がったぽっちゃり男が叫ぶ。

「俺がいながら・・・なんでそんな男と一緒にいるんだよクイーン!」

また見事に連れたな。

「よし、作戦成功!」

エリザベスさん、空気を読もう。

「そんな男のどこが良いんだ!?!なんで俺じゃ駄目なんだよ!?!」

その言葉に固まる俺たち四人。

「なんで駄目かと言ったら・・・」

「なんて言うか・・・」

「体型というか服装というか・・・」

「はつきり言ってええならそのボンレスハムみたいな体をどうにかしいや」

「・・・おいしいいい!!!!」

「なんでや、本当のことやろ？」

「そうですけど！ただでさえ危ない感じの人にそんなこと言う人がどこにいるんですか！」

「ここにおるで」

「ドヤ顔禁止！」

「ふざけやがって・・・こうなったら痛い目見せてやる！！！」

ぽっちゃり男・・・もうP男で良いや、は茶色いUSBメモリのよ
うな物を取り出す・・・ってまさか。

【wild board】

P男がそのメモリを顎に当てると、胸に猪の顔を持ったゴツい怪人
に変貌した。

「二人とも、逃げてください」

「こいつはワイらがなんしとくわ」

「そんな！危ないって！」

「大丈夫やって。ワイらには・・・」

【CRANE ARM】

【DRILL ARM】

「頼もしい仲間が居るから」

【CYCLON！JOKER！！！】

ワイヤー付きのドリルがワイルドボアードパントの体をめった打ち
にし、よろけたワイルドボアードパントを右半身が緑、左半身が黒
の何者かが蹴り飛ばす。俺たちの前に、バースに変身した琉歌先輩
と、半分こ怪人・・・もとい、仮面ライダーサイクロンジョーカーWCJが並び立つ。

「『さあ、お前の罪を数えろ！！！！』」

Wが口上を言ってる間に、クインさんとエリザベスさんは無事に
回避。

「ほな、ワイらも行こか！」

「はい！」

俺はタトバの三枚をベルトに装填し、音先輩は背負っていたアスト
ラルを取り出す。

「変身！！！」

「アストラル！トランス・フォーメーション！！自らの内に燃ゆる魂よ！その熱き鼓動を奏で表せ！！」

【タカ！トラ！バツタ！！！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！】

俺はタトバコンボに、音先輩はクルセイダーフォトンに変身する。

「この世に蔓延る悪の野望を、三つのメダルで打ち砕く！仮面ライダーオーズ！堂々見参！！！！」

「轟くは…熱き魂の鼓動の旋律！魂の響撃闘士！」サウンド・ファイター「クルセイダーフォトン」！！」

俺、クルセイダーフォトン、琉歌先輩、WCJが並び立つ・・・つてあれ？

「残りの三人は？」

「あいつらにはクイーンとエリザベスを安全な所に連れて行くように頼んだ」

・・・なんてだろうか。異世界に来てから、カーレンジャーの世界でしかあの三人の変身後を見てない気がする。

『それより翔太郎。あのメモリはワイルドボアのメモリ。ビーストのメモリと同じかそれ以上のパワーを持ったメモリだ』

そういえばそんなメモリもあつたな。エクストリームのかませになつてたけど。

「パワーならあたしたちも負けてないわよ？琥珀！」
「了解！」

俺はトラとバツタをゴリラとゾウに変え、琉歌先輩はセルメダルをバースドライバーに三枚装填してグリップを回す。

【タカ！ゴリラ！ゾウ！！！！】

【DRILL ARM】

【SHOVEL ARM】

【CATAPIRA REGG】

俺はタカゴリゾになり、琉歌先輩はドリルアームとショベルアーム、キヤタピラレッグを装着してワイルドボアドーパントに立ち向かう。

「はあっ！」

「うおっ!？」

ドリルアームでぶん殴り。

「おりゃっ！」

「ひでぶっ!？」

キヤタピラレッグで蹴り払い。

「スクーパーファントム！」

シヨベルアームでかちあげる。　　というかそれはブルドーザー乗りの冒険者の技ですよ。

「う、この・・・」

そうだ。　ちょうどいい感じに距離があるからあれを試してみよう。

俺は両腕をグルグルと回す。

「な、なんだ・・・？」

「大車輪口ケツトパンチ！」

回転させて威力が上がった・・・かはともかく、俺の腕から「ゴリバゴン」が射出され、ワイルドボアードパントに命中する。

「ごわっ！」

ワイルドボアードパントはほぼ何も出来ないまま瀕死である。

「よっしゃ！メモリブレイクだ！」

『待ってくれ翔太郎。ワイルドボアのメモリは攻撃力だけではなく防御力も高い。W単体のマキシмумじゃ恐らく倒せない。ここにいる全員で仕掛けよう』

「おう！」

「賛成」

「了解しました！」

「じゃあ、行けぜ！」

俺たちは各々必殺技の準備をする。

「『『ヒーローズ！クアッドマキシмум！！』』」

四人の必殺技がワイルドボアードパントに炸裂する！！！！

「ぐあああ！！！！」

ワイルドボアード・パントからメモリが排出され、P男は倒れ、メモリも砕けた。

「これにて一件落着！」

で、その後。

P男は結構様々な女性にストーキングを働いていたらしく、一瞬で追い払われたデイルン・・・もとい刃野刑事もその件で来たらしい。つてかガイアメモリ持ちのストーカーの一人や二人照井さんで足りるんじゃないか？

事件解決後は全員で風都の名所巡り。

巨大なナルトがどんぶりを覆っている「風麺」を食べたり、怖い物見たさ、もとい聞きたさにジミー某の歌を聞きに行ったり。

そのあとはカラオケにゲーセンと最近の若者らしい事をやった。

そして、クイーンさんとエリザベスさんが帰った後の鳴海探偵事務所。

「何から何までありがとうございました」

「いやいや、俺たちはほとんど何もしてねえよ」

「また風都にすることがあったら依頼よろしくね！依頼料10%引きにしとくから！」

サービスはしてくれないかい。

そして、灰色のオーロラが現れた。

「「「「「それじゃあまた！！！！」」」」」」

「ラッキースプーンよ！私は帰って来た！！！」

「何言ってるんだ・・・」

やっぱり勇騎先輩のツツコミは加音町で聞くに限る。

この世界の時間は、俺たちが異世界巡りに出てから五分ほどしか立っていなかったらしい。

「ほな、カップケーキ食い直そか！」

音先輩の声と共にラッキースプーンの中に入ろうとした瞬間。とてつもない殺気が俺を襲った。

「！？」

思わず振り返るが、誰もいない。

「琥珀~~~~？どうしたの~~~~？」

きつと気のせいかな。

そのまま俺もラッキースプーンの中に入った。

「ふうん・・・俺の殺気をちゃんと感じれるか・・・」

ビルの上から、銀髪の少年と、長い黒髪を鈴付きのリボンでツインテールにして、前髪を悪魔の翼のようなヘアピンで止めた少女が見ていた。

「ねえリース・・・なんであんな奴ら気にするの？」

リースと呼ばれた少年はクスリと笑う。

「真冬、確かに俺たちよりは格下だけど、相手を過小評価するのは君の悪い癖だよ」

「確かになかなか粒揃いだよね・・・あのプリキュアって二人組以外」

その時、黒く大型のコウモリのような生き物と銀色の小型のコウモリが現れる。

「ふむ・・・なかなか出来る奴らではあるようだな」

「ほんとほんと~~~~ イケメンも多いし・・・キャプツ!？」

銀色のコウモリは真冬と呼ばれた少女にギリギリと締め付けられる。

「キバーラ・・・この世で一番イケメンなのは誰だっけ・・・？」

「リースリース!リースだって分かっているから!だから離して!」

そんな一人と一匹を尻目に、リースは一人笑う。

「楽しませてくれよ・・・黒霧 琥珀君・・・」

Wの世界：【Qの受難／ストーキング・ミッション】（後書き）

・・・はい。いつもの様にGUDAGUDAですね（・・・・・）

そしてラストに紅先生に考えていただいたオリキャラが初登場。

???「おい、俺たちが出てないのはどういう事だ」

???「俺たちにも199ヒーローの時のゴークイシルバーみたいな出番をよこせ！」

君らの出番は次回から。

それでは次回もよろしくお願いしますm（――）m

転校生とアイドルと敵味方（前書き）

お待たせしました。

第二回新キャラ祭り前編。

今回は紅先生に考えて頂いた二人、ライダーGX先生に考えて頂いた一人、完全オリキャラが一人登場。
それではどぞ（ハーー）

転校生とアイドルと敵味方

「う〜〜ん！学校行くの久しぶりな気がするよ〜！」

「確かに、いろいろありすぎたもんね」

夏服になった制服に袖を通した響と奏が語りだした。

「異世界でいろいろやった後にゴークイジャーたちと全平行世界の危機を救って、だからな。久しぶりに感じるのも無理ねえよ」

「琥珀くんや翔太郎さん達の他にも仮面ライダーがいるって知ってびっくりしたし、つぼみさん達やなぎささん達以外のプリキュアとも仲良くなれたし、いろいろあったよね」

今思えばそれだけの激戦だったって事だよな。

その後も俺たちはあの戦いの事を話しながら学校へと向かった。ギリギリ映画の話をしているように聞こえるレベルで。

「はい注目 今日からこのクラスで勉強する仲間が増える・・・とみせかけて増えないと思いきや増えるわよ」

「先生、めんどくさいです」

「最近冷たいわね黒霧君・・・でもその冷たさ、嫌いじゃないわ！」

「はいはい京水京水。ってか転校生を早く紹介してあげませんか？」

「それもそうね。じゃあ、入って来て」

禍原先生の呼び掛けで、銀髪の男子、鈴付きリボンでツインテにし

て前髪を悪魔の翼っぽいヘアピンでとめている少女、〇〇の刹那を三次元化したらこんな顔だろうな、って感じの男子が入ってきた。クラス内はかなりザワザワしてきた。間違っても「ざわ・・・ざわ・・・」ってカイジ、じゃなかった、感じじゃないからな。

「それじゃ、自己紹介よろしくね」

禍原先生の言葉に銀髪の男子から自己紹介を始める。

「リース・アウエンクルスです。至らない所もありますが、これからよろしく願います」

「真冬・アウエンクルスです。芸能活動やってるんであんまり学校に顔は出せないと思いますが、よろしく願います」

「俺の名は高岡 英二！共に青春を謳歌しようぜ！」

なんつー中の人ネタ。おそらく本人に自覚は無いんだろうが。

「さて、このクラスの一限目は私の授業。それがどういふことかは分かるわね？」

「もしもし、ピザ１０枚。大至急」

「という訳で三人の歓迎会をするわよ！」

まあさすがにそんな事は無理なわけで。

三人の歓迎会は後日改めてすることになった。
で、体育の時間である。

体育館の改装を行っているため、男女合同なのである。
で、テニスをやってるわけなんだが。

「・・・男女混合ダブルスをする意味が分からん」

俺の相方はいつの間にか響に決まってた。奏は男子が一人休みなの
で余るため、響と交代で俺と組むことになった。

「琥珀、頑張ろうね!」

まあ負ける事はないとそうそう無いと思うんだが・・・

「それじゃあ次、黒霧・北条ペア対アウエンクルスペア!」

「キヤー! リース君頑張つてー!ー!ー!」

「行くぞお前ら! セーの!」

『『『L! O! V! E! ラブリー真冬!ー!ー!』』』

一部の女子と男子がアウエンクルスペアに熱狂的な歓声を送る。

「つてかなんだあのアイドルヲタ剥き出しな応援は」

「知らないの? 真冬ちゃんって今TVに引っ張りだこのアイドルな
んだよ?」

ふん・・・

「北条さ〜ん! 頑張つて〜!」

「琥珀! 転校生兄妹に目にもみせてやれ!」

お前ら・・・

「よし、行るか響」

「うん! ここでやらなきゃ女が廃る!」

『『『L! O! V! E! ラブリー真冬!ー!ー!』』』
鬱陶しいな・・・

「真冬、笑顔笑顔。せっかくの美貌が台無しだよ」

「リースに誉められるのは嬉しいけど・・・あれはやっぱり引くよ」
「もつと凄いのにつきまとわれた事もあっただろう？」
・・・確かに。

向かいを見ると、琥珀と響がなにやらやる気を出している。

「・・・ねえリース」

「なんだい？」

「変身して戦うってなったら差がありすぎると思っけどさ、スポー
ツって枠の中ならいい勝負が出来そうじゃない？」

アタシはぐるぐると肩を回す。

「珍しくやる気だね」

「これくらいの楽しみはあっても良いでしょ？」

リースに微笑みかけて、アタシとリースはコートに立った。

放課後。

「・・・それで、僅差で負けたのか」

俺たちは高校生チームと合流して、駄弁りながら歩き回っていた。

「行けると思ったんですけどね」

「次見返したりや。今日はワイがなんかおごったるさかい」

「本当ですか！？じゃああたし、『ゴールドモード』の十五段アイ
ス！！！」

「ちよ、響ちゃん。それは勘弁してえな・・・」
その時。

「ちよつと待ったああ！」

何者かが俺たちの前に立ちはだかった。

「なによあんだ」

「俺の名は英二！高岡 英二！誰よりも仮面ライダーを愛する男だ！」

・・・知らない奴ならこのまま無視できたのになあ。

「で？そんなあんさんがワイらに何の用や」

「実は俺、あんたらの仲間になりきたんだ。加音町を守る七人目の戦士にして、この世界三人目の仮面ライダーに」

・・・どこから突っ込めば良いかなあ・・・

「仲間になったら、何か良いことあるの？」

珍しく響が疑いから入った。

「そりやもう！俺が仲間になれば、もっともっと素晴らしいヒーロー&ヒーロインに慣れる！」

「素晴らしいヒーロー&ヒーロインって・・・？」

「赤ちゃんからお年寄りまで、すべての世代に親しまれる、清く正しく爽やかなヒーロー&ヒーロインの事だ！具体的にはこんな感じ！」

「やあみんな！僕は黒霧 琥珀！時々勢い付きすぎて、失敗もするけど・・・みんなの笑顔のために頑張るから、応援してね！
B A N G」

「僕は勇騎！野球が大好きで力持ち！！！」

「は~~~~い あたし琉歌 みんな、毎日ちゃんとごあいさつしてるかな~~~~？」

「あたし、北条 響！」

「私は南野 奏。・・・ねえ響・・・」

「あたしたちはいつもと変わんないね・・・」

「そして俺が、高岡 英二！地球の平和は、俺たちに任せろ！」

音先輩は大爆笑。残りは啞然。

「あひやひやひやひやひや！！！！『BANG』やて！『力持ち！』やて！『ごあいさつしてるかな？』やて！あゝおかし！キミ芸人になった方が良いわ！」

「・・・お前な、冷静に考えろ。お前外されてるぞ」

「・・・ってか、なにそれ。変すぎ」

「え！？」

「って言うか、性格とかヒーローするのに関係あるの？」

「ええ！？」

おーおー、ボロクソに言われてるな。

「なあ黒霧！お前なら分かってくれるだろ！？」

「決まってるだろ」

一気に明るくなる高岡。

「分からないし分かりたくもないね」

高岡がガツクリと崩れ落ちた隙に、俺たちはこの場から立ち去った。

一方その頃、セイレーン達のアジト。

『セイレーン！！！！』

「メ、メフィストさま！？一体どうなさったのですか！？」

備え付けられた鏡に、マイナーランドの王、メフィストの姿が現れた。

『いやなに、月は出ているかと思ってな』

「メフィストさま、まだ昼間です」

『そんな事よりもセイレーン！最近プリキュアや仮面ライダー、精霊騎士に響撃闘士とかいう輩どもに負け続きではないか！』

「そ、それは・・・」

『このままでは音符も全てプリキュアどもに取られ、不幸のメロディを完成させられなくなってしまうぞ！！！！』

「申し訳ありません・・・」

『そこでだ！そこに新リーダー、及び新メンバーを向かわせた！』

「新リーダーに新メンバー・・・ですか？」

『そうだ！これで音符集めもプリキュアもとの戦いももつともつと～～～～～～と有利になるに違いない！！！！』

そこで鏡の中のメフィストは消えた。

「・・・という訳で、わたくしがその新リーダーですわ」

アジトの入口に、ドクロの髪飾りを着けた女性が立っていた。

「わたくし、ルシフェルと申します。本日より新リーダーを務めさせて頂きます」

ルシフェルはツカツカとセイレーンたちに歩み寄る。

「他のメンバーは新アジトで待っています。その前に、言わなければならぬことが・・・」

「ただいま。。。セイレーン。。。まだシュークリームって余ってたっけ」

「言わなければならないことが・・・」

「あ、バリトン。牛肉って冷凍室に入ってたっけ。今日カレーにしようとおもっただけ・・・」

「言わなければ・・・」

「しまった、デザート買ってくるの忘れてた。みんな何食べる？」

「・・・人の話を聞きやがれですわこの野郎！」

「あら、お客様？じゃあ『ゴールドモード』でアイス買って来なきゃ・・・」

「だーから！人の話を聞きなさい！ヴァイジャヤ！！！」

この叫びでヴァイジャヤ・・・華那子はやっと止まる。

「誰？あなた」

「やっとうぎましましたわね・・・。わたくしはルシフェル。音符回収チームの新リーダーですわ」

華那子はルシフェルのある一点を見つめる。

「・・・この世界には、豊胸体操って言うのがあってね？」

「む、胸の事はどうでもよろしいですわ！それよりヴァイジャヤ！あなたをリストラいたします！」

「それは、この集団から・・・って事かしら？」

「その通りですわ！メフィスト様の崇高な目的を実現するために、あなたの様な存在は unnecessary です！」

「・・・そう。じゃあ失礼するわ。セイレーン、トリオ・ザ・マイナー、元気でね」

そう言って華那子は去っていった。

「・・・という訳で、居候させてもらうことになりました」

「・・・・・・・・・・もうどこからツッコメば良いのか分からない」

家に帰り、部屋に入ると、禍原先生が漫画を読みながらくつろいでいた。

「・・・バスロープで。」

話を聞くと、いろいろあつて住んでいたアパートを追い出され、不動産屋を何件もまわった後、コーヒーを飲もうとコンビニに入ったら強盗に出会い、そいつをねじ伏せて警察に突きだし、そうしたらたまたまそのコンビニに我が妹、刹那が居合わせ、うちの両親が「何かお礼を」と言い出し、現在に至るそうだ。
何をどうしたらそうなるのか。

『ねえねえ黒霧くん、一つ提案があるんだけど』

「・・・俺が相手で良かったですね。他の人だったら先生の括弧が裸エプロン先輩みたいになったのを気づきませんよ」

「おゝゝゝ、ハイスペック」

「役に立ちませんけどね」

「さて、ここから本題。やらないか？」

「やらねえよ！年齢差を考えましようよ年齢差を！」

「『ツッコミの能力には目を見張る物がある』って書いておくわね」
「何にですか」

「内申書」

・・・もつツツコむ気にもなれん・・・エロい意味ではなく。

「あの・・・いつまでこの部屋にいらつしゃるんですか？」

「んんん、一歩がゲドーに勝つまで」

つて事は83巻を読み終えるまで自分の部屋には帰らないと。

「因みに今何巻ですか？」

「4巻」

「はてしなっ！後何十巻もあるじゃないですか！・・・！」

「まあまあ」

「まあまあじゃないですよ！」

その時、ドアが開いた。

「失礼します。琥珀さま、夜這いにきまし・・・た・・・」

とんでもない事を抜かして麗花さんが入ってきて、バスローブ姿の禍原先生を見て固まった。

「・・・混ぜてください。というか三人でやりましょう三人で」

「・・・二人まとめて出てけけけ！！！！」

「それは大変だったな・・・」

次の日の放課後。

俺たち中学生組はしつこい高岡を振り切り、なんとか高校生組と合流した。

「家も学校も生きた心地がしないっすよ・・・」

最高に疲れてる。

そんな状況の中、本当にタイミングを図ったようにネガトーンが現れた。

「ネーガトーン!!!!」

今回はどうやら辞典を核にしてるらしい。

・・・勘弁してくれ。もう勘弁してくれよ。

とりあえずオーズドライバーを取り出し、タトバの三枚を装填。

他の皆も変身スタンバイをする。

「変身!」

「レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!!!」

「精霊よ我に力を、そなた等を襲う穢れを抜わん!はあああ!」

「アストラル!トランス・フォーメーション!その熱き鼓動を奏で表せ!!!」

【タカ!トラ!バッタ!!!!タ・ト・バ!タトバ!タ・ト・バ!!!】

いつもの様に、俺、琉歌先輩、キュアメロディ、キュアリズム、クルセイダーフォトン、アルムが並び立つ。

「この世にはびこ「ちよつと待ったああああ!!!!」・・・いいかげんにしてくれよ!」

口上を言おうとした俺たちの前に高岡が立つ。

「またあんた!?!」

「前に出てくるな、危ないぞ!」

「あのネガトーンは俺に任せろ!」

高岡はアクセルドライバーのハンドル無しバージョンって感じのベルトとガイアメモリを取り出す・・・ってなあ？

【Siege!!!】

「変・・・身！！！」

【Siege】

高岡はメモリをスロットに装填し、肩はギャレン、他のパーツはG3ってな感じの仮面ライダーに変身した。

「天が呼ぶ！地が呼ぶ！人が呼ぶ！悪を倒せと俺を呼ぶ！仮面ライダージーク！颯爽登場！！！」

・・・誰かこの状況を三行でまとめてくれないか？

俺たちが呆然とするなか、ジークに変身した高岡は拳銃のような物とメモリを取り出した。

【BLASTER】

メモリをグリップ下部に装填し、ネガトーンに銃身を向ける。

「ジークブラスター！！！！」

ジークブラスターなる拳銃から弾丸が発射され、ネガトーンを撃ち抜く。

「まだまだあ！」

【SHOT】

ジークブラスターの弾丸が散弾の様になり、ネガトーンの体全体に弾丸が当たる。

「あのブラスターってメモリ、ギジメモリなのか・・・」

「琥珀くん、ギジメモリって？」

しまった、軽くボロを出した。なんとか繕わなければ。

「翔太郎さんから聞いたんだ。Wの変身に使うような奴じゃなくて、ツールを起動するのに使うようなメモリの事をギジメモリって言うらしい」

「ふーん・・・」

危ない危ない。

「ネーガトーン！！！！」

「のわあっ!」

ジークが俺達の前に転がってくる。

「高岡くん、大丈夫!？」

「お疲れ様。後は俺たち専門家に任せなさいな」

俺は転がってる高岡を跨いでネガトーンと対峙する。

「男どもはオフエンス!あたしたち女子はバックアップ!いいわね
!!!」

「・・・エヴァ見ました？」

「いいから!ちゃっちゃんとやる!!!」

「・・・はいはい」

「一気に終わらせるか」

「いい加減しつこいからな」

「行くよ!ゲーエン!!!」

「!つけえええええ!!!!!!!」

【スキヤニングチャージ!!!】

「聖なる命の輝きが、邪悪な魂を討ち滅ぼす!」

「行くぜ、ショウダウン!!!」

「奏でましよう、奇跡のメロディ!ミラクルベルティエ!!!」

「刻みましよう、大なるリズム!ファンタスティックベルティエ
!!!」

「派手に消し飛べ!」

【cell burst】

全員が必殺技待機。

「行くぜ!タ・ト・バ!キイイック!!!」

「聖霊光!!!」

「アストラル・サウンディックノヴァ!!!」

「プリキュア!ミュージッククロンド!!!」

「シュートオオ!!!」

全員の必殺技がネガトーンに炸裂する!!!

「ネガ・・・トーン・・・」

ネガトーンは浄化され、音符と辞書に分離した。

「ニヤツプニヤプ」

ハミィが音符をフェアリートーンに入れる。

「久しぶりに見た」とか言っ
てはいけない。

カツン・・・カツン・・・カツン・・・

高く、冷たい足音。

俺が振り向くと、そこには・・・

「あれ、は・・・」

「あれ……もしかして仮面ライダー？」

「って事は、私たちの新しい仲間って事？」

違う、あれは……

「ダークキバに仮面ライダーキバーラ！？黒霧！」

「言われんでも!!!」

メダルをタジャドルの三枚に変える。

【タカ！クジャク！コンドル！！！タ〜ジャ〜ドル〜！！！！】

「うおおおおお！！！！！！！！！！」

あの二人は明らかに敵意を持っている。その上強い。それでもやらないけない。

俺は恐怖を振り払う様に走り出した。

転校生とアイドルと敵味方（後書き）

さーて・・・考えて頂いたオリキャラは上手く書けてるだろうか・

・

とりあえずライダーGX先生ごめんなさいm（――）m

英二を練りに練ったらタクトx鎧に・・・

さて、今回は新キャラ祭り後編です。

マベ「邪魔するぜ作者ア！」

・・・マベちゃん、ここは君の来るところでは・・・

ジョー「そんな事はどうでも良い」

ルカ「一体いつになったら劇場版更新するのよ！」

ハカセ「今回の話は劇場版の後になってるんだから、早く更新しないよ〜〜〜!!!!」

その・・・なかなか思い浮かばなくて・・・

ルカ「アイム、こうなったらあれやつちやいなさい」

アイム「承りました。『超忍法・猫耳』!!!!」

・・・一週間以内に更新します!!!!

琥珀「・・・なんだこのカオス」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3183r/>

加音町での転生生活

2011年9月3日00時13分発行